

キャンパスライフ

第22回学生生活実態調査報告書

平成17年3月

Campus Life



ま え が き

本学の学生生活実態調査は、約50年の歳月を経て、今回で22回目の調査となりました。この報告書は、昨年12月に本学の学生全員を対象にアンケート調査を行った結果をまとめたものです。これまでの調査では学生の約3割を抽出して調査しておりましたが、今回は全員を対象と致しました。

回収率は7割強ということで、本学の学生の学生生活の実態を学科単位で把握できる点が今回の特長のひとつとなっております。また、調査項目にも検討を加え、報告書としては全学データの分析を行い、学科レベルの詳細な事項はCDに収めて読みやすくする工夫もなされております。

近年、大学のユニバーサル化に伴い、学生が大学生活のなかで期待する要望は多岐にわたり変化が激しく、複雑で多様化してきております。これらの動向に、学部・学科といった組織単位で対応していただく場合の資料として、たとえば「オリエンテーション」や「大学入門講座」において学科単位の細かいデータをご活用いただければ幸いです。

学部教育は、初年次教育が特に大切であると言われております。できるだけ早い時期における学習意欲の創出が、学生一人ひとりのその後のキャンパスライフを豊かにします。また、本学の第一期基本計画でも、学生の能力開発の観点から、教育と学生支援を一体とした大学教育を推進し、健全な体と心を養い、学生が自立して学ぶ学習環境の実現を謳っております。この資料が、学生の貴重な意見や学部・学科への期待であることを真摯に受け止め、支援の現場でご活用いただけることを望んでおります。

最後に、本調査の企画・実施・分析は、すべて徳島大学学生支援センター学生生活支援室運営会議委員の各先生方や学務部職員の方々のご努力で短期間の間に実現いたしました。ここに、野間隆文委員長をはじめとする関係各位の並々ならぬご尽力に敬意を表すとともに深く感謝いたします。また、本調査に御協力下さった学生のみなさんにも、この場を通じて感謝いたします。

平成17年3月

徳島大学理事（教育担当）

川 上 博

目 次

まえがき	1
序 章 学生生活実態調査の概要	4
1 調査の目的	4
2 調査の組織	4
3 調査の対象及び方法	4
4 調査の時期	4
5 調査の内容	4
6 調査票の回収状況	4
7 図中の%表示	4
附表「平成16年度 学生生活実態調査票」	6
第1章 家族・住居状態、通学について	14
1-1 家庭の年間所得	14
1-2 住居区分	14
1-3 住居（部屋）の紹介・斡旋者	15
1-4 通学方法	15
第2章 収入・支出について	17
2-1 1ヶ月の平均収入額	17
2-2 支出額	17
2-3 経済状況	18
2-4 授業料免除	18
2-5 奨学金	19
2-6 アルバイト	19
2-7 アルバイト従事日数	19
2-8 アルバイト従事時間数	20
2-9 アルバイトの目的	21
2-10 アルバイトの種類	21
2-11 アルバイト収入	22
2-12 アルバイトの紹介者	23
2-13 トラブル	23
2-14 トラブルの内容	23
第3章 健康状態について	25
3-1 気になる症状	25
3-2 主な悩みや不安	25
3-3 悩み相談	26
3-4 現在の精神状態	26
3-5 保健管理センター	28
第4章 食事について	29
4-1 朝食	29

4-2	昼食と夕食	29
4-3	昼食の利用場所	30
4-4	弁当を食べる場所	30
4-5	学生食堂について感じる事	31
第5章	学生生活上の問題点	32
5-1	大学生活の意義	32
5-2	迷惑行為	33
5-3	教職員との交流	38
5-4	友人の存在	41
5-5	大学事務室の対応への満足度	41
5-6	盗難等犯罪被害	42
第6章	修学・進路状況	44
6-1	本学を選んだ理由と所属学部の満足度	44
6-2	単位取得状況と授業出席状況	44
6-3	授業の満足度	48
6-4	授業予習復習時間とカンニング経験	49
6-5	図書館の利用状況	50
6-6	進路選択の方法	50
第7章	課外活動について	52
7-1	サークル加入状況	52
7-2	活動状況	53
7-3	加入の動機	54
7-4	サークルに加入していない理由	55
7-5	学生行事	57
7-6	大学祭への参加状況	59
7-7	ボランティア活動	60
7-8	学生の修学状況と課外活動	61
第8章	就職について	62
8-1	希望する職種	62
8-2	就職セミナーへの参加について	62
8-3	就職支援室の利用状況	63
8-4	就職情報の入手方法	64
第9章	学部の現状と課題	65
9-1	総合科学部	65
9-2	医学部	66
9-3	歯学部	67
9-4	薬学部	68
9-5	工学部	69
第10章	総括と提言	71
	あとがき	73

序章 学生生活実態調査の概要

1. 調査の目的

この調査は、本学学生の生活の実状を把握し、今後の福利厚生施設等の改善並びに修学支援に資する基礎資料を得ることを目的として実施した。

2. 調査の組織

この調査は、徳島大学学生支援センター学生生活支援室運営会議の次の委員が中心となり調査を実施し、分析作業を行った。

区 分	氏 名	所 属	職 名
委 員 長	野 間 隆 文	大学院ヘルスバイオサイエンス研究部	教 授
委 員	石 村 和 敬	”	教 授
委 員	北 村 清一郎	”	教 授
委 員	落 合 正 仁	”	教 授
委 員	立 花 敬 雄	総 合 科 学 部	教 授
委 員	竹 内 美恵子	医 学 部	教 授
委 員	小 西 克 信	工 学 部	教 授

3. 調査の対象及び方法

この調査は、本学に在学する学部学生全員 5,904 人（平成 16 年 12 月 1 日に在籍する者のうち休学者を除いた者）を調査対象とした。

調査方法は、各学部の学務（教務）係及び学生委員会委員の協力を得て調査票を配布し、回答用紙（マークシート）を回収した。

4. 調査の時期

この調査は、平成 16 年 12 月 1 日から 12 月 10 日まで実施し、12 月 1 日現在の実状について回答を依頼し、回答用紙の提出期限を 12 月 13 日までとした。

5. 調査の内容

調査項目は、調査の継続性も考慮しながら必要な見直しを行い、調査項目を精選するとともに図書館や学生相談室の利用、食事の取り方等新たな項目を追加した。

6. 調査票の回収状況

調査票の回収状況は、調査対象者 5,904 人のうち回答数は 4,218 人で、回収率は 71.4 %であった。学部・学科別、学年別、男女別の回収状況は次表のとおりである。

7. 図中の％表示

端数処理の関係で合計が 100%にならない場合がある。

学生生活実態調査票の回収状況

<学部・学科別>

学 部	学 科	対 象 者 数	回 収 数	回 収 率(%)
総 合 学 部	人 間 社 会 学 科	759	445	58.6
	自 然 シ ス テ ム 学 科	366	200	54.6
	計	1,125	645	57.3
医 学 部	医 学 科	570	391	68.6
	栄 養 学 科	207	181	87.4
	保 健 学 科	382	333	87.2
	計	1,159	905	78.1
歯 学 部	歯 学 科	359	334	93.0
薬 学 部	薬 学 科	171	152	88.9
	製 薬 化 学 科	169	141	83.4
	計	340	293	86.2
工 学 部	建 設 工 学 科	438	317	72.4
	機 械 工 学 科	579	431	74.4
	化 学 応 用 工 学 科	399	319	79.9
	電 気 電 子 工 学 科	551	381	69.1
	知 能 情 報 工 学 科	436	290	66.5
	生 物 工 学 科	309	208	67.3
	光 応 用 工 学 科	209	95	45.5
	計	2,921	2,041	69.9
合 計		5,904	4,218	71.4

<学年別>

学 年	対 象 者 数	回 収 数	回 収 率
1 年	1,403	1,064	75.8
2 年	1,422	1,012	71.2
3 年	1,407	1,010	71.8
4 年	1,358	885	65.2
5 年	147	123	83.7
6 年	167	124	74.3
計	5,904	4,218	71.4

<男女別>

学 部	回 収 率		
	男	女	計
総合科学部	51.9	59.9	57.0
医学部	68.6	84.1	77.2
歯学部	90.2	92.9	91.4
薬学部	80.0	89.7	85.3
工学部	67.3	80.9	68.9
計	67.6	76.3	70.6

注) 男女別の表において、回収率が学部・学科別及び学年別と異なるのは、回収したマークシートの男女識別不可数(50人)を除いて算出したためである。

平成 16 年度 学生生活実態調査

平成 16 年 11 月
徳 島 大 学

お 願 い

この調査は、みなさんの学生生活を把握し、今後の福利厚生施設等の改善並びに修学指導に資する基礎資料を得ることを目的として実施するものです。

本調査は、平成 16 年 12 月 1 日現在、本学に在学する学部学生全員を対象に行います。マークカードに無記名で記入していただき、他の目的に使用することはありませんので、ありのままを正確にお答えください。

質問事項も多く、大変とは思いますが、この調査の趣旨をご理解のうえ、ご協力をお願いします。

[調査実施期間 12 月 1 日～ 12 月 10 日]

**回答用紙(マークカード)の提出期限は、12 月 13 日(月)です。
所属学部の学務(教務)係へ提出して下さい。**

回答記入上の注意事項

- 1 平成 16 年 12 月 1 日現在で記入して下さい。
- 2 回答用紙はマークカードです。回答内容の該当するものを一つだけ選んで、その番号を塗りつぶして回答して下さい。
ただし、複数回答可を指定している場合は、複数選んでも差し支えありません。
- 3 質問中、回答者を指定している箇所は、指定された人のみ回答して下さい。
- 4 マークカードの裏面に自由記入欄を設けていますので、大学内における学生生活全般について、気づいたことや要望したいこと、あるいは期待することがあれば、自由に記入して下さい。
- 5 *は、前回からの継続調査項目です。

学生生活実態調査票

A. 基本事項について

1 *	【全員】 性別はどちらですか。	1. 男 2. 女
2 *	【全員】 所属学部はどこですか。	1. 総合科学部 2. 医学部 3. 歯学部 4. 薬学部 5. 工学部（昼間コース） 6. 工学部（夜間主コース）
3 *	【全員】 学科はどこですか。	総合科学部 〔1. 人間社会学科 2. 自然システム学科〕 医学部 〔1. 医学科 2. 栄養学科 3. 保健学科〕 歯学部〔1. 歯学科〕 薬学部〔1. 薬学科 2. 製薬化学科〕 工学部 〔1. 建設工学科 2. 機械工学科 3. 化学応用工学科 4. 電気電子工学科 5. 知能情報工学科 6. 生物工学科 7. 光応用工学科〕
4 *	【全員】 何年生ですか。	1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

B. 家族・住居状態、通学について

5 *	【全員】 あなたの家庭の年収（税込）はどれくらいですか。 H.15年12月～H.16年11月	1. 500万円未満 2. 500～750万円 3. 750～1,000万円 4. 1,000～1,500万円 5. 1,500万円以上
6 *	【全員】 あなたの住居区分はどれですか。	1. 自宅（家族と同居） 2. アパート（家族と別居） 3. マンション（家族と別居） 4. 学生寮 5. 間借り 6. 親戚・知人宅 7. その他
7 *	【学生寮居住者を除く自宅外通学者】 住居（部屋）の紹介・斡旋者は誰ですか。	1. 徳大生協 2. 徳大教員 3. 友人・先輩 4. 不動産業者 5. 新聞・雑誌 6. その他
8 *	【全員】 あなたの主な通学方法は何かですか。	1. 徒歩 2. 自転車 3. バイク（原付自転車・自動二輪） 4. 自動車 5. バス・JR

C. 収入・支出について

9 *	【全員】 あなたの1か月の平均収入額はいくらですか。	1. 3万円未満 2. 5万円未満 3. 7万円未満 4. 10万円未満 5. 15万円未満 6. 20万円未満 7. 25万円未満 8. 30万円未満 9. 30万円以上
10 *	【全員】 あなたの1か月の平均支出額はいくらですか。	1. 3万円未満 2. 5万円未満 3. 7万円未満 4. 10万円未満 5. 15万円未満 6. 20万円未満 7. 25万円未満 8. 30万円未満 9. 30万円以上

11	【全員】 * 現在の経済状況について	1. ゆとりがある（家計支持者からの仕送りのみ） 2. 普通（あまり不自由を感じない） 3. やや苦しい（奨学金あるいは軽度のアルバイトで充足できる） 4. 大変苦しい（定期的なアルバイトが必要である）
12	【全員】 * 授業料免除の有無 （平成16年度前期分について記入すること）	1. 全額免除 2. 半額免除 3. 不許可 4. 申請しなかった
13	【全員】 * 奨学金を受けたいことを希望しますか。	1. 現在受給中であるが、更に希望する 2. 現在受給中であるが、次は希望しない 3. 現在受給していないが、希望する 4. 現在受給していないし、希望もしない
14	【全員】 * 現在、アルバイトをしていますか。	1. はい 2. いいえ
15	【問14で「1」を選んだ方】 * ①1週間の平均従事日数は何日ですか。	1. 1日 2. 2日 3. 3日 4. 4日 5. 5日以上
16	* ②1週間の従事時間は合計何時間ですか。（移動に要する時間も含む）	1. 5時間未満 2. 5～10時間未満 3. 10～15時間未満 4. 15～20時間未満 5. 20～25時間未満 6. 25時間以上
17	* ③アルバイトは主にどのような目的でしていますか。 （複数回答可）	1. 生活費や学費のため 2. レジャー・旅行費のため 3. 日常の娯楽・嗜好品等のため 4. 高額商品（自転車・パソコン等）購入のため 5. 課外活動費のため 6. 社会体験のため 7. その他
18	* ④どのようなアルバイトをしていますか。 （複数回答可）	1. 家庭教師・学習塾講師等 2. 会場設営・撤収、搬入搬出 3. 調査 4. 受付・接客 5. イベントスタッフ補助 6. 商品販売 7. 商品等整理・包装 8. 飲食店等手伝い 9. 駐車場整理員 10. その他
19	* ⑤あなたのアルバイトによる収入（1か月平均）はいくらですか。	1. 3万円未満 2. 5万円未満 3. 7万円未満 4. 10万円未満 5. 15万円未満 6. 15万円以上
20	* ⑥そのアルバイトはどこで（誰に）紹介してもらいましたか。 （複数回答可）	1. 学務部 2. 友人・先輩 3. アルバイト情報誌・新聞等の広告・チラシ 4. 教員 5. 家族 6. 自分で開拓 7. その他
21	* ⑦アルバイトをしたことがある人でトラブルを経験したことがありますか。	1. はい 2. いいえ
22	* ⑧前問で「1」を選んだ方は、どのようなトラブルですか？ （複数回答可）	1. 給料の不払い 2. 給料が契約より低かった 3. 客とのトラブル 4. 解雇 5. 雇用者との意見の不一致 6. 事故・ケガ 7. その他

D. 健康状態について

23	【全員】 * 現在気になる症状はありますか。	1. ない 2. 時々ある 3. 常にある
24	【全員】 * 悩みや不安は主にどんなことですか。 (複数回答可)	1. 経済状態 2. 勉学 3. 交友・異性関係 4. 身体的不調 5. 家族関係 6. サークル活動 7. 自分の性格 8. 就職や進路 9. 生き甲斐や目標 10. その他
25	【全員】 * 悩み事は誰に相談しますか。 (複数回答可)	1. 友人 2. 家族 3. 教員 4. 学生相談室 5. 学務(教務)係 6. その他 7. 誰にもしない
26	【全員】 * 現在の精神状態について	1. 充実している 2. いらいらする 3. なんとなく不安 4. 落ち込みやすい 5. やる気が出ない 6. その他
27	【全員】 保健管理センターについて感じているのはどれですか。 (複数回答可)	1. 行ったことがある 2. 場所を知らない 3. 遠く不便 4. 職員の対応は早い 5. 体調が悪い時には必ず行く 6. 特にな 7. その他

E. 食事について

28	【全員】 * 朝食を取りますか。	1. 毎日 2. 時々 3. ほとんど取らない
29	【全員】 * 昼食を取りますか。	1. 毎日 2. 時々 3. ほとんど取らない
30	【全員】 * 夕食を取りますか。	1. 毎日 2. 時々 3. ほとんど取らない
31	【全員】 昼食は主にどこを利用していますか。	1. 常三島第1食堂(生協)を利用 2. 常三島第2食堂(工学部構内)を利用 3. 蔵本会館食堂を利用 4. 弁当を購入 5. 自宅(下宿) 6. その他
32	【問31で「4」を選んだ方】 どこで食べていますか。	1. 教室 2. 建物外 3. 自宅(下宿) 4. その他
33	【全員】 学生食堂について感じていることはどれですか。 (複数回答可)	1. メニューが豊富 2. 昼食時の混雑がひどい 3. 比較的low価格 4. 開店時間は適当 5. 場所が不便 6. 特にな 7. その他

F. 学生生活上の問題点

34 *	【全員】 あなたは、大学生活で何を第一においた生活をしていますか。	1. 勉強や研究 3. 趣味・娯楽 5. 将来を考えた資格等の取得 7. 特に重点もなく程々に 9. その他	2. サークル活動 4. 豊かな人間関係を結ぶこと 6. アルバイト 8. ただ何となく
35 *	【全員】 あなたは、クーリング・オフの制度について知っていますか。	1. はい 2. いいえ	
<p style="text-align: center;">クーリング・オフとは</p> <p>普通、一度成立した契約は一方的に解消できないが、分割払いの割賦販売、セールスマンによる訪問販売などで勧誘にのせられ、つい不要なものの購入契約をした消費者が、一定の期間（通常8日間）内なら違約金無しに契約の解除（契約申し込みの解除）ができるという制度。</p>			
36 *	【全員】 あなたは、これまで迷惑行為を受けたことがありますか。 〈複数回答可〉	1. 受けたことはない 3. いたずら電話を受けた 5. 大学内でセクハラを受けた 7. その他	2. 悪徳商法に引っかかった 3. ストーカーにあった 6. 大学内でアカハラを受けた
<p style="text-align: center;">アカハラ（アカデミック・ハラスメント）とは</p> <p>大学などで、指導教員が学生に対し、教育・研究活動への妨害を含めた学習・研究上の嫌がらせを継続的に行うこと。</p>			
37 *	【問36で「5」を選んだ方】 誰に相談しましたか。	1. 友人 4. 学生相談室 7. 誰にもしない	2. 家族 5. 学務（教務）係 6. その他
38 *	【問36で「6」を選んだ方】 誰に相談しましたか。	1. 友人 4. 学生相談室 7. 誰にもしない	2. 家族 5. 学務（教務）係 6. その他
39	【全員】 学生相談室を利用したことがありますか。	1. 利用したことがある 3. 学生相談室を知らない	2. 利用したことがない 4. 今後何かあれば利用してみたい
40 *	【全員】 あなたは、今年度中に教員と話しや質問をしたことがありますか。	1. 全くない 3. 2～3回程度したことがある 4. 4～6回程度したことがある 5. 7回以上したことがある	2. 1回はある
41 *	【全員】 あなたには、親しい教職員はいますか。	1. はい 2. いいえ	
42 *	【全員】 あなたには、親しい友人はいますか。	1. はい 2. いいえ	
43	【全員】 大学事務室の対応に満足していますか。	1. 満足している 3. どちらともいえない 5. 不満足である	2. やや満足している 4. やや不満足である

44 *	【全員】 あなたは、入学以来、盗難（盗み）、強盗、傷害、痴漢事件の被害に遭ったことがありますか。	1. はい 2. いいえ
45 *	【問44で「1」を選んだ方】 あなたが被害に遭ったのは次のどれですか。 〈複数回答可〉	1. 盗難（盗み） 2. 強盗 3. 傷害 4. 痴漢 5. その他
46 *	【問44で「1」を選んだ方】 あなたは、どこで盗難（盗み）等の被害に遭いましたか。 〈複数回答可〉	1. 大学構内 2. 自宅、アパート 3. その他

G. 修学・進路状況

47 *	【全員】 あなたが本学を選んだ主な動機は何ですか。 〈複数回答可〉	1. 地元の大学だから 2. 親や親戚に進められたから 3. 高校の進学指導による 4. 希望する学部・学科があったから 5. 就職等将来を考慮して 6. 国立大学だから 7. ただ何となく 8. 先輩や友人に勧められて 9. その他
48 *	【全員】 あなたは所属している学部・学科に満足していますか。	1. 満足している 2. やや満足している 3. どちらともいえない 4. やや不満足である 5. 不満足である
49 *	【全員】 これまでの単位の取得状況はどうですか。	1. 全部取得できた 2. ほとんど取得できた 3. 半分程度取得できた 4. あまり取得できなかった 5. 全く取得できなかった
50 *	【全員】 授業によく出席していますか。	1. 全部出席している 2. ほとんど出席している 3. 出たり出なかつたりしている 4. ほとんど出席していない 5. 全く出席していない
51 *	【問50で「3～5」を選んだ方】 授業を欠席する理由はどれに当たりますか。 〈複数回答可〉	1. 勉学の意欲がわからない 2. 授業に魅力がない 3. 授業が理解できない 4. その他
52 *	【問51で「3」を選んだ方】 あなたは、授業内容が理解できなかった場合、どのようにしていますか。 〈複数回答可〉	1. 教室で質問する 2. 教員に後で個人的に質問する 3. 先輩・友人と議論・相談する 4. 参考書等で調べる 5. 気になるけど何もしない 6. 気にしない 7. その他
53 *	【全員】 あなたは、受講している授業に満足していますか。	1. 満足している 2. やや満足している 3. どちらともいえない 4. やや不満足である 5. 不満足である

54 *	【問53で「3～5」を選んだ方】 授業が満足できない理由は何ですか。 (複数回答可)	1. 授業内容が難し過ぎて理解できない 2. 授業内容がつまらない 3. 教員の教え方に工夫が足りない 4. 受講者が多すぎて精神集中できない 5. 休講が多すぎる 6. 試験・レポートが多すぎる 7. 単位認定が厳しすぎる 8. その他
55 *	【全員】 あなたは、1日平均何時間ぐらい授業の予習・復習をしていますか。 ただし、試験期間中は除いて下さい。	1. 1時間未満 2. 1時間以上～2時間未満 3. 2時間以上～3時間未満 4. 3時間以上～4時間未満 5. 4時間以上～5時間未満 6. 5時間以上
56 *	【全員】 あなたは、カンニングをしたことがありますか。	1. はい 2. いいえ
57	【全員】 図書館を利用していますか。	1. 毎日 2. 週2, 3回程度 3. 週1回程度 4. 月2, 3回程度 5. 月1回程度 6. 利用しない 7. その他
58	【全員】 図書館について感じていることはどれですか。 (複数回答可)	1. 蔵書の種類や数に満足 2. 貸し出し・返却が容易 3. 図書館案内が充実している 4. 図書館員にたずねやすい 5. 開館時間が短い 6. 資料のコピーがとりやすい 7. 特にな 8. その他
59 *	【全員】 進路選択で重視するものは何ですか。 (複数回答可)	1. 収入 2. 就職先の将来性・安定性 3. 社会的評価 4. 能力を発揮できること 5. 勤務地の地理的条件 6. 研究評価をしてもらえるところ 7. 先端技術を駆使しているところ 8. 人間関係の良いこと 9. その他
60 *	【全員】 進路を考える上での情報入手手段は何ですか。	1. 指導教員 2. 就職担当教員 3. 先輩・知人 4. 直接会社に照会 5. 就職情報誌・新聞・マスコミ 6. 家族等 7. 大学内資料 8. その他

H. 課外活動について

61 *	【全員】 学内外のサークル（以下同好会を含む）に加入していますか。（文化系及び体育系サークルの両方に加入している人は、主として活動している方に回答する）	1. 学内の文化系サークルに加入している 2. 学内の体育系サークルに加入している 3. 学外の文化系サークルに加入している 4. 学外の体育系サークルに加入している 5. 以前加入していたが現在は加入していない 6. 加入したことがない
62 *	【問61で「1～4」を選んだ方】 サークルでの活動状況はどうですか。	1. かなり熱心に活動している 2. まあまあ熱心に活動している 3. どちらともいえない 4. あまり活動していない 5. ほとんど活動していない 6. その他

63 *	【問61で「1～4」を選んだ方】 サークルに加入した主な動機は何ですか。	1. サークルの活動内容に魅力があったから 2. 集団活動に魅力があったから 3. 友人を得るため 4. 先輩・友人に勧められたから 5. 学生生活を豊かにするため 6. 健康増進のため 7. 自分の特技を伸ばすため 8. 自分の短所を補うため 9. その他
64 *	【問61で「5, 6」を選んだ方】 サークルに加入していない主な理由は何ですか。	1. 学業の妨げとなる 2. 練習がいやである 3. 活動するための体力・能力に自信がない 4. 個人の自由が束縛される恐れがある 5. 集団生活についていけない 6. アルバイトをしているので時間的余裕がない 7. 通学に時間がかかるので時間的余裕がない 8. 個人の金銭的負担が多すぎる 9. 魅力的なサークルがない 10. 特に理由はないが何となく
65 *	【全員】 新入生歓迎会や大学祭などの学生行事についてどのように考えていますか。	1. 必要だし積極的に参加している 2. 必要だがあまり参加していない 3. どちらでもいい 4. なくてもいい
66 *	【全員】 あなたは今年の大学祭に参加しましたか。	1. はい 2. いいえ
67 *	【全員】 あなたは、大学入学後ボランティア活動をしたことがありますか。	1. 個人でしたことがある 2. 団体（組織）に入っていたことがある 3. ない

I. 就職について

68 *	【全員】 希望職種は何ですか。 〈複数回答可〉	1. 大学・官公庁の教育・研究職 2. 1以外の公務員 3. 技術職 4. 事務職 5. 企業等の研究職 6. 教育職 7. マスコミ関係 8. 専門職（医師等） 9. その他
69 *	【全員】 大学が行う就職セミナーに参加しますか。	1. 参加する 2. 時間があれば参加する 3. 参加しない
70 *	【全員】 本学の就職支援室を利用したことがありますか。	1. 現在も利用している 2. 以前に利用したことがある 3. 利用したことがない
71 *	【学部卒業予定者のうち、就職希望者の方】 就職に際して、会社等の情報をどのように入手しましたか。 〈複数回答可〉	1. 就職担当教員 2. 就職支援室の情報・就職の手引き 3. 新聞・就職情報誌 4. インターネット 5. ダイレクトメール 6. 直接会社等に照会 7. 会社等説明会 8. 先輩・知人 9. 親・親戚 10. その他

ご協力ありがとうございました

第1章 家族・住居状態，通学について

1-1 家庭の年間所得 (図1-1)

家庭の年間収入について、大学全体では500万円未満(29%)と500～750万円(28%)が過半数を占め、次いで750～1000万円(20%)、1000～1500万円(11%)、1500万円以上(5%)である。前回(平成13年8月)の調査時に比べて、全体に低い方にシフトしている。このことは、この数年間の日本全体の経済状態を反映したものと考えられる。また、500万円未満のグループについて男女別に見てみると、男子が30%であるのに対し、女子は24%とやや差がある。他の年収グループでは男女間に大きな差はないから、年収500万円未満の家庭では女子の大学進学にやや消極的なのかも知れない。

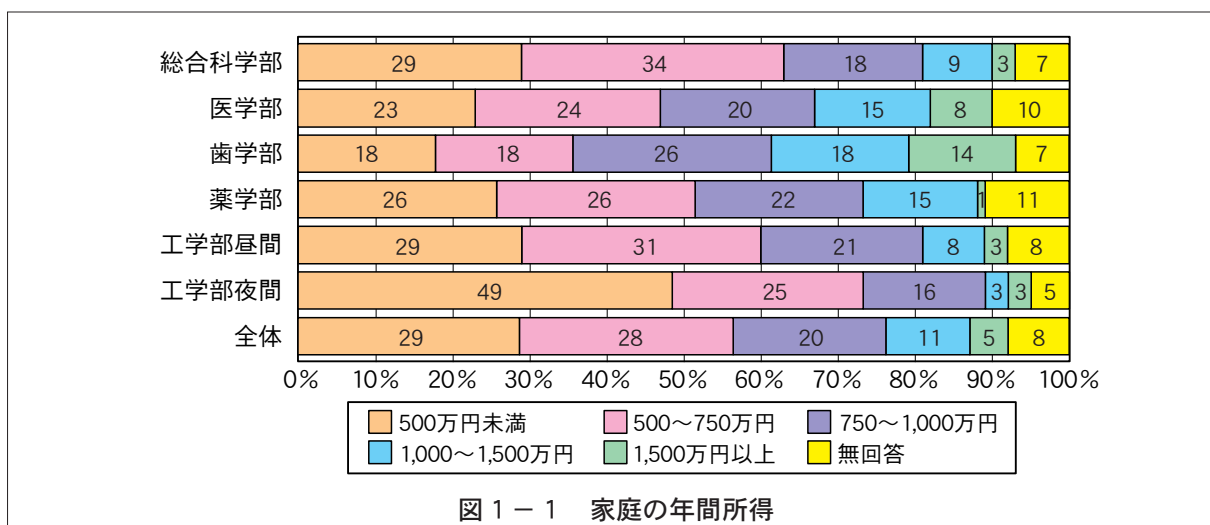


図1-1 家庭の年間所得

学部別に見ると、歯学部では全体に高収入のほうへシフトしているが、それでも年収500万円未満の学生が18%ある。さらに、工学部の夜間主コースでは500万円未満がほぼ50%を占める。

次の2章で出てくる「経済状況」において「大変苦しい」と答えている学生の多くは、年収500万円未満のグループに属すると考えられる。授業料免除や奨学金貸与の参考資料とするために、今後の調査では、年収の低いグループについてももう少し細かく分析できるようにすべきであろう。

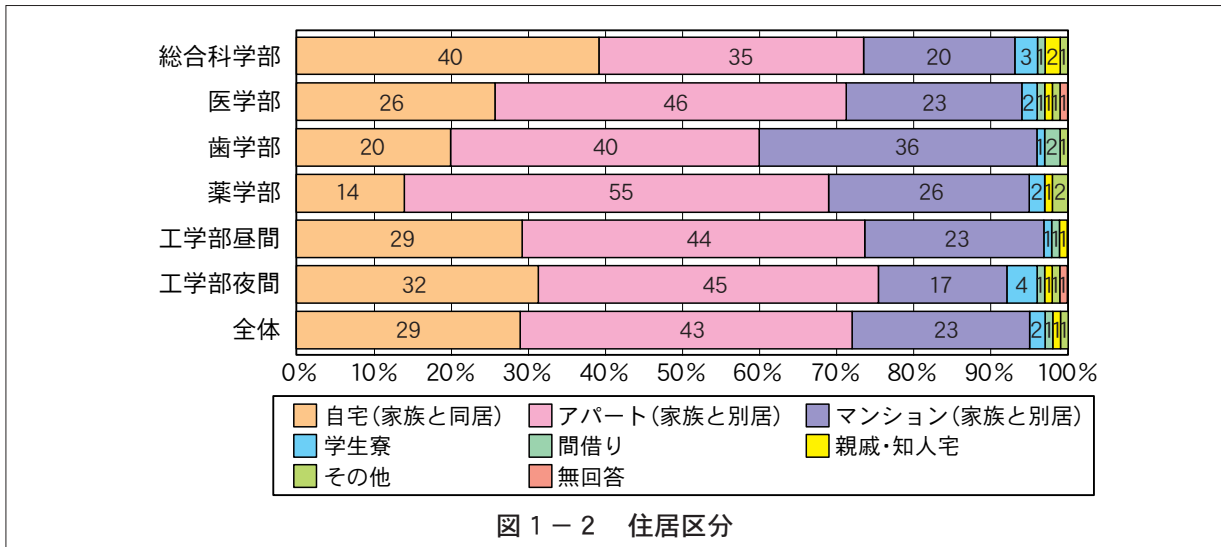
1-2 住居区分 (図1-2)

全体では、最も多いのがアパート(43%)、次いで自宅(29%)、マンション(23%)となっている。学生寮に住んでいるのは2%、実数で83名である。間借、親戚・知人宅はいずれも少なく、それぞれ1%ほどである。前回調査結果と比べると、自宅の比率はほとんど同じであるが、アパート居住者の比率が増え(36%→43%)、マンション居住者は減少している(29%→23%)。男女別で見ると、全男子回答者のうち48%がアパート、次いで26%が自宅、21%がマンションとなっている。女子では35%がアパート、33%が自宅、26%がマンションである。女子で自宅が多いのは、進学に際して地元の徳島大学を選ぶ傾向が強いことと関係しているのであろう。

学部別では、総合科学部生で自宅の割合(40%)が、また、歯学部生でマンションの比率(36%)がやや高い。これも前回の傾向と同じである。

前回および今回の調査でアパートとマンションを区別したが、両者の区分は必ずしも明確なものではない。むしろ、今後は自宅か自宅外か、自宅外の場合に住居費がどれくらいの負担になっているかなど

を中心に調査すべきであろう。



1-3 住居(部屋)の紹介・斡旋者

学生寮を除く自宅外通学者の住宅斡旋者としては、不動産業者47%と徳大生協44%で全体の90%を占め、前回の調査時の83%より増えている。不動産業者が徳大生協をやや上回っている点は前回と同じである。男女別で見ると、女子の50%が不動産業者であるのに対し、徳大生協は39%である。男子では両方ともほぼ同じである。女子で不動産業者に斡旋を頼む傾向が強いのは前回の調査でも出ている。不動産業者の方が女子学生の希望に合う物件を多くもっているという前回の見解は妥当なものと思われる。

学部別では医学部医学科で不動産業者による斡旋の比率が高い(58%)。これは、徳大生協が斡旋できる住宅が医学部のある蔵本地区に少ないことと関係しているとも思われるが、条件の同じ歯学部、薬学部などではその傾向がなく、詳しい理由は不明である。

今後の調査では住居を探す上で困難があったかどうか、特に新入生についてどのような情報が必要であったか等をたずね、大学でできることを考えていくべきであろう。

1-4 通学方法 (図 1-3)

自転車通学が66%で最も多い。次いで、バイク、自動車がいずれも11%、JR、バスなどの公共交通機関を利用する者が6%、徒歩5%となる。自転車通学について学部別で見ると、薬学部が81%で最も高く、総合科学部の63%、工学部夜間主コースの62%が低い。前回の調査時に比べて、自転車通学の割合が高く、他の方法が低い数値になっている。いずれにせよ、自転車で通学できる範囲内に住んでいる学生が多いということである。ただ、この確認のためには通学時間を同時に調査しておく必要がある。今後の調査における検討課題であろう。

通学方法の結果において問題点をあげるとするならば、これだけの学生が自転車で通っているにも関わらず、大学構内にそれだけの駐輪スペースが確保されているか、ということである。特に蔵本地区の薬学部、歯学部周辺は自転車が路上にあふれ、歩行に支障をきたすほどで、これは早急に対処すべき課題である。回答者に占める自転車通学者の比率を単純に蔵本地区の全在学生に当てはめると、約1,300台分の駐輪場が必要となる。駐輪場の位置を明確にするために常三島キャンパスで用いられている駐輪マークの導入などの工夫が必要である。

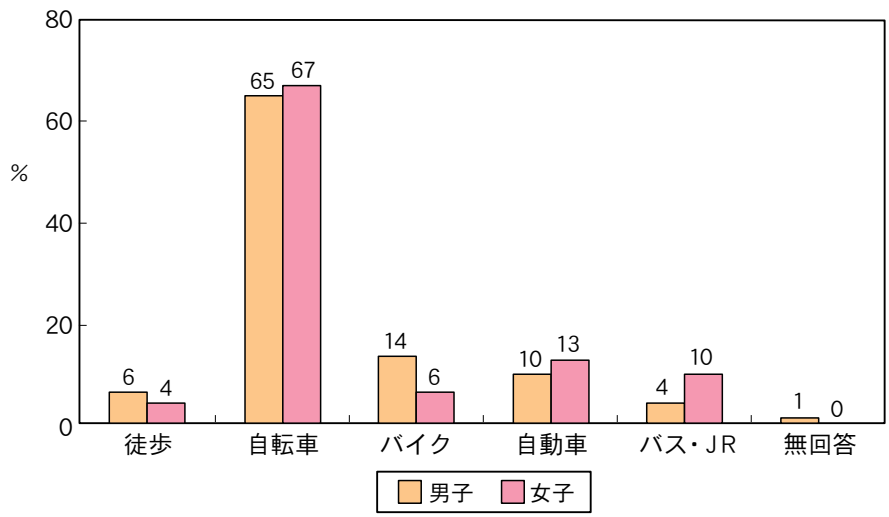


図 1 - 3 通学方法

第2章 収入・支出について

2-1 1ヶ月の平均収入額 (図2-1)

1ヶ月の収入合計の平均は3万円未満の人が最も多く28%で、次いで7～10万円の人が20%、以下、10～15万円17%、3～5万円16%、5～7万円13%となっている。今回のデータからは、住居区分との関係が明らかでないが、3万円未満の28%という数字は自宅通学者の割合とほぼ一致する。大体は10万円前後で生活しているということであろう。男女別で見ると、やや女子で収入が多い傾向がある。

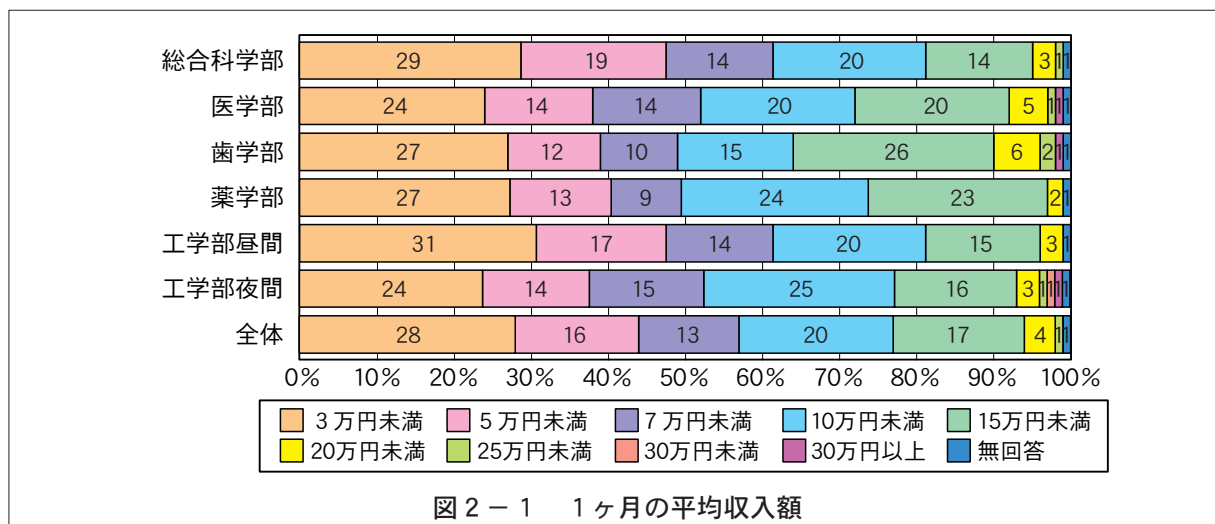


図2-1 1ヶ月の平均収入額

学部別では、医学部医学科、栄養学科、歯学部で10～15万円の人比率が高い傾向がある。工学部夜間主コースでも同じであるが、働いている人が多いので当然であろう。

今後の調査では、この収入が家計支持者からの仕送りか、アルバイト収入か、これらの両者か等たずねたほうがよいと思われる。

2-2 支出額 (図2-2)

支出額は3～5万円と7～10万円の人が、それぞれ23%と24%を占め、次いで3万円未満の人が19%、5～7万円の人が18%である。2-1で収入が3万円未満と回答した人が28%、実数で1,154

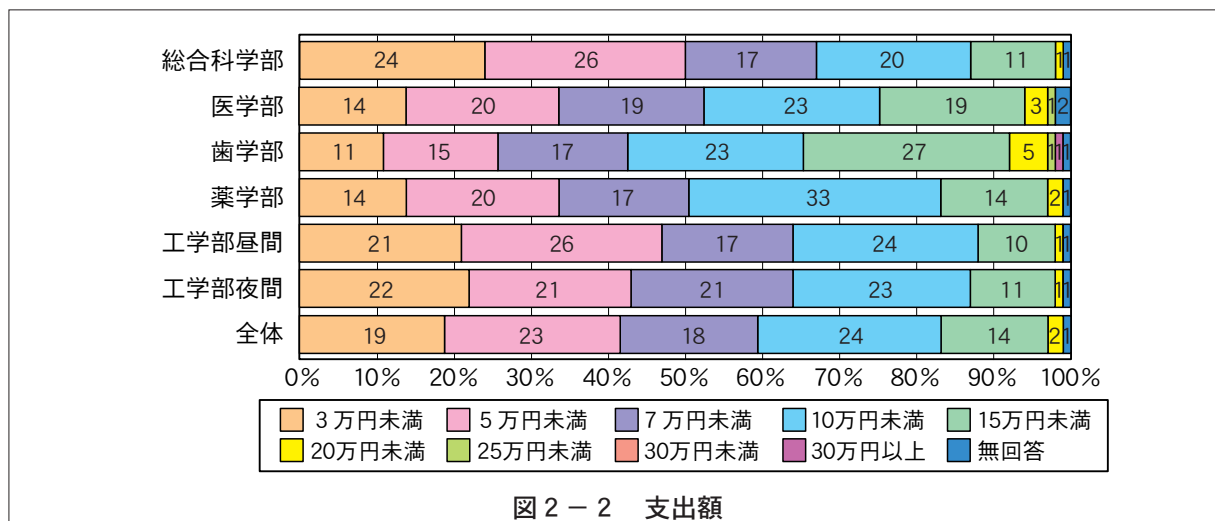


図2-2 支出額

人あったのに対して、支出で3万円未満と回答した人は19%、実数で791人となっている。少ない中で貯金しているのであろうか。

今回の調査では支出の中に授業料を含めているかいないかがわからない。今後は授業料を含めるかどうか明記すべきであろう。また、授業料以外に教科書代等にどれくらいかかっているかも大学としては知っておくべきであろう。

2-3 経済状況 (図2-3)

「ゆとりがある(家計支持者からの仕送りのみ)」は12%(前回17%)、「普通(あまり不自由を感じない)」が49%(前回48%)で、この2グループで61%(前回65%)を占める。「やや苦しい(奨学金あるいは軽度のアルバイトで充足できる)」が28%(前回25%)、実数で1,148人ある。「大変苦しい(定期的なアルバイトが必要である)」は11%(前回10%)、実数459人である。前回の調査の結果と比べ、少しではあるが、「苦しい」ほうにシフトしている。これも、日本の経済全体の状況を反映しているものと考えられる。前回の調査と同じく、男女差はない。

学部別で見ても、全体の傾向と大きく異ならない。ただ、「大変苦しい」が、工学部夜間主コースで16%と高い。これに対して、薬学部では7%と最も低い。

大学として考慮すべきは「大変苦しい」と回答した学生諸君への対応である。全体の結果の11%を全在生に単純に当てはめると約650人となる。その内容をさらに調査し、解析する必要があるが、大学としては、これらの学生諸君をどのように支援していくかが課題である。

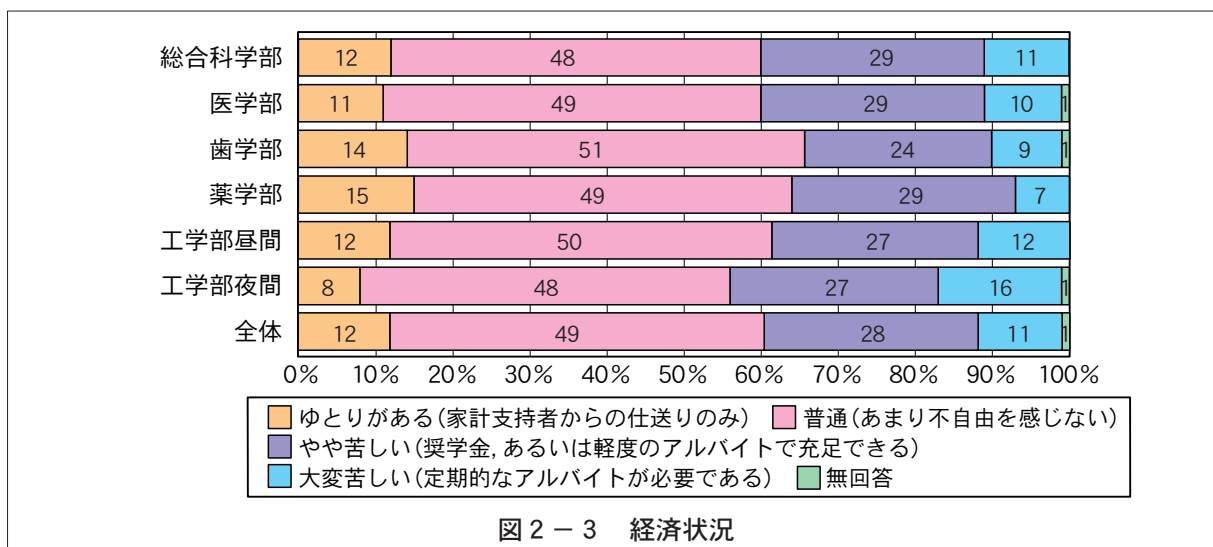


図2-3 経済状況

2-4 授業料免除

平成16年度授業料免除状況調によると、前後期合わせて全学部で822件の申請が出ている。前後期ともほぼ同一の人が申請したと考えると411名、すなわち、在学生の約7%が申請したことになる。申請者の比率について各学部間で大きな差はなく、総合科学部8%、医学部7%、歯学部8%、薬学部6%、工学部昼間7%、工学部夜間6%となっている。申請者のうち、全額免除が認められたのは全体で55%、半額免除は11%、不許可が33%である。

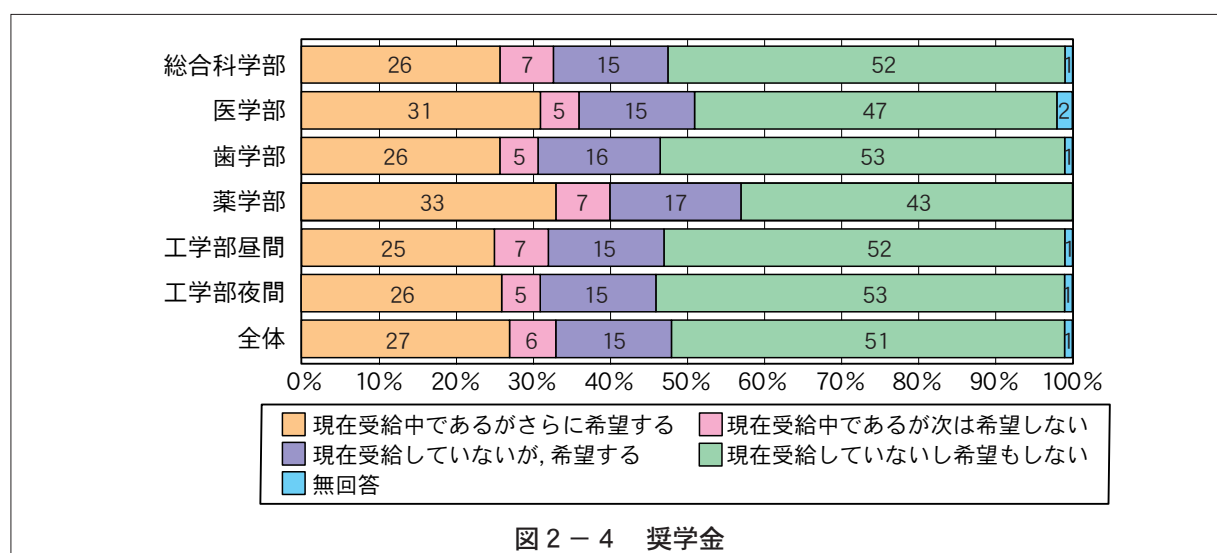
2-3で生活が「大変苦しい」と回答した人が全体で11%あることを考えると、申請者の7%という数字はそれよりかなり少ない。アンケートの結果では「申請したかった」と回答した人が88%もあるから、制度を知らないわけではなく、申請しても許可されないと始めからあきらめているのであろう。そ

れにしても、生活が「大変苦しい」人達のできるだけ多くを支援するために、授業料免除制度の現在のあり方について今後検討すべきであろう。例えば、全額免除と半額免除の現在の比率などもその対象と考えられる。

なお、授業料免除については大学で実数を把握しているの、少なくとも受けているかどうかというような質問は今後はアンケートに入れる必要はないと思われる。

2-5 奨学金 (図2-4)

奨学金を現在受給している人で、今後も希望すると回答した人は27%で、前回調査の22%より増えている。調査対象数が異なるので単純な比較はできないが、これも日本全体の経済状態の変化を反映していると考えられる。一方、現在受給しているが次回は希望しないと回答した人は6%で、前回調査結果の9%より減っている。また、現在は受給していないが希望すると回答した人も前回調査結果の17%から今回15%へと減っている。上の回答と考え合わせると、経済状態が悪化した人と好転した人の2極化が進んだのかもしれない。また、返還時の負担を考えた結果とも思われ、さらに解析が必要である。現在受給していないし希望もしないと回答した人は51%で、前回調査時とほぼ同じである。男女間での差がないのも前回の結果と同様で、これらの数字は「2-3の経済状況」ともよく対応している。



学部学科別で見ると、現在受給中でさらに受給の継続を希望している人は医学部栄養学科と保健学科、薬学部製薬化学科、工学部化学応用工学科で多い。現在受給していないが次回は受けてほしいという人は医学部栄養学科(20%)、薬学部薬学科(22%)、工学部昼間の生物工学科(20%)で多い。

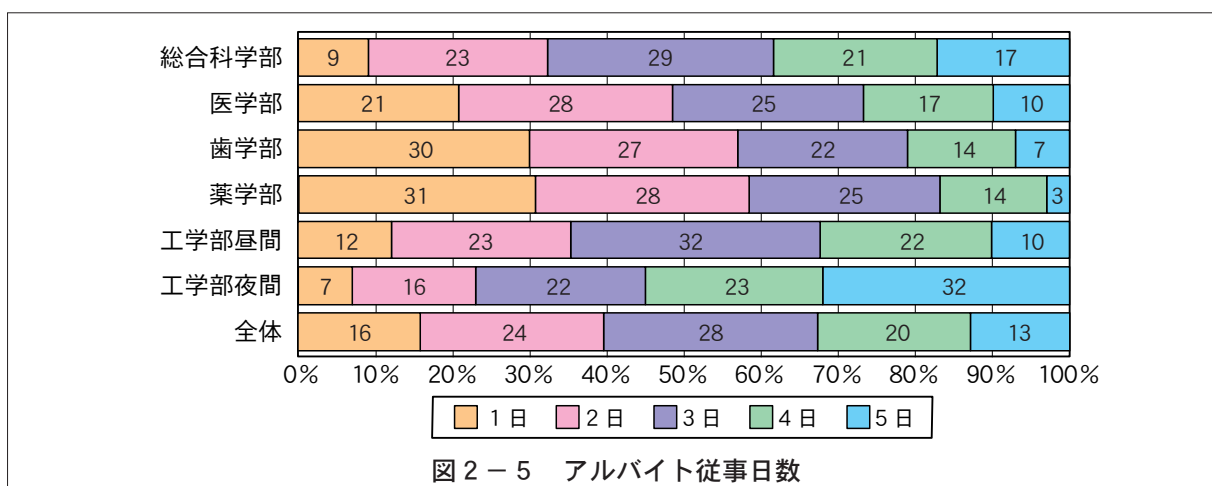
2-6 アルバイト

アルバイトをしている人は58%で前回の調査結果と同じである。女子でアルバイトをしている人の比率が高いのも前回と同じであるが、前回の62%に対して今回66%とやや高くなっている。男子は54%で前回(55%)とほぼ同じである。学部間での差はほとんどない。

2-7 アルバイト従事日数 (図2-5)

1週間あたりのアルバイト従事日数は3日が28%(前回24%)で最も多く、次いで2日が24%(前

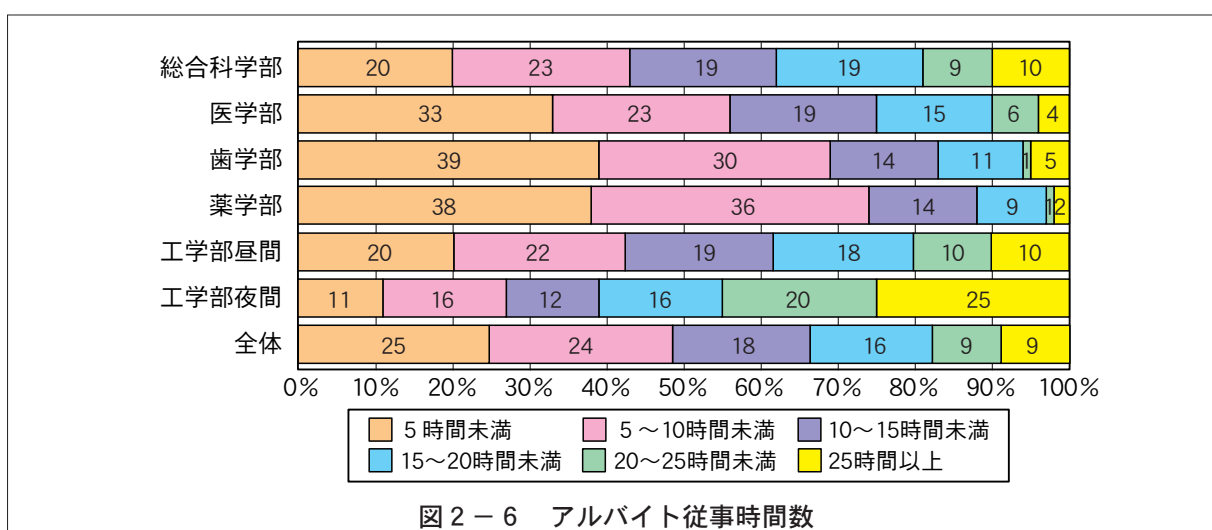
回 25%)、4日 20% (前回 16%)、1日 16% (前回 21%)、5日 13% (前回 14%) である。すなわち、週 3 日あるいは 4 日アルバイトをする学生が増えており、1 日というのが減っている。男女差はない。



しかしながら、学部別で見ると、総合科学部、工学部は全体の傾向とほぼ一致しているが、歯学部、薬学部は 1 ないし 2 日が多く、3 日がこれに次いでいる。前回調査時よりも 1 日と回答した人が両学部とも増えている（歯学部：23%→30%、薬学部：17%→31%）。医学部でも 2 日の 28% が最も多く、次いで 3 日の 25%、1 日の 21% となる。医学部の前回の結果は医学科と栄養学科だけであり、今回は保健学科も含まれているので同一には扱えないが、傾向としては前回と同じである。医学部、歯学部、薬学部では時間割との関係で、アルバイトに当てられる日数に制限があると思われる。工学部夜間は 5 日が 32% と多いが、このコースの性格上納得のいく数字であろう。ただ、この数字は前回の 39% よりは低くなっている。

2-8 アルバイト従事時間数 (図 2-6)

全体では週 5 時間未満が 25% (前回 30%) で最も多く、順に 5～10 時間 24% (前回 28%)、10～15 時間 18%、15～20 時間 16%、20～25 時間 9%、25 時間以上 9% (実数 230 人) である。男女差はあまりないが、20 時間以上では相対的には女子の割合が少なくなる。



学部別の傾向は 2-7 のアルバイト従事日数と同じである。医・歯・薬の 3 学部では 10 時間以下で 56～74% をも占めるが、工学部ではこれが長時間側へシフトしている。夜間主コースでは 20～25 時間が 20%、25 時間以上が 25% (前回 45%) を占めるが、このコースの性格上納得のいく数字である。

ただし、2-7同様、少ないほうへシフトしている。この理由が学外にあるのか、それともカリキュラムと関係したことなのか、把握しておく必要がある。

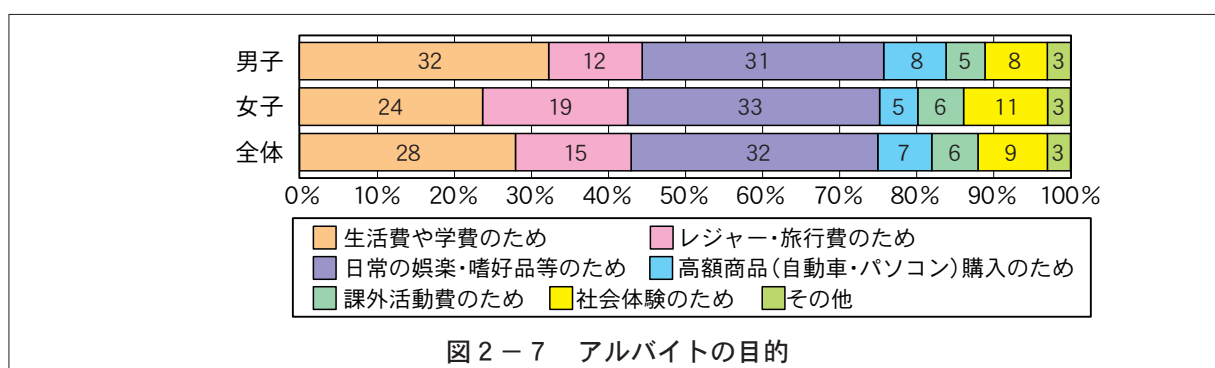
生活のために長時間アルバイトをせざるを得ない場合、それだけ勉学にあてられる時間は減るであろう。すると成績が下がり、また勉学意欲を失うことにもつながりうる。このような学生が実際にどれくらい存在するか、アルバイトによって勉学に支障が生じていないかどうか、今後調査すべきであろう。

2-9 アルバイトの目的 (図2-7)

複数回答が可能な質問なので、比率の数字は個々の学生の絶対値を示すものではない。その前提を踏まえた上で、アルバイトの目的として最も多いのは日常の娯楽・嗜好品等のため32%（前回30%）である。次いで、生活費や学費の28%（前回24%）、レジャー・旅行費15%（前回18%）となる。この傾向は各学部とも同じであるが、工学部夜間主だけは生活費・学費が41%を占め、次いで日常の娯楽・嗜好品等のため29%、レジャー・旅行費は8%となっている。

男女別で見ると、生活費・学費のためにアルバイトをしているのは男子に多く（32%）、女子で少ない（24%）。一方、レジャー・旅行費のためと回答したのは女子に多く（19%）、男子で少ない（12%）。高額商品の購入も男子（8%）が女子（5%）より高い。他の項目では男女間に大きな違いはない。これは前回の調査と同じ傾向である。

2-3の経済状況の項で、やや苦しい（28%）、大変苦しい（11%）と答えた学生の比率（計39%）と上の生活費・学費と回答した比率の28%との間にややずれがあるように感じられるが、これは複数回答が可能な質問なので仕方のないことである。



2-10 アルバイトの種類 (図2-8)

これも複数回答が可能な質問である。アルバイトの種類では家庭教師・学習塾講師等が最も多く40%（前回42%）を占める。次いで、飲食店等手伝い20%（前回16%）、受付・接客13%（前回11%）、商品販売10%（前回9%）となっている。すなわち、内容的には前回調査時と大きく異ならない。男女間に大きな違いはない。家庭教師・学習塾講師等で女子がやや多い程度である。前回の調査で出たイベントスタッフ補助で女子の割合が高いという傾向は今回は見られない。

学部別に見ると、医学部、歯学部、薬学部で家庭教師・学習塾講師の比率が高い（医学部：55%、歯学部：67%、薬学部：61%）。総合科学部、工学部では家庭教師・学習塾講師の比率が若干下がり（総合科学部：35%、工学部昼間：31%）、飲食店等手伝いが工学部でやや増える（25%）。工学部夜間主コースでは家庭教師がさらに少なく（13%）、飲食店等手伝い（21%）、受付・接客（16%）、商品販売（16%）などが多い。この傾向も前回調査の結果と同じである。今後は「その他」の中に危険なものはないかどうか、調査する必要があると思われる。

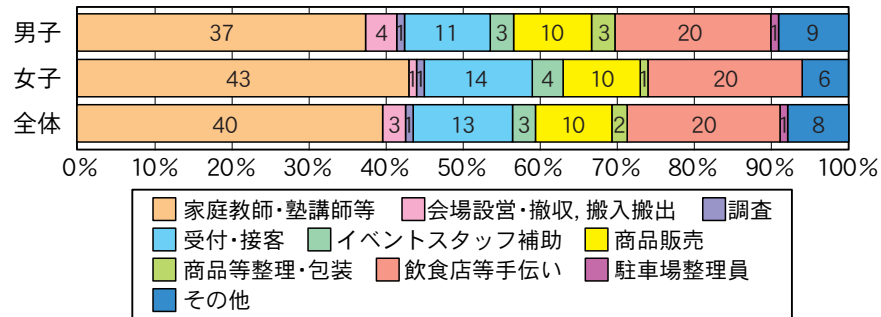


図 2-8 アルバイトの種類

2-11 アルバイト収入 (図 2-9, 2-10)

アルバイトによる収入は3万円未満が32% (前回39%), 3~5万円33% (前回22%)で, 5万円未満が全体の65%を占める。5~7万円は19% (前回19%), 7~10万円12% (前回10%), 10万円以上4% (前回10%)で, 高額収入を得る人がやや少なくなっている。男女間での大きな差はないが,

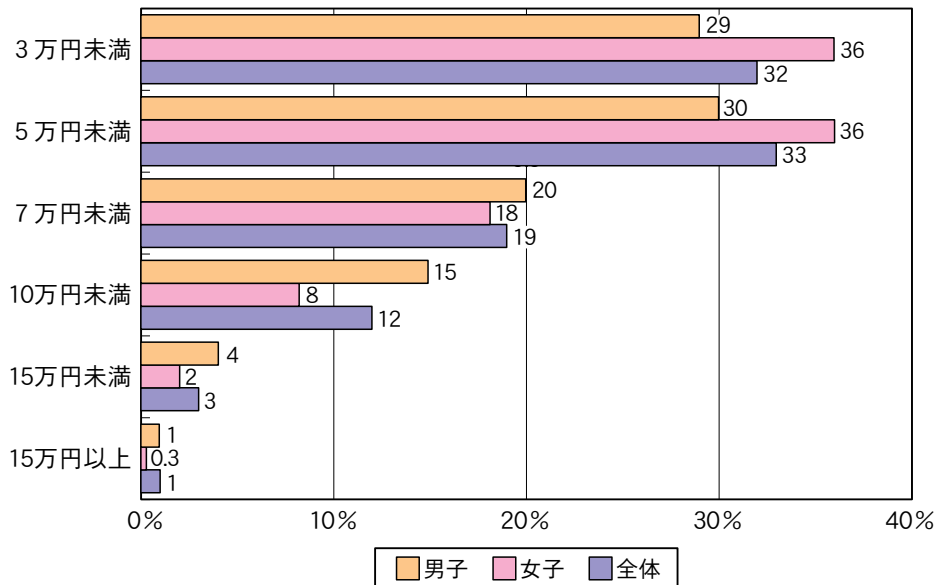


図 2-9 アルバイト収入 (男女別)

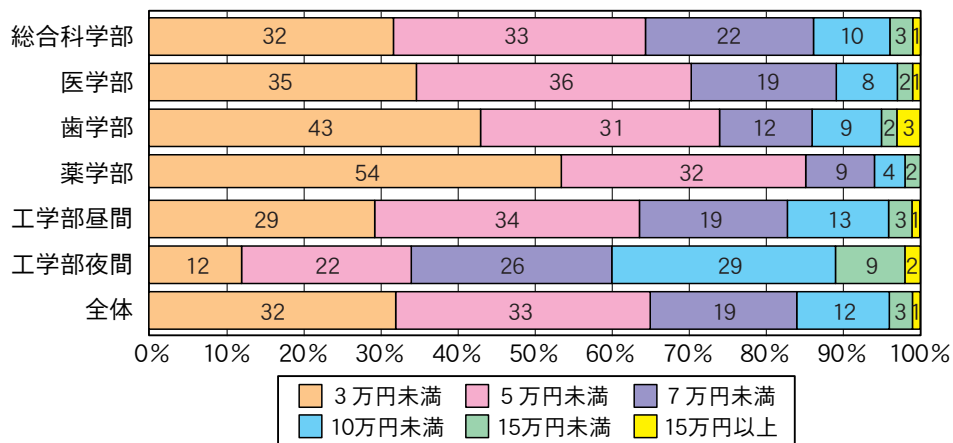


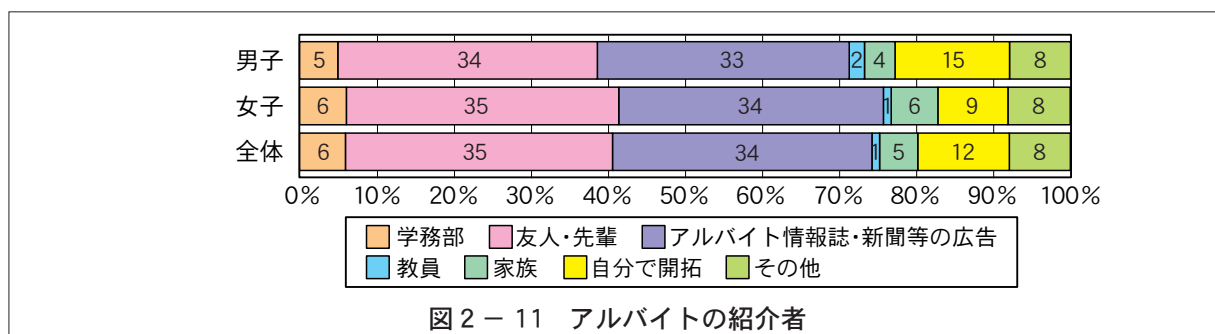
図 2-10 アルバイト収入 (学部別)

5万円未満では男子59%、女子66%、5～7万円（男子20%、女子18%）、7万円以上（男子20%、女子10%）となっている。

学部間に大きな違いはないが、歯学部、薬学部で3万円未満の比率が高い。一方、工学部夜間主コースではこのコースの性格を反映して、7～10万円が29%、5～7万円が26%を占める。

2-12 アルバイトの紹介者 (図2-11)

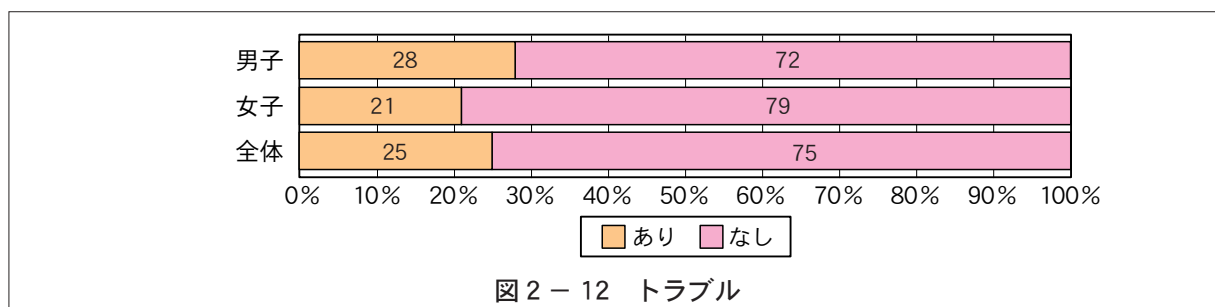
アルバイトの紹介者は、「友人・先輩」が35%、「アルバイト情報誌・新聞等広告」が34%で、この二つではほぼ70%になる。「自分で開拓」した者も12%いて、これらの傾向は前回調査とほぼ同じである。学部間に差はない。「学務部」も6%と前回同様の数字になっている。前回（平成13年8月）の調査報告書に、「学生部または学務部からの紹介は6%と振るわず、一度見直す必要があるかもしれない」とあるように、学生へのアルバイト紹介についてどういうスタンスで取り組むのか、基本方針を立てる必要があるだろう。



2-13 トラブル (図2-12)

アルバイトをしていてトラブルを経験した人は25%で、男子（28%）が女子（21%）より多い。これは前回の結果（全体19%、男子22%、女子16%）より増加している。

学部別で見ると、工学部夜間主コースで37%と高く、次いで総合科学部の28%、工学部昼間の27%、医学部20%、薬学部19%、歯学部17%となっている。工学部夜間主コースで高いのは従事時間が長いこともあり、止むを得ないと思われる。



2-14 トラブルの内容 (図2-13, 2-14)

アルバイト先でのトラブルの内容として最も多いのは「客とのトラブル」で32%（前回31%）、次いで「雇用者との意見の不一致」19%（前回22%）、「給料の不払い」12%（前回18%）、「給料が契約より低かった」12%となっている。全体の傾向は前回とほぼ同じと言える。また、女子で「給料の不払い」

が14%、「給料が契約より低かった」16%と、男子のそれぞれ11%、10%に比較して高いのも前回と同じである。

トラブルの内容把握は必要と思われるが、個々のトラブルに対して大学は何ができるであろうか。今後検討すべき課題である。

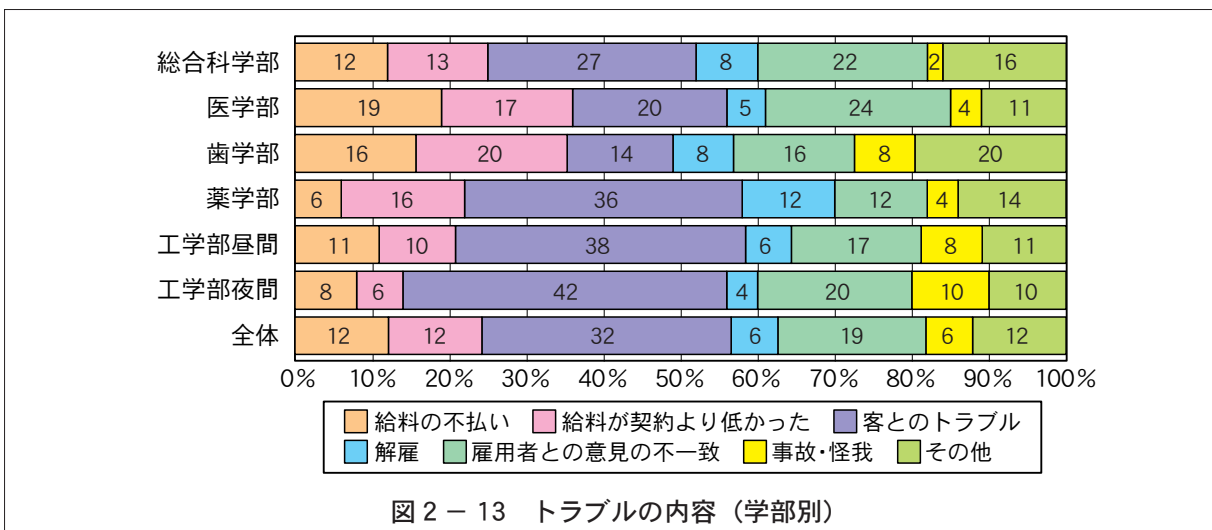


図 2 - 13 トラブルの内容 (学部別)

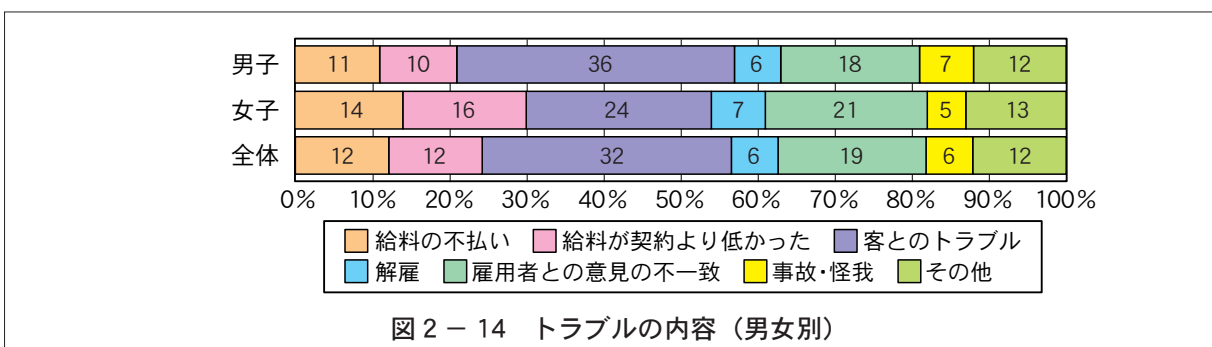
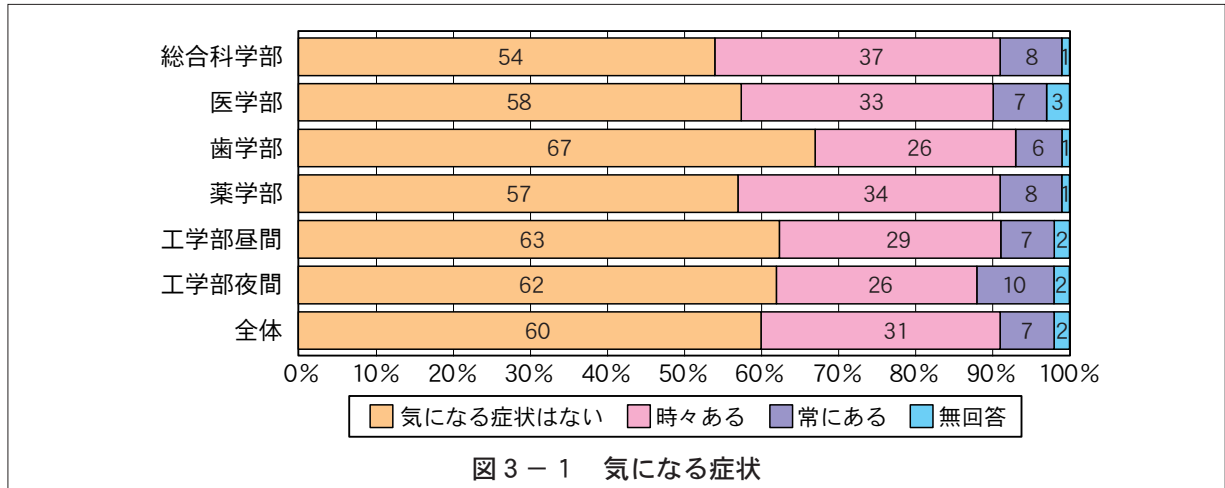


図 2 - 14 トラブルの内容 (男女別)

第3章 健康状態について

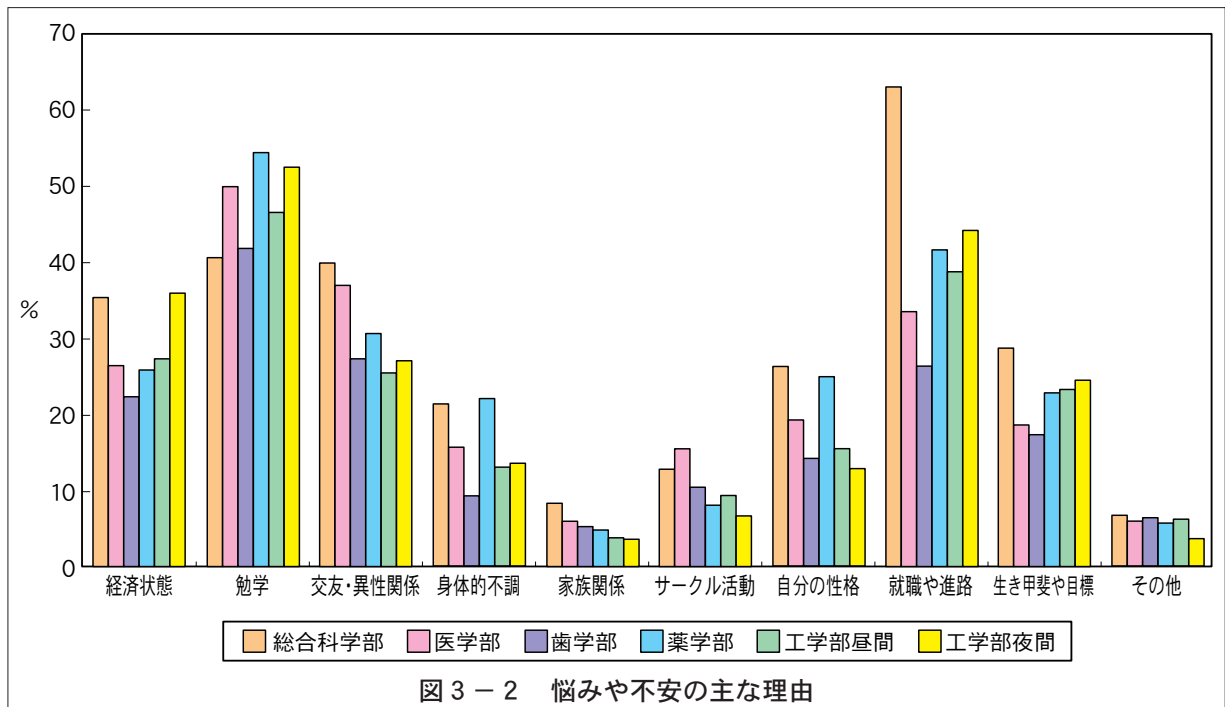
3-1 気になる症状 (図3-1)

「現在気になる症状が時々ある」または「常にある」と答えた学生は男子では36%，女子では41%であり，前回調査（男子30%，女子40%：平成13年8月）と同様に若干ではあるが女子に多い傾向が見られた。従って学部別では，女子学生の割合の多い総合科学部（45%），薬学部（42%），医学部（40%）学生に多く，歯学部（32%）や工学部（昼間36%，夜間36%）では少なくなる。



3-2 主な悩みや不安 (図3-2)

「勉学」や「就職や進路」などの学生時代に特有の問題、「経済状態」や「交友・異性関係」などが学生の悩みや不安の主な理由になっている。「勉学」が主な悩みや不安であると答えた学生は薬学部（55%）に多く，次いで工学部夜間（53%），医学部（50%），工学部昼間（47%）の順になり，歯学部



(42%)、総合科学部(41%)で低い。図6-8には、授業に対する満足度の調査で「受講している授業にやや不満足である」、「不満足である」と答えた学生に満足できない理由を尋ねた結果が示されているが、「授業内容が難しすぎて分からない」を満足できない理由に挙げた学生の割合が工学部夜間(20%)、薬学部(19%)、工学部昼間(18%)に多く、相関関係があるように思われる。総合科学部では「就職や進路」に対する悩みや不安の割合が他学部比べて一段と高く(63%)、前回調査と同様の傾向が見られた。薬学部、工学部においても約40%の学生が「就職や進路」について悩みや不安を抱いており、就職支援室との連携を保ちながら、よりきめの細かい就職指導や進路指導を行う必要がある。

「経済状態」に悩みや不安があると答えた学生の割合は約1/3(29%)にも達し、その数は多い。本学の奨学金制度や授業料免除制度等の一層の改革・充実が望まれる。

3-3 悩み相談 (図3-3)

悩みごとの相談相手は主として「友人」や「家族」(合計75%)であり、健全な状態であると思われる。「教員」、「学生相談室」や「学務係(教務係)」と回答した学生は合計でも3%に満たない。問題となるのは「誰にも(相談)しない」と答えた学生であり、その割合は16%になる。特に男子学生の多い工学部ではその比率が高く、21%(工学部昼間)、17%(工学部夜間)である。

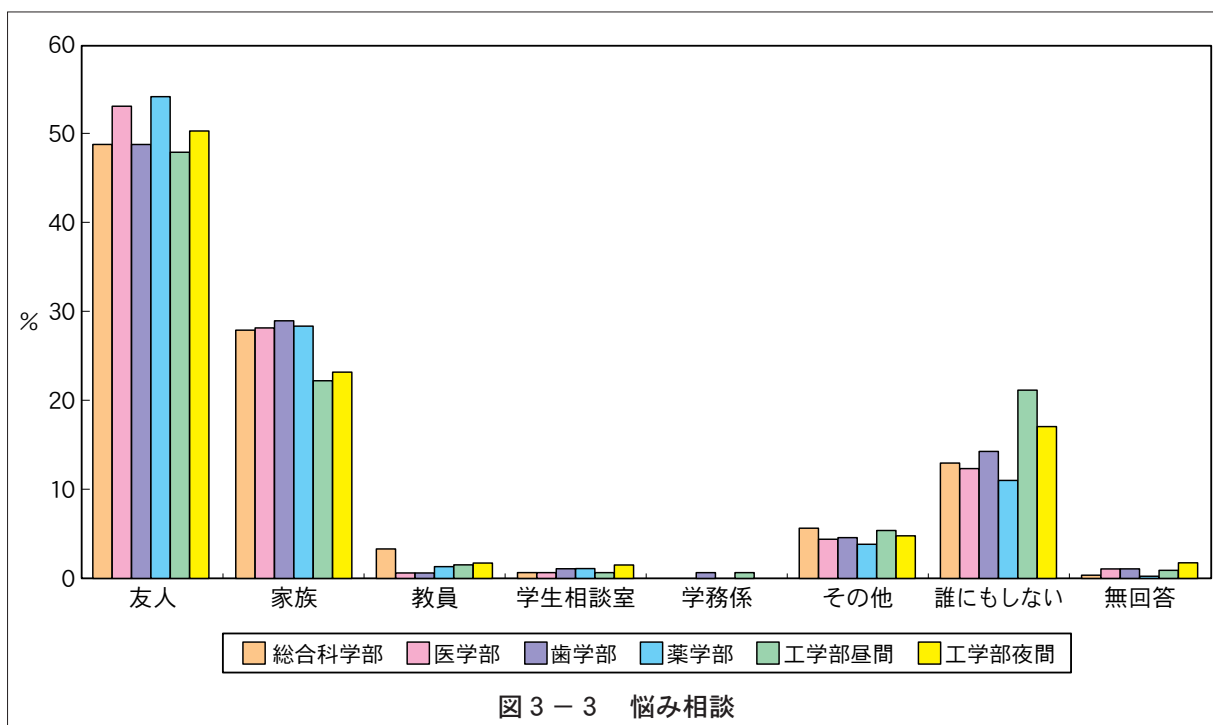
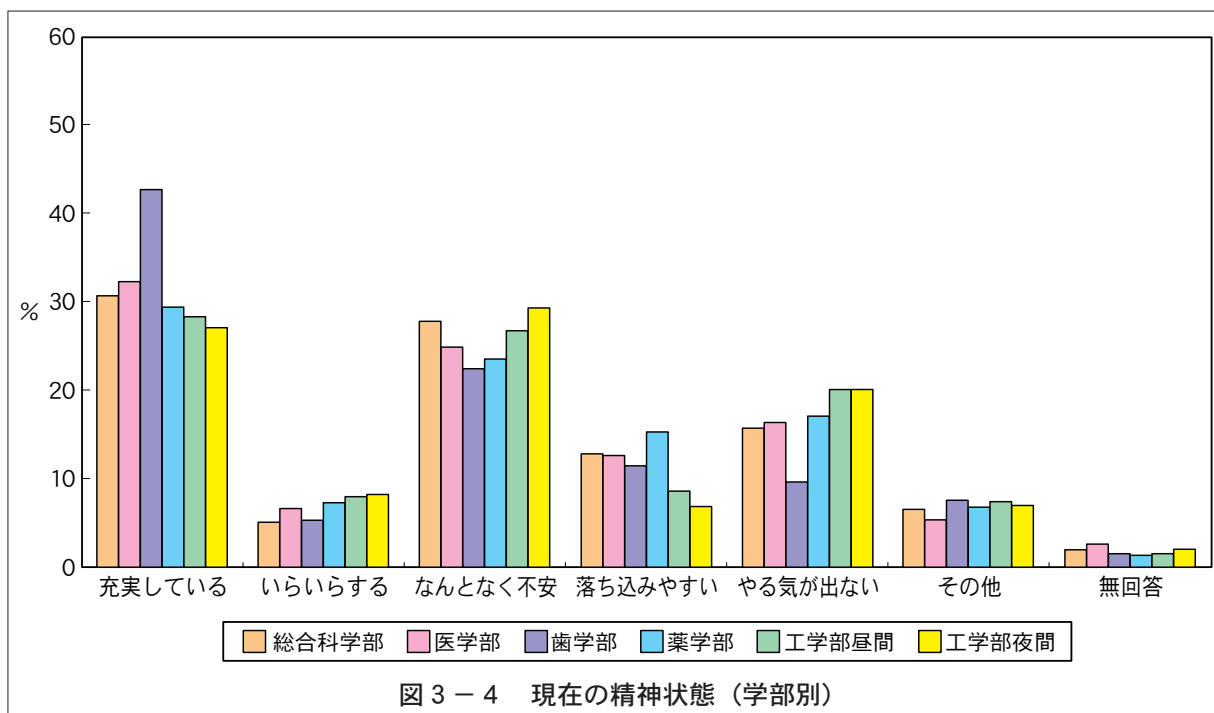


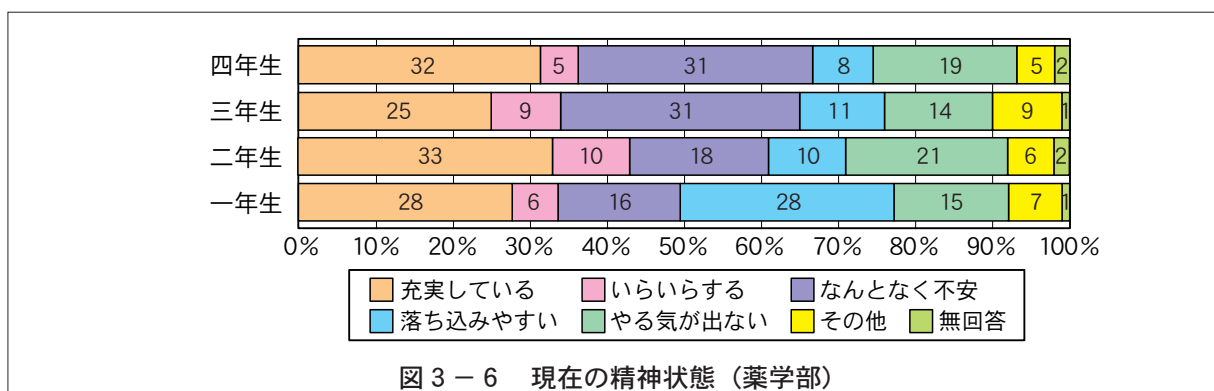
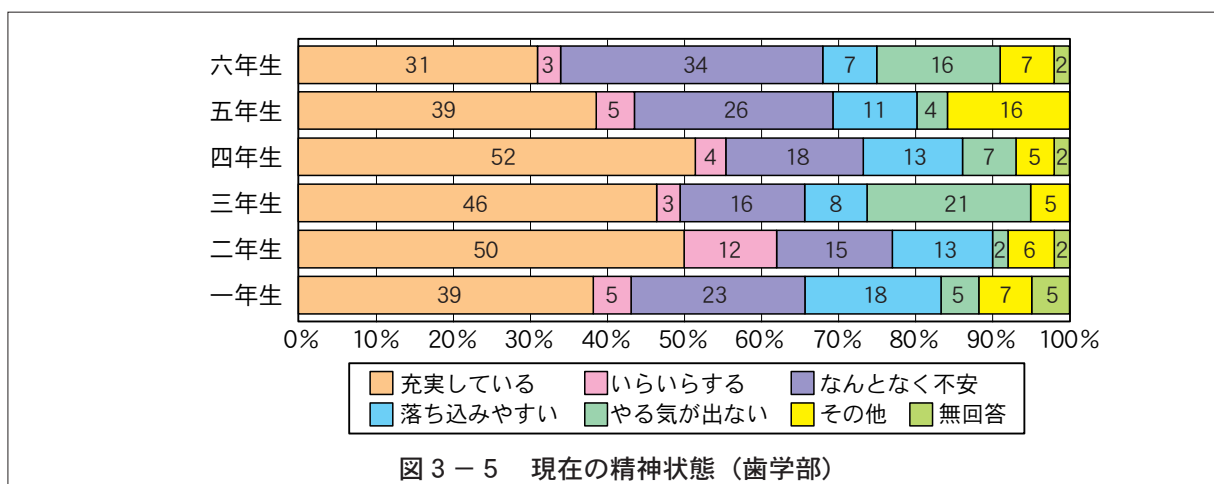
図3-3 悩み相談

3-4 現在の精神状態 (図3-4~3-6)

現在の精神状態について「充実している」と答えた学生の割合は全体で約30%であるが、歯学部学生の場合はその割合が一段と多くなり43%にもなる。前回調査においては、精神的充実度と学部に対する満足度との間には相関関係があることが示され、学部に対する満足感が高くなるほど、精神的充実度も高くなっていった。今回の調査結果は前回と異なり、「所属学部に満足している」、「やや満足している」と答えた学生は蔵本キャンパスの薬学部69%が最も多く、医学部65%、歯学部61%を示し、常三島キャンパスの総合科学部55%、工学部夜間53%、工学部昼間51%となっていた(図6-2参照)。職業専門学部において精神的充実度と学部満足度が高い傾向は今回も同様であった。



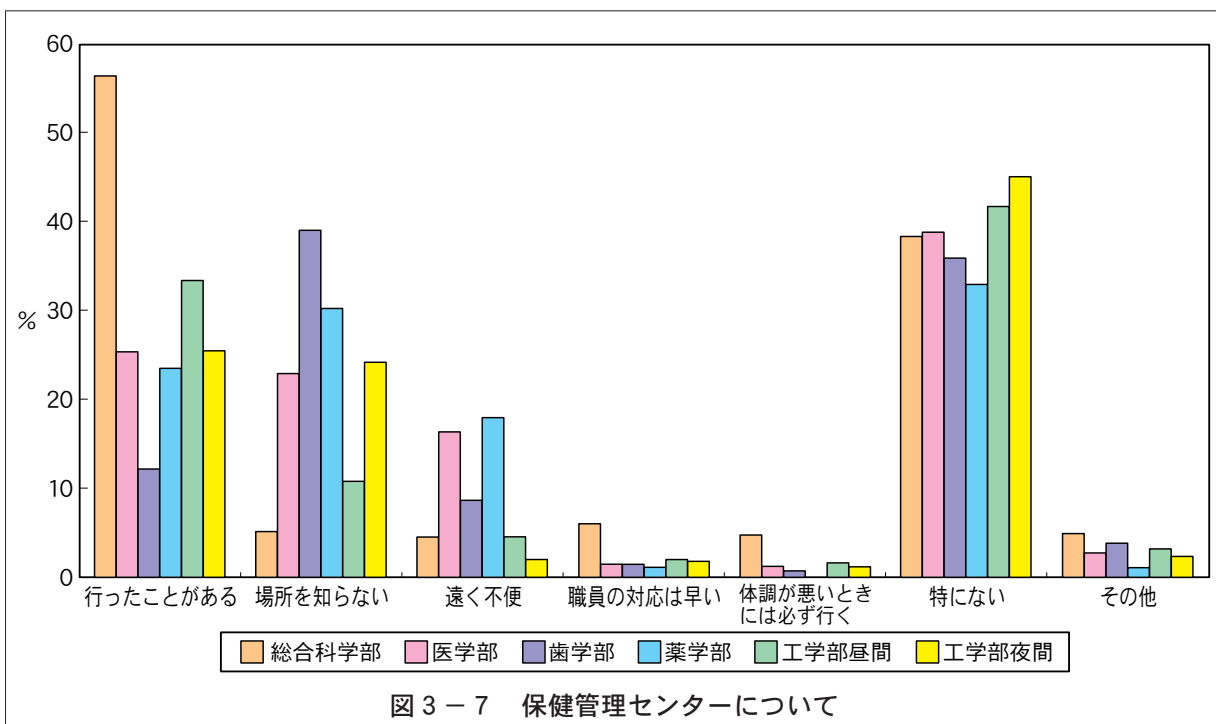
現在の精神状態について「充実している」と答えた学生が平均値よりも10%以上多かった歯学部学生、並びに平均値を示した薬学部学生の学年別データをそれぞれ図3-4-2, 図3-4-3に示す。両学部において卒業年次（歯学部6年次、薬学部4年次）における精神的充実度には大きな差が見られないが、歯学部においては初年次から「充実している」と答えた学生の割合が高く（39%）、2～4年次では50%前後にも達している。残念ながら、現時点ではこのような結果を示した理由を見出すことはできなかった。



3-5 保健管理センター (図3-7)

保健管理センターは学生の健康状態を管理する重要な学内施設であるが、蔵本キャンパスの学生はあまり利用していないようである。「保健管理センターに行ったことがある」と答えた学生の割合は総合科学部では57%にも達しており多くの学生が利用しているが、医学部・歯学部・薬学部ではいずれもその半分にも満たない。特に歯学部が少なく、12%の学生が利用しているに過ぎない。「保健管理センターの場所を知らない」と答えた学生が歯学部(39%)、薬学部(30%)、医学部(23%)には多くおり、場所を知らないために保健管理センターを利用していない学生も多いと思われる。「遠く不便」と感じている学生は薬学部(18%)、医学部(16%)に多い。なお、図には示していないが保健管理センターへ行ったことがあると答えた者のうち、総合科学部10%、医学部5%、歯学部10%、薬学部4%、工学部昼間6%、工学部夜間6%の者が「職員の対応は早い」と回答しており、また、総合科学部8%、医学部4%、歯学部5%、薬学部0%、工学部昼間4%、工学部夜間4%の者が「体調が悪い時には必ず行く」と答えている。

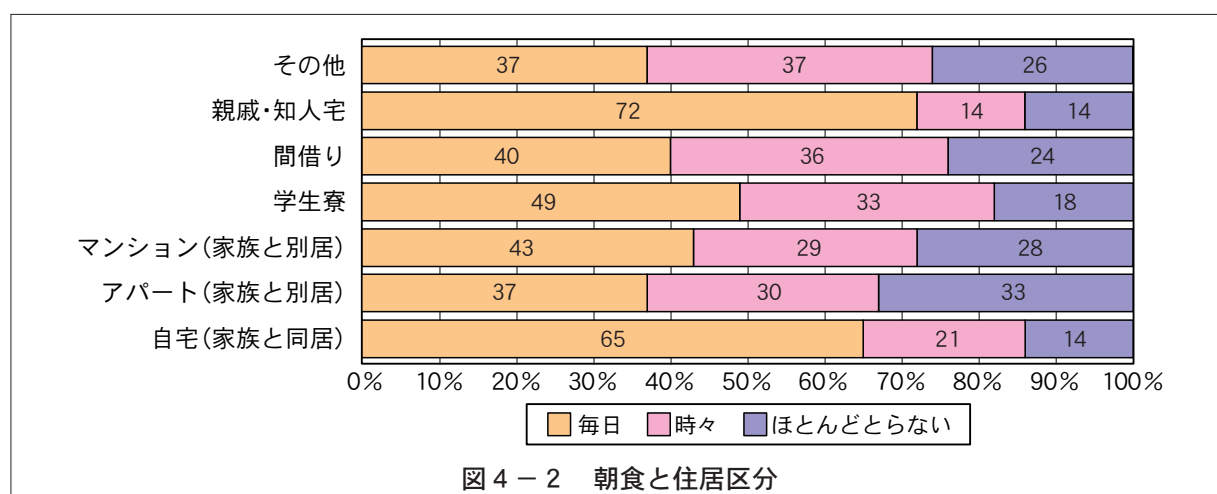
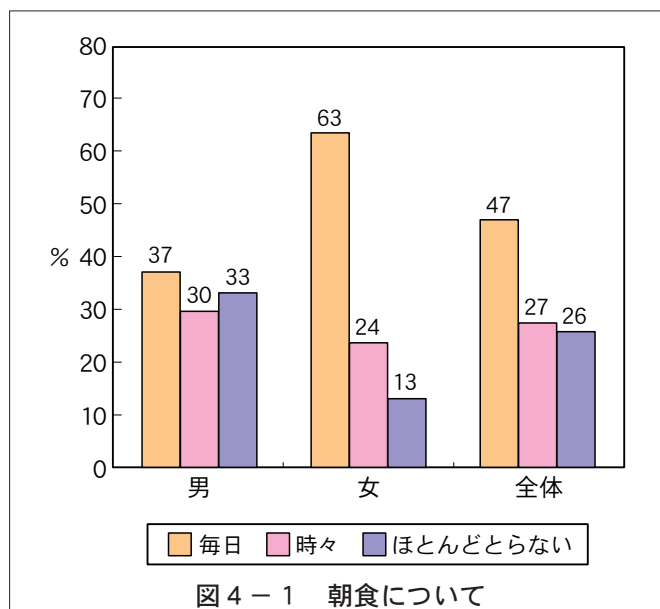
徳島大学のホームページには保健管理センターの場所、利用案内や施設の紹介などが詳細に記載されている。診察、検査、処置などを無料で受けることができ、学生生活を健康面から支える重要な施設である。新入生オリエンテーションの際にはより詳細に施設を紹介する必要があるだろう。



第4章 食事について

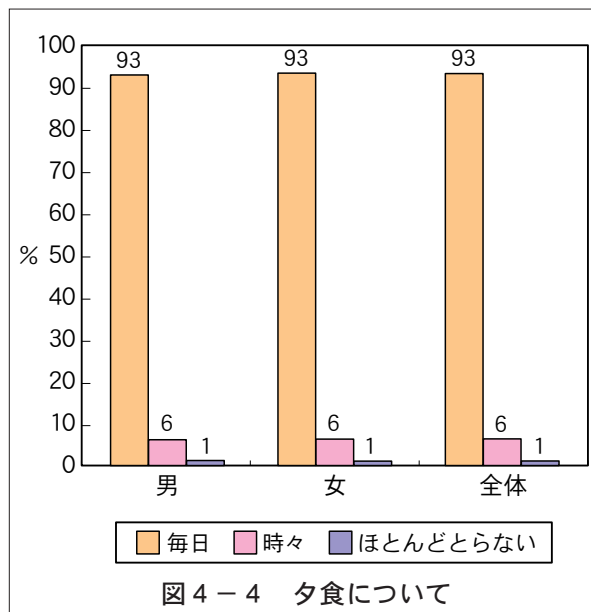
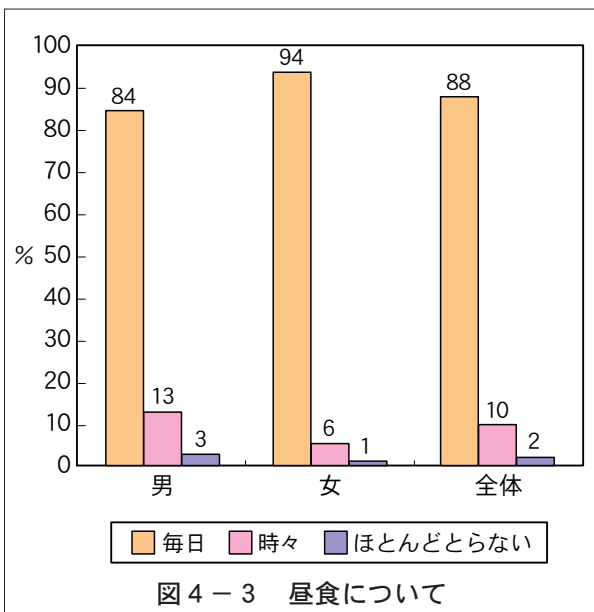
4-1 朝食 (図4-1, 4-2)

1日の活力源である朝食を毎日とっている学生は47%で、毎日とはっていない学生は53%である。毎日とはっていない学生のうち、男子が63%で、女子が37%である。朝食を毎日とはっていない学生がかなりの数に上ることがわかる。自宅生の65%が朝食を取っているのに対して、一人暮らしをしている学生ではそれは37%から49%までの間であり、かなりの差がある。朝食をとるかどうかは1日の体調や精神状態にも影響を与え、こうした生活習慣を改善する指導や教育が望まれる。



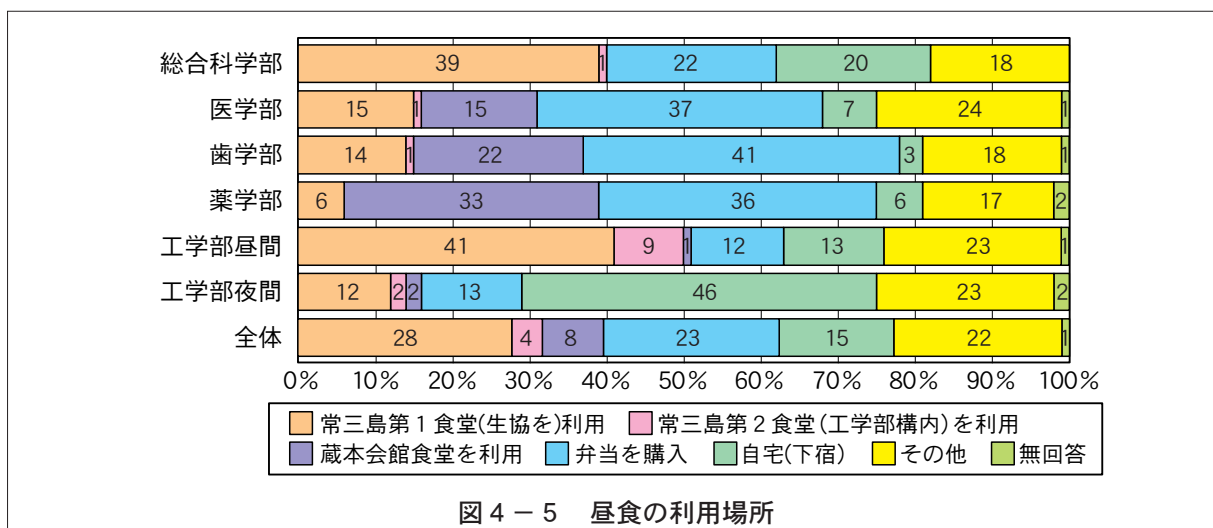
4-2 昼食と夕食 (図4-3, 4-4)

昼食を毎日とっている学生は88%、夕食を毎日とっている学生は93%であり、これに関してはほとんど問題はないが、昼食を毎日とっていない学生が12%いる。また調査には出てこないが、栄養のバランスを考えた食事が必要であろう。大学入門講座に栄養教育を取り入れるのも一計と考えられる。



4-3 昼食の利用場所 (図 4-5)

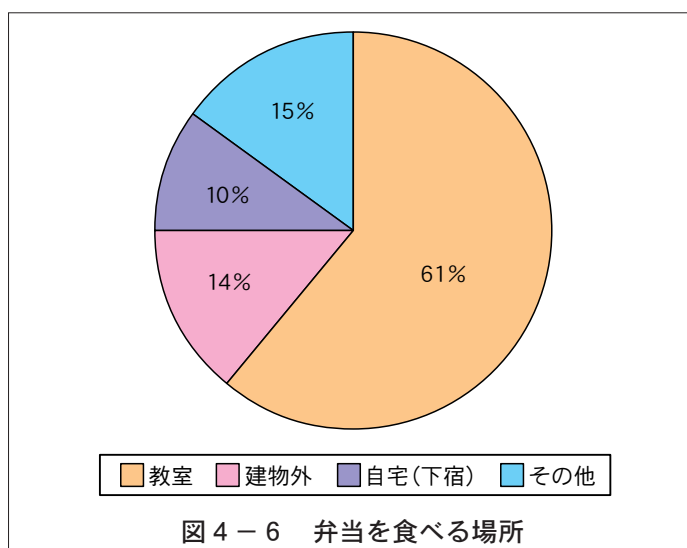
常三島第1食堂(生協)を利用する学生が28%、常三島第2食堂(工学部構内)を利用する学生が4%、蔵本会館食堂を利用する学生が8%、弁当を購入する学生が23%、自宅(下宿)で食べる学生が15%、その他が22%である。工学部に多くの学生がいることからすると、第1食堂と比べて第2食堂の利用者が非常に少ないことがわかる。工学部昼間学生が第2食堂を利用する割合も9%である。第1食堂の混雑を緩和するためにも、第2食堂の利用者を増やす方が必要であろう。また蔵本会館食堂の利用も蔵本地区の学生数からすると、少ない。蔵本地区の学生だけに注目するならば、蔵本会館食堂の利用者は20%であるが、弁当を購入する学生の方が多くなっている。これも利用者を増やす改善策が求められるであろう。



4-4 弁当を食べる場所 (図 4-6)

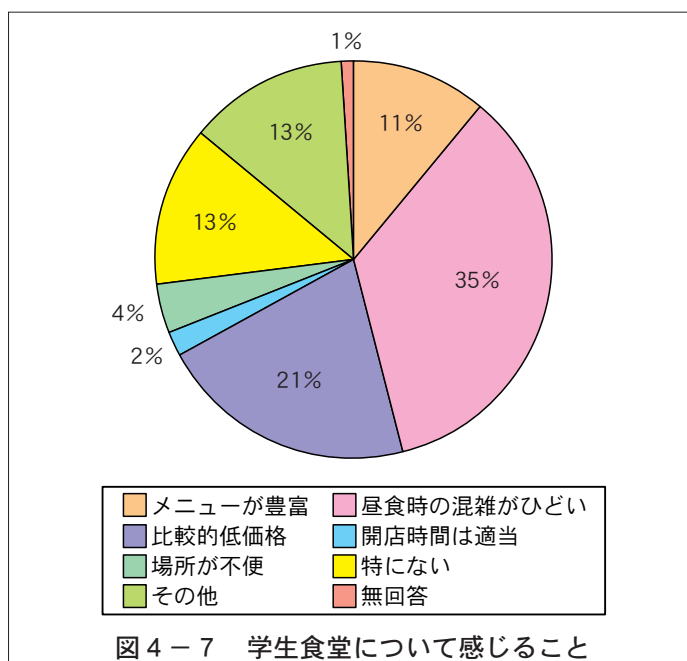
無回答を除くと、弁当を教室で食べている学生が61%、建物外で食べている学生が14%、自宅(下宿)で食べている学生が10%、その他が15%であった。教室で多くの学生が弁当を食べていることが

わかるが、教室でゴミが出ることから、やはり弁当を食べることのできる控室などのアメニティの充実が求められる。



4-5 学生食堂について感じること (図 4-7)

「学生食堂について感じること」に関して、メニューが豊富と答えた学生は11%、昼食時に混雑がひどいと答えた学生は35%、比較的低価格と答えた学生は21%、開店時間は適当と答えた学生は2%、場所が不便と答えた学生は4%、特にないと答えた学生が13%、その他が13%であった。学生食堂の混雑を指摘している学生は3割に上る。以上の調査結果から、メニューの改善に努める必要性と共に混雑解消の方策が望まれていることがわかる。



第5章 学生生活上の問題点

この章では、医学部を医学科、栄養学科、保健学科の3つに分けて分析する。なお、表記の複雑さを避けるため医学部を省略し、「医学科」、「栄養学科」、「保健学科」と記載する。

5-1 大学生生活の意義 (図5-1～図5-3)

[項目間での比較]

男女合わせた全体で見ると(図5-1)、栄養学科を除いて、ほぼ全ての学部・学科で「勉学や研究」が1位に挙がっている。また、「特に重点もなく程々に」が比較的高い値を示して、多くの学部・学科で2位を占め、続いて「豊かな人間関係を結ぶこと」が高い位置を占める。一方、「サークル活動」、「趣味・娯楽」、「将来を考えた資格等の取得」がこれに続くが、それほど高い値ではなく、「アルバイト」、「ただ何となく」、「その他」はどの学部・学科でも低い値である。なお、男女間で比較すると、男子に比べ女子では「勉学や研究」、「豊かな人間関係を結ぶこと」、「将来を考えた資格等の取得」、「特に重点もなく程々に」が多く、「サークル活動」、「趣味・娯楽」は少ない傾向にある。

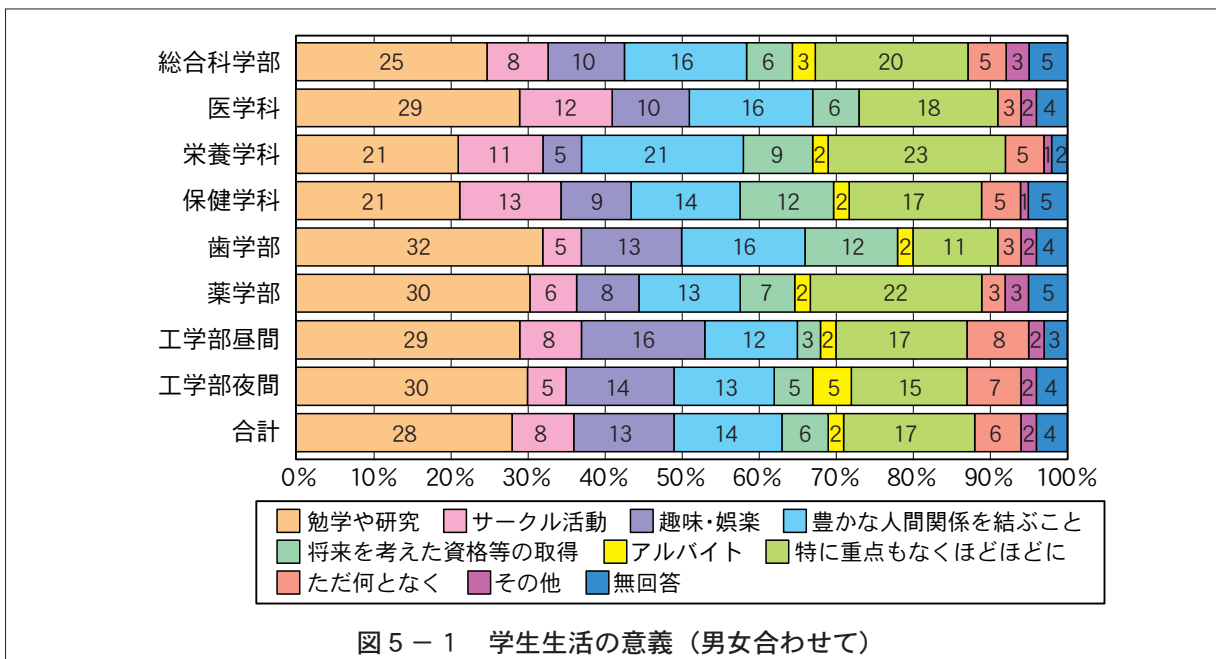


図5-1 学生生活の意義 (男女合わせて)

[学部・学科間での比較]

歯学部と薬学部では、他項目に比べ「勉学や研究」が突出している(図5-1)。総合科学部、医学科、工学部では「勉学や研究」が高い値を示すものの、「サークル活動」、「趣味・娯楽」、「豊かな人間関係を結ぶこと」、「将来を考えた資格等の取得」、「特に重点もなく程々に」の値も比較的大きい。保健学科と栄養学科では、他項目に比べて「勉学や研究」が特に高いわけではなく、栄養学科では、「特に重点もなく程々に」が1位となるが、「勉学や研究」や「豊かな人間関係を結ぶこと」とそれ程の差は見られない。工学部の昼間と夜間では、それほど顕著な差は見られない。

[学年間での比較]

学部・学科を4年制と6年制に分けて比較した。4年制(図5-2)では、学年の進行に伴い、「サー

クル活動」の比率が多少減少するものの、他の項目での変動は少ない。6年制（図5-3）では、中間学年で「勉学や研究」、「サークル活動」の比率が高まるが、「趣味・娯楽」はやや減少する。「特に重点もなく程々に」は2年で高いが、それ以降は減少する。

前回での調査に比べて、「趣味・娯楽」、「特に重点もなく程々に」、「ただ何となく」といったマイナスイメージの理由を挙げる学生が増加し、「勉学や研究」を挙げる学生が減少している。学生の多様化を反映していると思われるが、「勉学や研究」が学年進行と共に増加していない事実は、大学での専門教育が学生の勉学・研究意欲に何ら影響していないことを表わす。前回の調査で「大学生生活の意義」と「本学を選んだ動機」（質問47）との関連性が示唆されている。「本学を選んだ動機」で「希望する学部があったから」や「就職等将来を考慮して」を理由に挙げた学生は「勉学や研究」を優先し、「高校の進路指導による」や「ただ何となく」を理由に挙げた学生は「勉学や研究」を優先する度合いが低い。入学試験の面接にあたっては、これらのことを念頭に置く必要がある。また、学生の勉学・研究意欲を引き立てる専門教育の在り方が求められている。

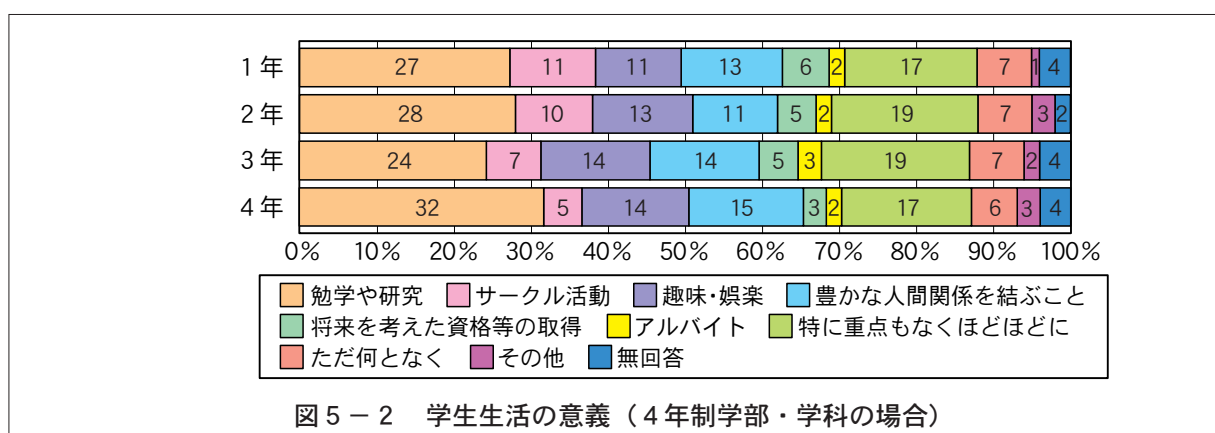


図5-2 学生生活の意義（4年制学部・学科の場合）

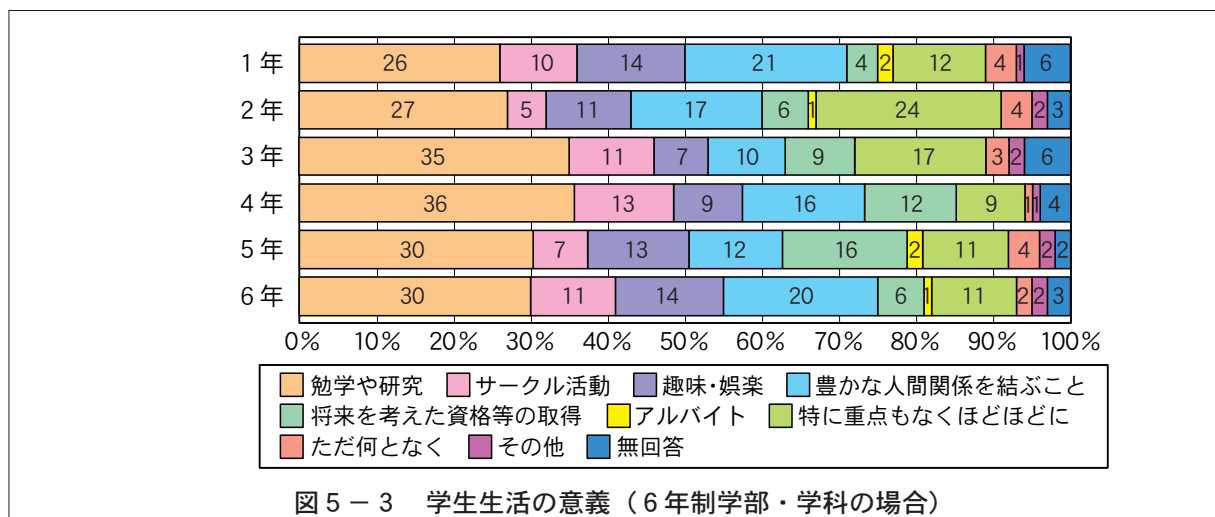


図5-3 学生生活の意義（6年制学部・学科の場合）

5-2 迷惑行為（図5-4～図5-12）

どの学部でも、「迷惑行為を受けていない」と答えた学生は60～70%で、残り約1/3は迷惑行為を受けた経験をもつ。男女別に見ると顕著な差があり、どの学部でも、男子に比べて女子の方が迷惑行為を受けた比率が高い。

[迷惑行為の内容]

のべ被害者数での比率で見ると、男子（図5-4）では、「いたずら電話を受けた」がどの学部でも一番多く、ついで「その他」「悪徳商法に引っかかった」が続く。女子（図5-5）では、男子に比べ、どの学部でも「いたずら電話を受けた」が大幅に増加し、その分「その他」、「悪徳商法に引っかかった」が減少するが、「ストーカーにあった」や「大学内でセクハラを受けた」は増加する。

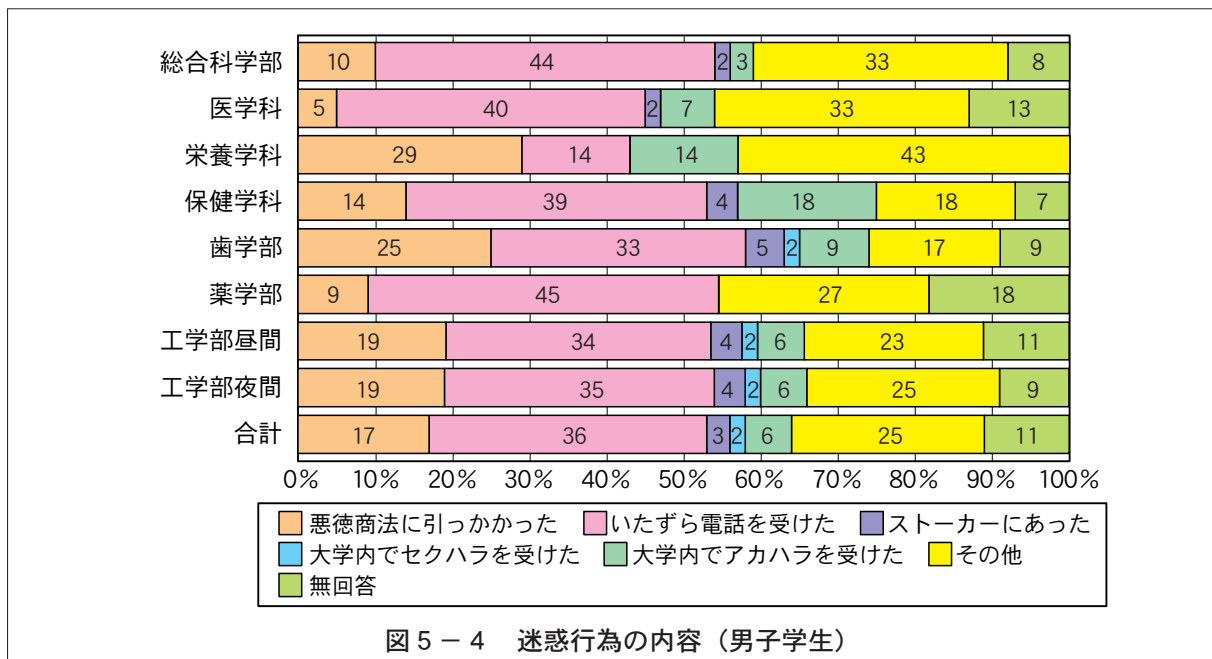


図5-4 迷惑行為の内容 (男子学生)

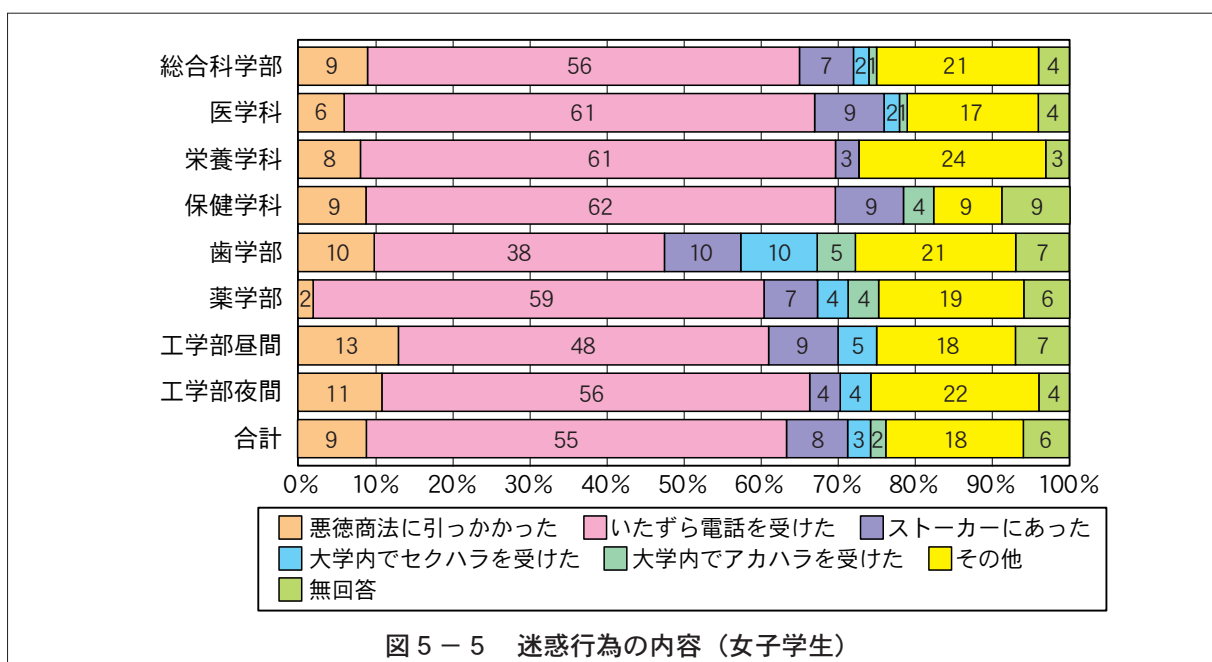


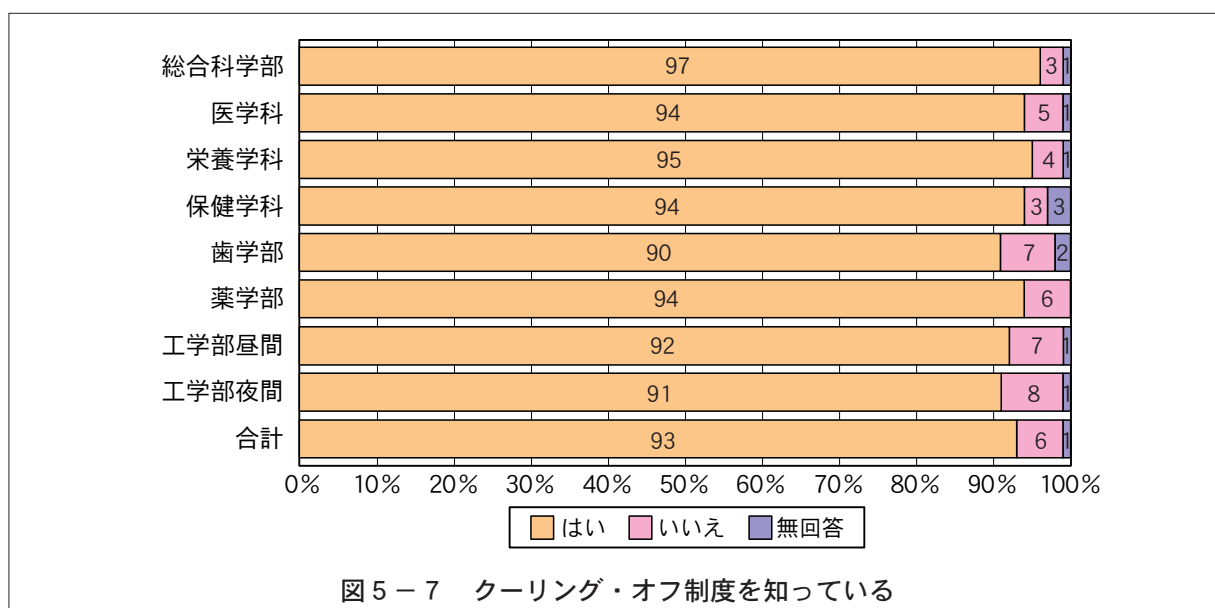
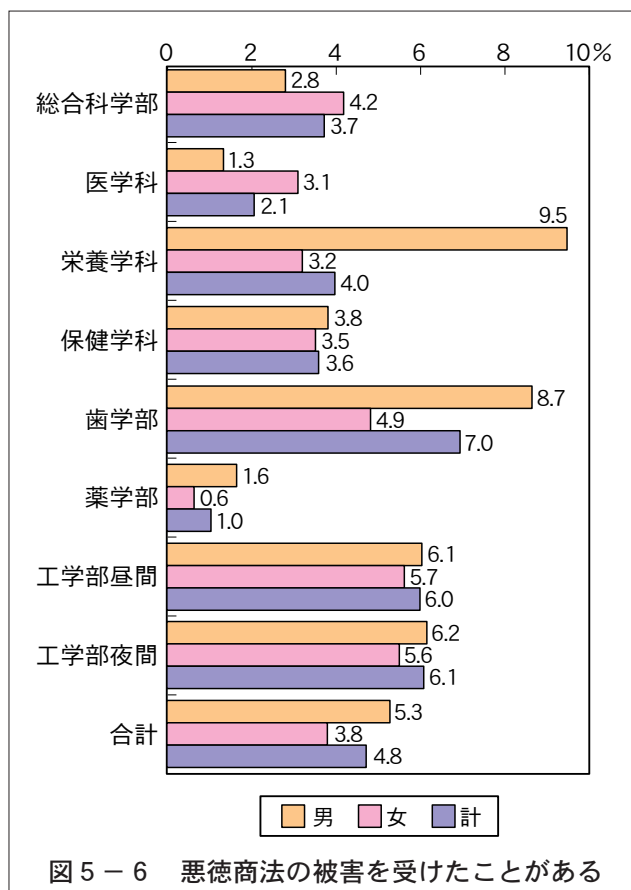
図5-5 迷惑行為の内容 (女子学生)

[悪徳商法]

各学部・学科で、1～7%の学生が悪徳商法の被害を受けている（図5-6）。被害学生は、のべ被害者数での比率（図5-4、図5-5）で見ても、学部・学科別学生数に対する比率で見ても（図5-6）、女子よりも男子で多い。

クーリング・オフ制度については（図5-7）、全ての学部・学科で、90%以上の学生が「知っている」と回答しており、学部・学科間では、歯学部と工学部で「知っている」比率がやや低い。なお、男

女間の比較では、ほぼ全ての学部・学科で女子の比率が高い。これらのことは、学部・学科別の学生数で見た悪徳商法被害の比率(図5-6)によく反映されており、ほぼ全ての学部・学科で男子学生に被害が多く、学部・学科別では、歯学部と工学部で被害が多い。クーリング・オフ制度を知ることが被害の予防につながることを示すと思われる。前回調査に比べて「知っている」比率が増加している。今後は、歯学部や工学部、男子学生への周知徹底が課題といえる。



[いたずら電話]

各学部・学科で、12～21%の学生がいたずら電話の被害を受けている(図5-8)。被害学生は男子で287名、女子で376名で、男子にも被害が多く見られる。しかし、のべ被害者数に対する比率(図5-4, 図5-5)や学部・学科別学生数に対する比率(図5-8)で見ても、男子より女子で圧倒的に被害が多い。

いたずら電話を受けた学生は、前回調査では全学部を通して45～65%であったが、今回では激減している。電話での迷惑被害対策が浸透してきている。前回の分析結果よりすると、一人暮らしの学生に

いたずら電話被害の多い傾向がある。一人暮らしの学生は迂闊に他人に電話番号を教えない等の注意が必要である。

[ストーカー]

各学部・学科で、1～3%の学生がストーカーの被害を受けたとしている。被害学生は男子27名、女子52名で、男子にも被害が少なからずある。しかし、のべ被害者数での比率（図5-4、図5-5）や学部・学科別学生数に対する比率で見ても、男子よりも女子で被害が多い。

[セクハラ]

セクハラ被害を受けている学生は、各学部・学科で歯学部の2.4%を除くと1%以下である（図5-9）。被害学生数は男子13名、女子20名である。人数だけでいうと、被害学生の半数近くが男子で、殆どが工学部である。学年別回答結果からすると、セクハラを受けた学生は、6年制女子で4年生以降に増加する傾向にある。なお、学部・学科別学生数に対する比率（図5-9）で見ると、歯学部の比率が圧倒的に高い。工学部の男子の比率は他学部とそれほど変わらない。被害学生が工学部男子に多いのは、母集団が大きいことによる。

前回調査の分析結果は、「大学内でセクハラを受けた」という項目と、「親しい教職員がいるか」（質問41）や「教員との会話」（質問40）との間に関連性のあることを示しており、親しい教職員がいる学生や、教員との会話が多い学生にセクハラ経験者が多い傾向がある。後述するが、歯学部では、親しい教職員がいる学生や、教員との会話が多い学生の比率が、他の学部・学科に比べて高く、このことがセクハラの高さに関連すると思われる。「親しい教職員がいる」や「教員との会話が多い」は学生と教員との垣根の低さを示す。好ましい事柄であるが、セクハラの高さは、それが裏目に出た結果と言える。学生との垣根の低さを維持しつつ、教員の意識向上を図ることが歯学部求められる。

一方、「大学内でセクハラを受けた」と回答した学生の相談先（図5-10）は、友人か家族というのが約60%で、教員に相談する場合も20%内外存

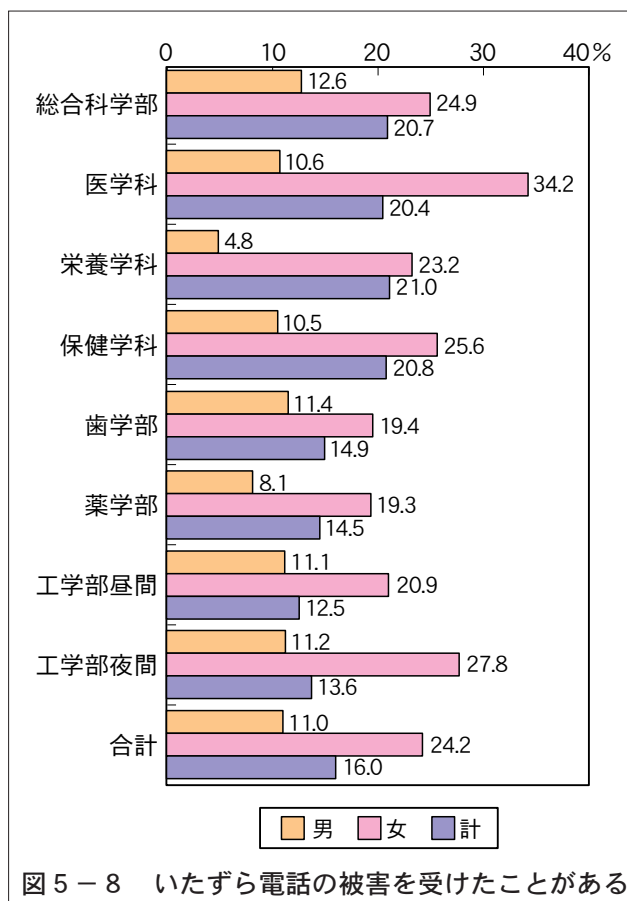


図5-8 いたずら電話の被害を受けたことがある

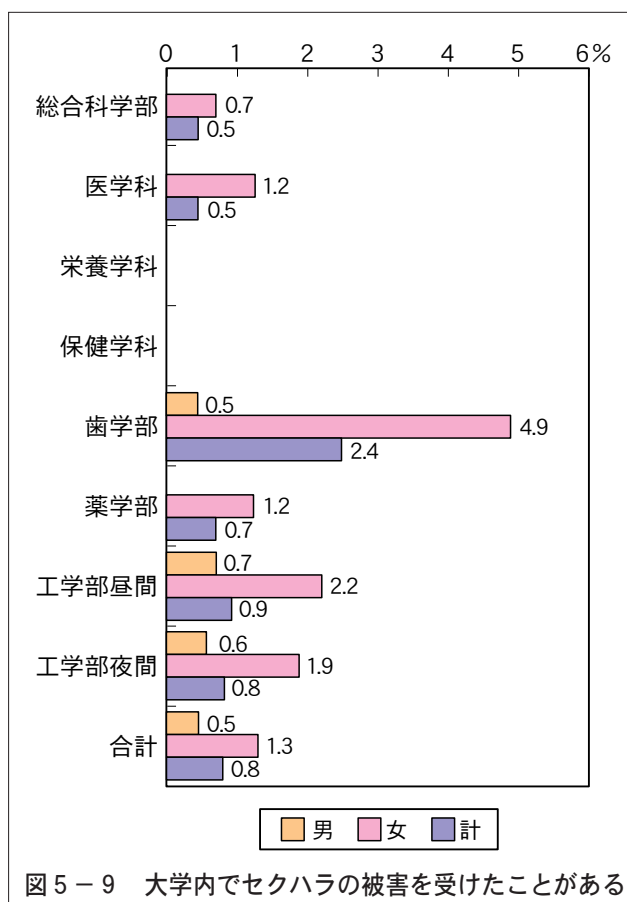
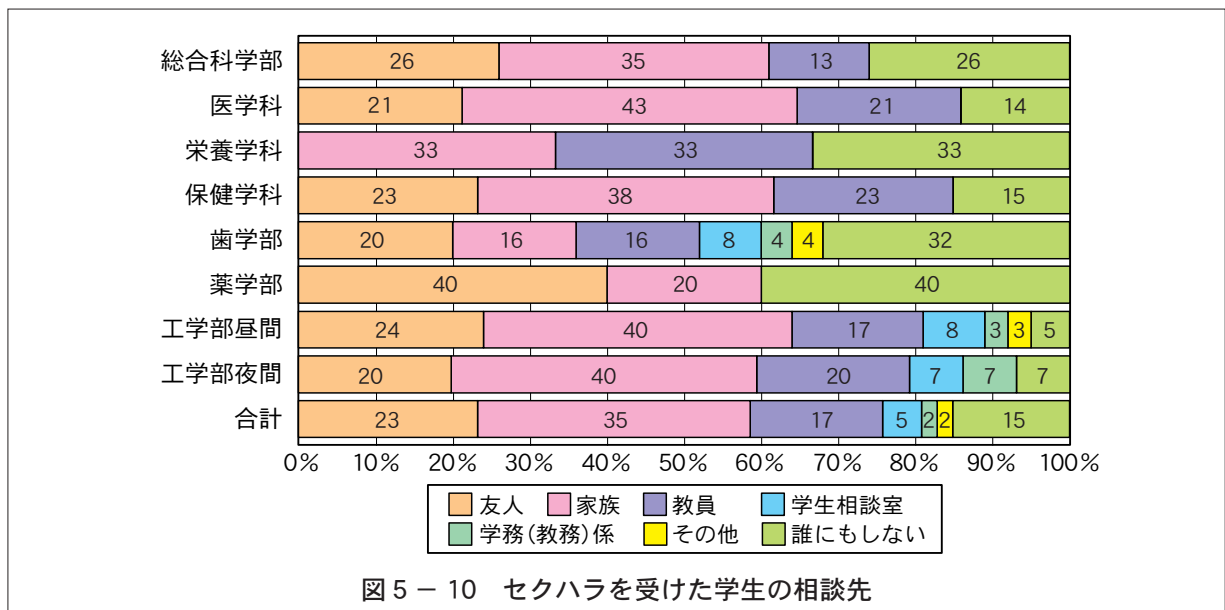


図5-9 大学内でセクハラの被害を受けたことがある

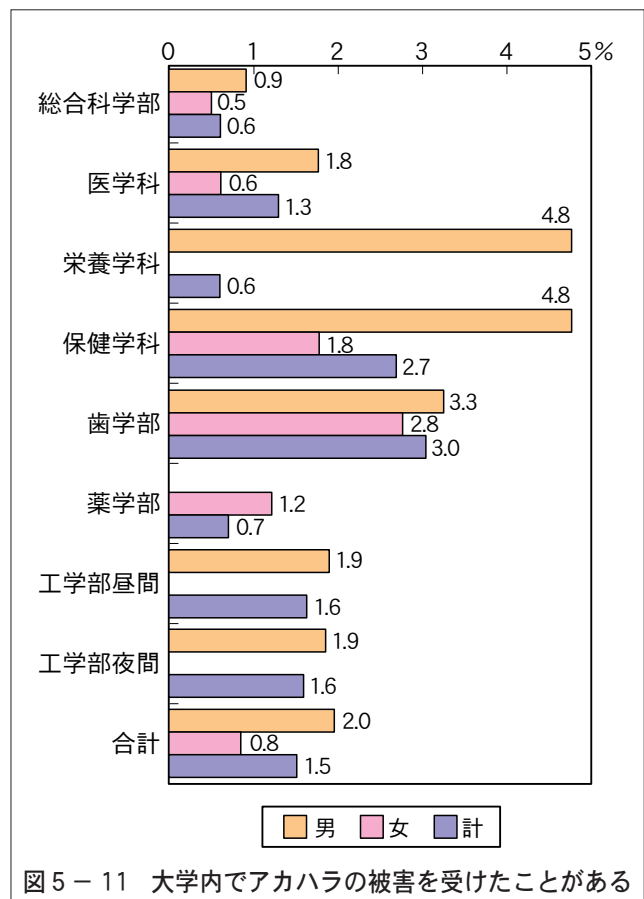


在する。しかし、歯学部と栄養学科では、友人か家族に相談する比率は低い。なお、女子では教員に相談する比率は著しく少なく、学生相談室に相談したケースもない。誰にも相談しない率も女子に多い。「秘密は守られる」、「訴えたことによる不利益からは保護される」等の学生相談室の対応の仕方を周知させる必要がある。

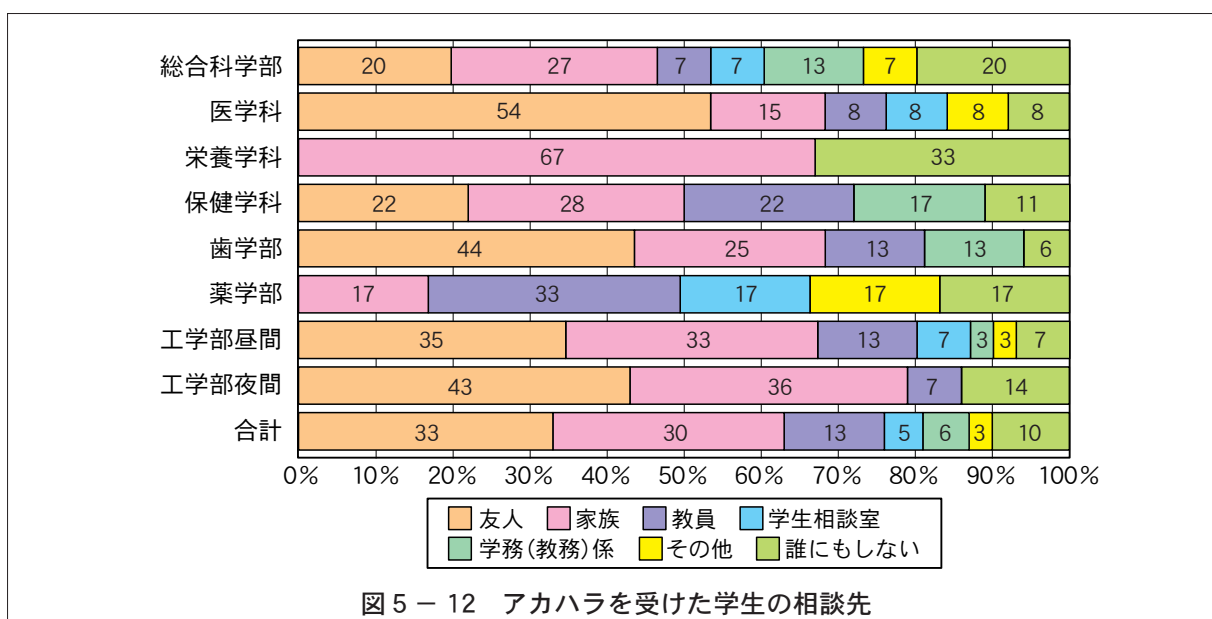
[アカハラ]

アカハラ被害を受けている学生は、各学部・学科で0.6～3.0%である。被害を受けた学生数は男子51名、女子13名で、被害学生は男子に多く、この傾向は、学部・学科別学生数に対する比率で見ても同様である。アカハラ被害が女子に少ないのは、男性教員の「女子学生に対する甘さ」や「セクハラと取られることへの恐れ」等が関連すると思われる。なお、学年別の回答結果からすると、「アカハラを受けた」と回答する学生は6年制で4年生以降に増加する傾向にある。学部・学科別学生数に対する比率で見ると、アカハラ被害は歯学部と保健学科で多く、総合科学部・栄養学科・薬学部で低い。一方、アカハラ被害を受けた学生の相談先(図5-12)は「友人」か「家族」が60～70%であるが、薬学部、総合科学部、保健学科でその比率は低い。栄養学科と薬学部では「友人」と回答した学生はいない。

前回調査の分析結果は「大学内でアカハラを受けた」という項目と「親しい友人がいるか」(質問42)や「精神状態」(質問26)との関連性を示しており、アカハラ経験者には、友人のいない者や、いらいらするとか何となく不安と



いう精神状態の学生に多く、充実している学生には少ない。学生と教員の対人関係のこじれがアカハラに発展すると考えると、うなづける結果である。対人関係の苦手な学生や精神的に不安定な学生に対して、その存在を認め、許容的に接する度量の広さが、教員には要求される。



[学生相談室]

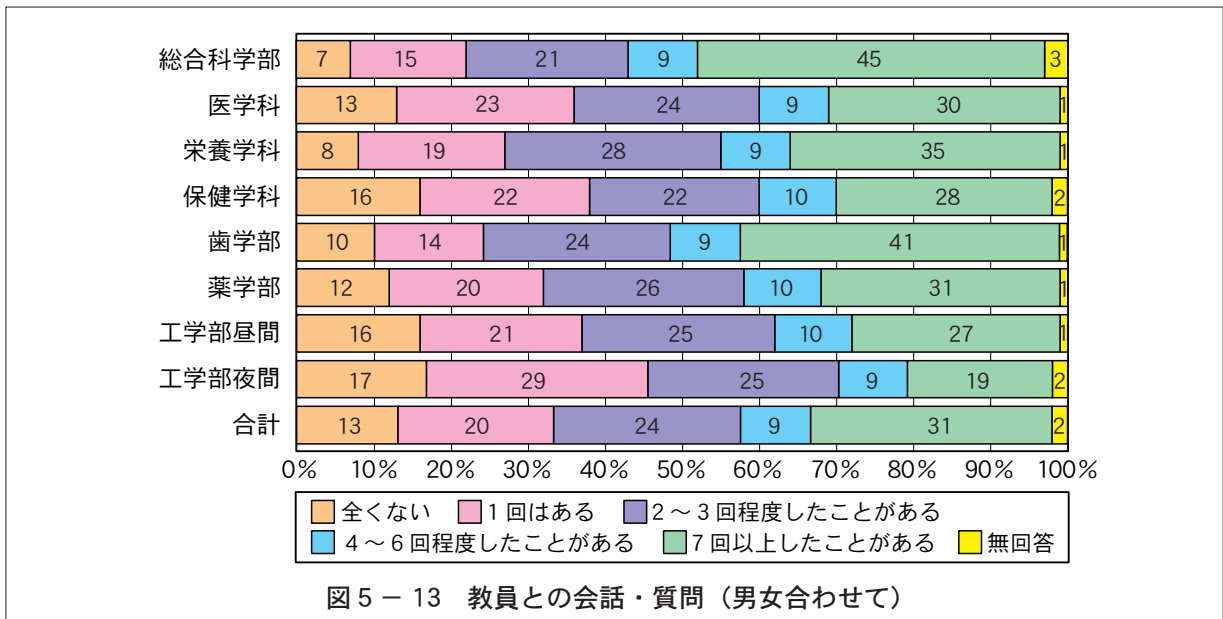
学生相談室を利用したことがある学生は10%に満たない。人数的には男子174名、女子102名で、男子に多い。利用者は、常三島地区(200名)に比べて蔵本地区(76名)で少ないが、回答者数における利用者の比率は常三島地区で7%、蔵本地区で5%である。蔵本分室でのインターカー在室時間が週半日だけという現状からすれば、蔵本地区学生の利用率は予想以上であるが、インターカーの在室時間を増やすこと等で、利用率を、少なくとも常三島地区レベルまで上げる努力が必要である。また、「学生相談室を知らない」と答えた人が、少なくともまだ10~20%いる。セクハラ・アカハラ被害を受けていながら、学生相談室を訪れていない学生はまだ多い。学生相談室の役割、さらには「秘密は守られる」、「訴えたことによる不利益からは保護される」等の学生相談室の対応の仕方をより広く学生に知ってもらう必要がある。

5-3 教職員との交流 (図5-13~図5-16)

[教員との会話・質問] (質問40)

「今年度中に教員と話や質問をしたことがありますか」との質問に、「全くない」と回答した学生が、全ての学部・学科で10%内外いる(図5-13)。その比率は工学部と保健学科でやや高く、総合科学部、栄養学科、歯学部でやや低い。一方、「7回以上したことがある」と回答した学生は、全学で30%強いるが、総合科学部と歯学部で多く、工学部で少ない。なお、男女別では、「全くない」と回答した学生はいずれの学部も女子に多く、「7回以上したことがある」と回答した学生は殆どの学部・学科で男子に多い。

学年別に見た場合、4年制(図5-14)では、「全くない」と答えた学生が学年進行につれて減少し、「7回以上したことがある」と答えた学生は学年進行につれて増加する。特に4年での増加が著しい。卒業論文指導の関係と思われる。一方、6年制(図5-15)では、「全くない」と回答した学生に、学年進行に伴う減少は見られない。就学状況の変化が影響を及ぼしていないと考えられ、このような学生



には教員からの積極的な働きかけが必要である。「7回以上したことがある」と回答した学生については、学年進行につれて増加するものの、5年で最大値を示し、6年でやや減少する。臨床実習が6年にあることからすると予想外の結果である。

前回調査の分析結果は「教員との会話・質問の回数」と「授業出席状況」(質問50)や「精神状態」(質問26)との関連を示しており、出席していない学生の方が教員との会話が多く、「充実している」「いろいろする」「何となく不安」の学生に教員との会話量は多く、「やる気が出ない」「落ち込みやすい」

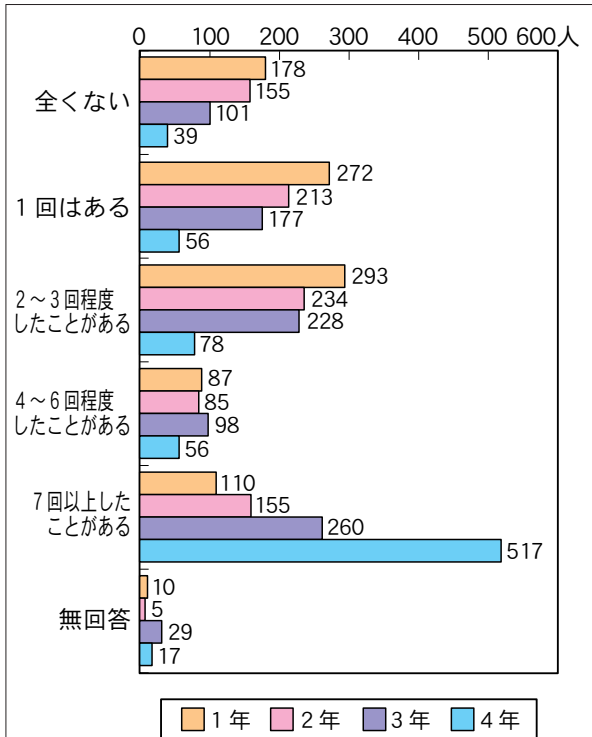


図5-14 教員との会話・質問 (4年制学部・学科の場合)

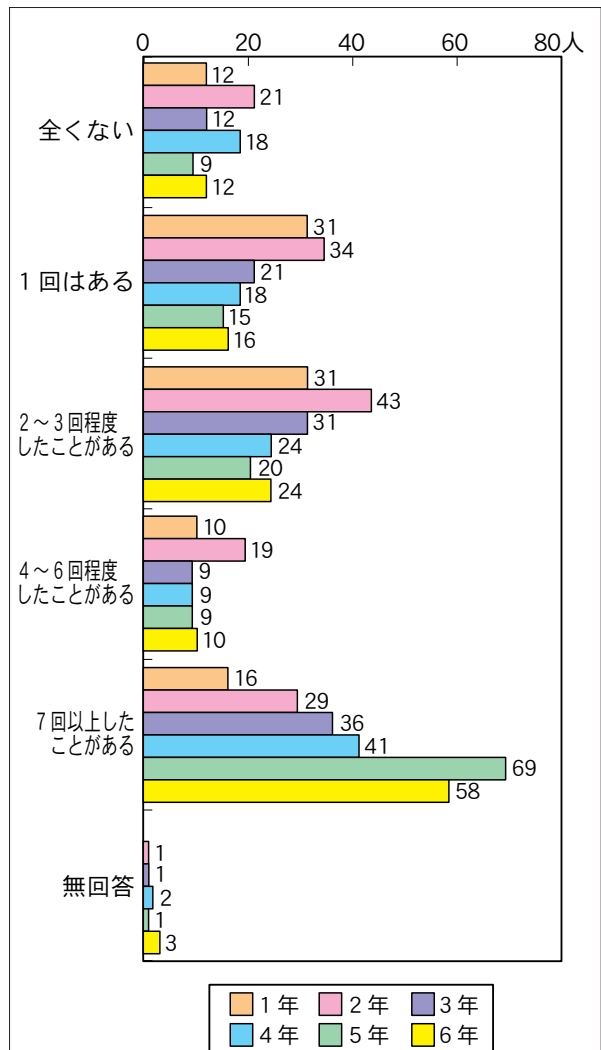


図5-15 教員との会話・質問 (6年制学部・学科の場合)

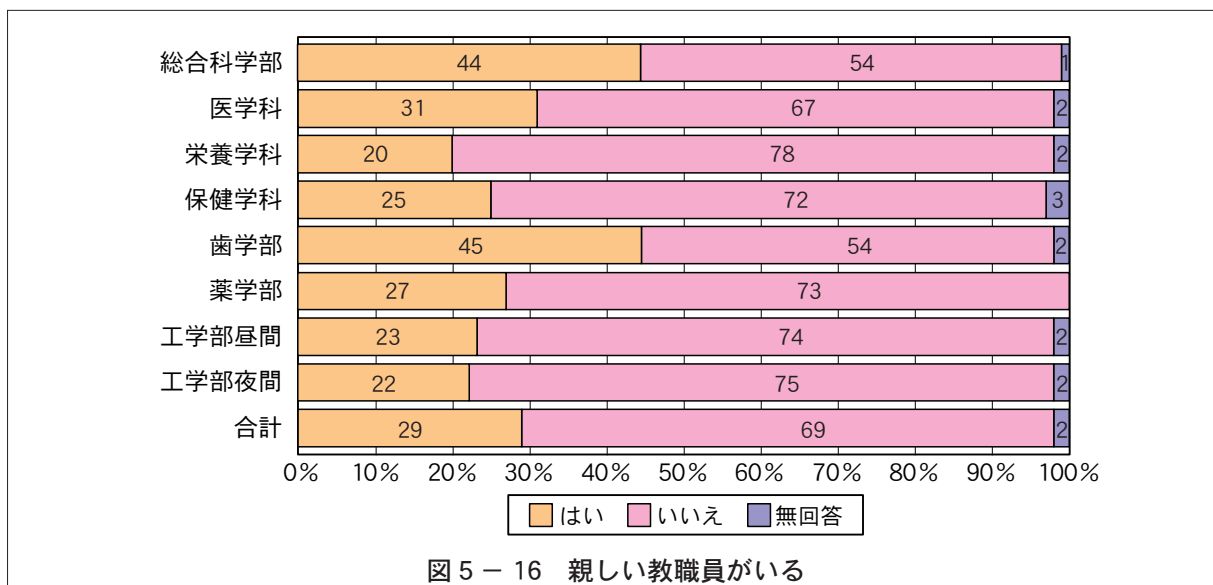
学生に少ない傾向にある。出席していない学生や、目立って精神的に不安定な学生に対して、教員が積極的に働きかけている様子が見られる。今後は、精神的に不安定なものの目立たない学生に対する働きかけが課題といえる。教員として学生に広く目を配ることのできる体制、学生相談室や保健管理センターとの連携がさらに強化されることが望まれる。

[親しい教職員の存在]

「親しい教職員はいますか」との質問に対し、「はい」と答えた学生は総合科学部と歯学部が多かった(図5-16)。栄養学科と保健学科では男女差が見られ、男子学生で親しい教職員のいる比率が高かった。なお、学年別に見た場合、4年制と6年制のいずれでも、学年進行に伴い親しい教職員のいる比率が高まったが、4年制では最高学年の4年で増加率が他に比べ高かった。6年制では、中間学年である4年で、増加率が他に比べ高かった。4年での増加の原因として、4年制では卒業論文作成、6年制では研究室配属が考えられる。

前回調査の分析結果では、「親しい教職員の存在」と「授業出席状況」(質問50)や「精神状態」(質問26)との関連が示されており、授業に出席していない学生の方が親しい教職員をもつ割合が多く、精神的には、「充実している」、「いらいらする」、「何となく不安」の学生に比べて、「やる気が出ない」、「落ち込みやすい」学生に、親しい教職員が少ない傾向にある。「教員との会話・質問の回数」の場合と同じ傾向である。

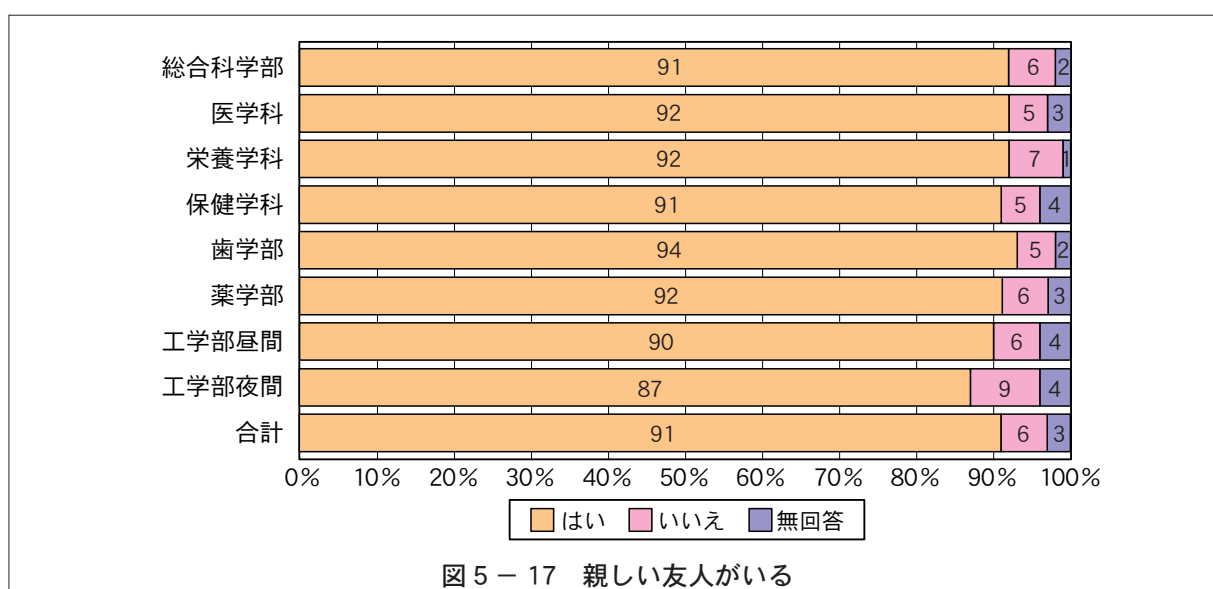
学生の側から積極的に教職員に接触を求めてくることは少ない。学生と教職員の接触が深まるには、学生の長期欠席や目立った精神的不安、卒業論文作成や研究室配属等、何らかの特別なきっかけが必要で、しかも教職員から積極的に働きかけなければならないことが、以上の結果からわかる。学生と教職員との垣根を低くするには、講義室や事務室での通常の接触以外に、立場の枠を弛めた、あるいはより距離の近い接触機会を設けることが必要となる。新入生合宿研修や大学祭はその良い機会であるが、それ以外に「大災害に備えた全学・全学部的な避難訓練」や「全学部的な大掃除」等、教職員と学生が共同で何か企画を行うことも効果的と思われる。その一方、「学生と教職員との垣根を低くする」ことは、セクハラ・アカハラ等のマイナス面をもつことも知っておく必要がある。「垣根は低く見えても、垣根を越えない・垣根は無くなる」という意識を教職員はもつべきであり、「教員が学生に対してもつ権限は、教員が考えている以上に絶大である」ことを教員は常に意識して、学生と接する必要がある。学生との接し方についてのFDをきめ細かく実施していく必要がある。



5-4 友人の存在 (図5-17)

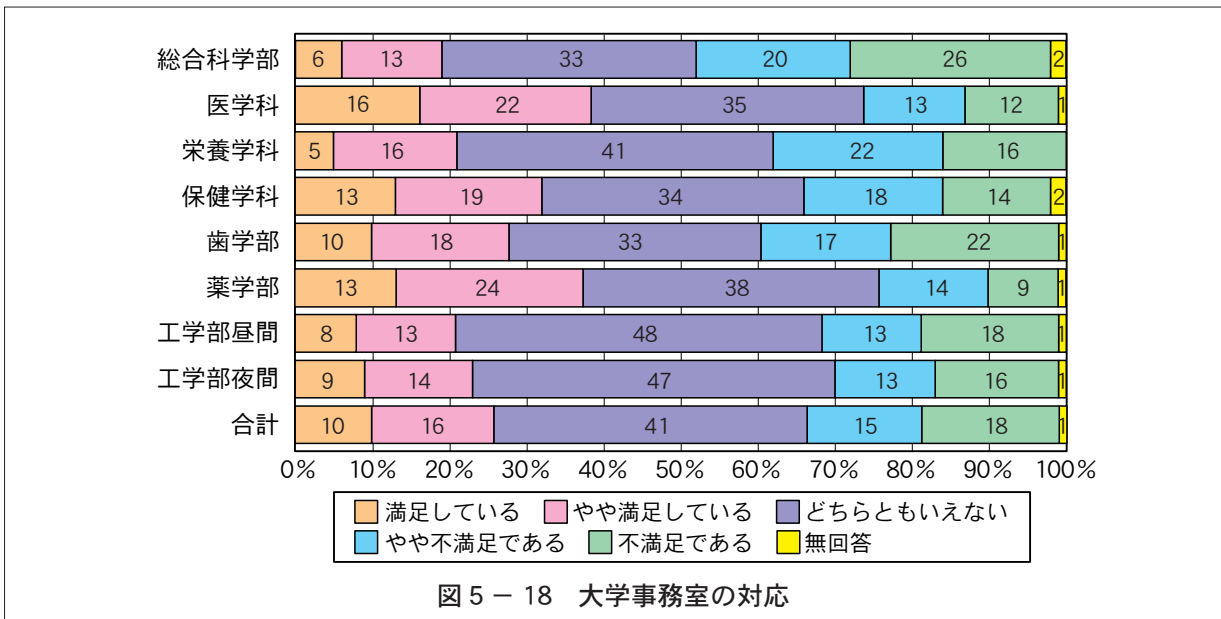
「あなたには、親しい友人はいますか」の質問に対し、いずれの学部・学科でも約90%の学生が「はい」と回答しているが、工学部夜間でやや低い値である(図5-17)。なお、男女差で見ると、「はい」と回答した学生は男子より女子でやや多い。

前回調査の分析結果は「友人の存在」と「授業出席状況」(質問50)や「精神状態」(質問26)との関連を示している。すなわち、授業への出席率の高い学生に友人のいる割合は高く、出席率が低くなるにつれて、友人のいる割合が低下する。精神的には、充実している学生に友人の存在する割合が高く、「いらいらする」、「何となく不安」、「やる気が出ない」、「落ち込みやすい」学生に、友人の存在する割合が明確に低い。友人をつくることが授業の出席率を高める。新入生合宿研修や大学入門講座の早期実施は、友人をつくるいい機会となる。課外活動は友人をつくる機会、さらには充実した精神状態をつくる上で有効と思われる。新入生合宿研修あるいは大学入門講座を通して、課外活動への加入を早期に学生に働きかける必要がある。また、学生のメンタルヘルスに対応する全学的なシステムをさらに充実していくことも必要である。



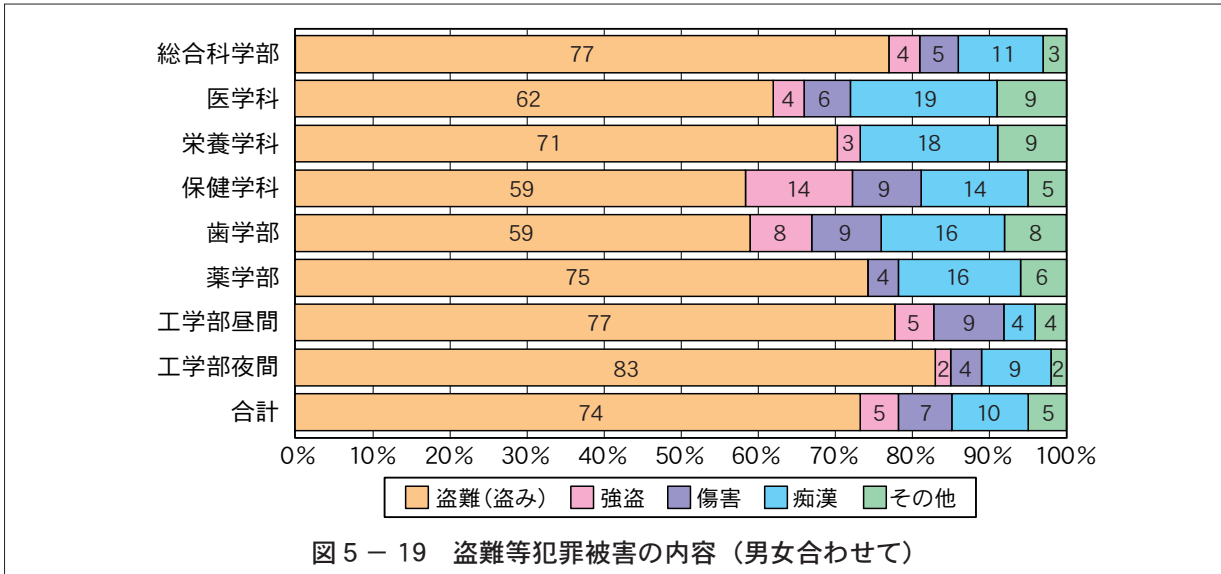
5-5 大学事務室の対応への満足度 (図5-18)

「大学事務室の対応に満足していますか」の質問に対して「満足している」、「やや満足している」と回答した学生の比率は、「やや不満である」、「不満である」と回答した学生の比率よりも概して低い。満足度は総合科学部、栄養学科、工学部で特に低い。なお、この質問に対しては「自由記入欄」に多くの苦情記載が見られた。学生の目線に立ったサービスが求められており、大学事務室職員の意識の変革が必要である。教員だけでなく、職員に対しても、学生との接し方についての能力開発(Staff Development, SD)をきめ細かく実施していく必要がある。18歳人口の減少に伴い、今後、大学の経営は益々困難になる。「学生中心の大学づくり」が叫ばれる所以はここにある。「学生との窓口になる学務部・学部の職員は大学の顔である」という意識を、大学の経営陣及び教職員全員がもつべきである。



5 - 6 盗難等犯罪被害 (図 5 - 19 ~ 図 5 - 21)

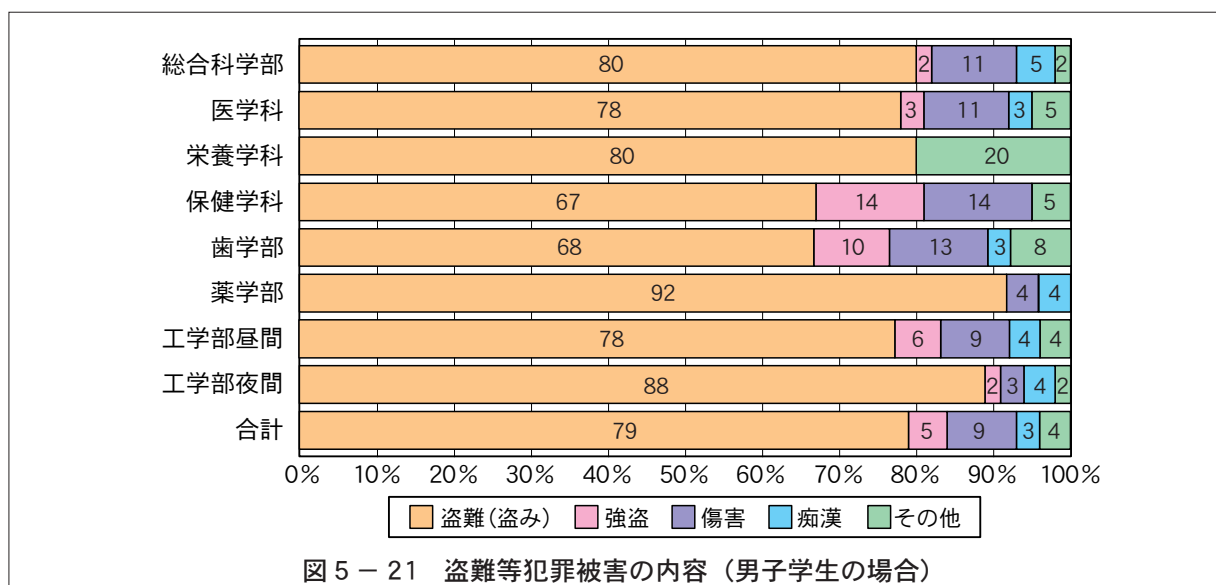
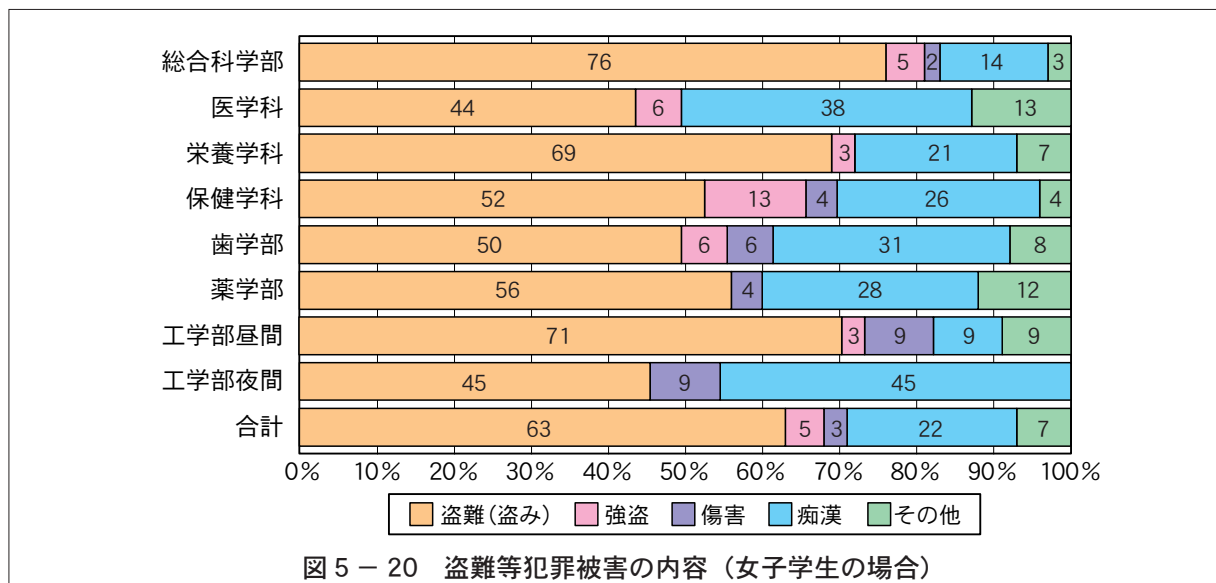
全ての学部・学科を通して、20%弱の学生が被害に遭っている。男女別では、女子よりも男子で多く被害に遭っている傾向にある。



学生が出会った事件としては、全ての学部・学科で「盗難 (盗み)」が最も多く、のべ被害者数の 60 ~ 80%を占める (図 5 - 19)。また、男女差が見られ、のべ被害者数で占める比率は女子 (図 5 - 20) で低い。「強盗・傷害」は、学部・学科を通して、のべ被害者数の 10%前後を占める (図 5 - 19)。「痴漢」は女子 (図 5 - 20) に特徴的で、のべ被害者数に占める比率で見た場合、女子が受ける被害の 20 ~ 30%を占める。「盗難 (盗み) 等の犯罪被害に遭った場所」については、全ての学部・学科を通して、回答数中の 40%内外が「大学構内」で被害に遭ったとの回答であった。

大学内での盗難 (盗み) の予防としては、「現金・貴重品を肌身につけておく」ことを周知徹底させる以外にない。また、学内で起こった盗難等犯罪被害については、その概要をいち早く全学に通知し、注意を呼びかけることが必要で、その連絡網を確立する必要がある。また、盗難等犯罪被害時の警察官の立入りについてはガイドラインがつけられている。全学や学部の学生委員会委員が交代する際に必要な

知識が伝わるよう、適切なマニュアルを作成する必要がある。



第6章 修学・進路状況

6-1 本学を選んだ理由と所属学部満足度 (図6-1, 図6-2)

図6-1を見ると、本学を選んだ理由として、「地元の大学だから」、「国立大学だから」、「希望する学部学科があったから」の3つが大きな比率となっていることが分かる。前2者は経済的理由等からよく納得できる内容であるが、目的意識の有無を判断する材料として「希望する学部学科があったから」と「就職等将来を考慮して」を採りあげると、総合科学部と工学部では22～25%程度であり、医学部、歯学部、薬学部の39～46%と比較するとかなり低くなっている。このことは、図6-2の所属学部満足度において「やや不満足である」、「不満足である」の合計が総合科学部と工学部で高くなっていること、あるいは、図6-3の単位取得状況において「半分程度取得できた」、「あまり取得できなかった」、「まったく取得できなかった」の合計が工学部において比較的高くなっていることと強い相関があると考えられ、改善が望まれる。

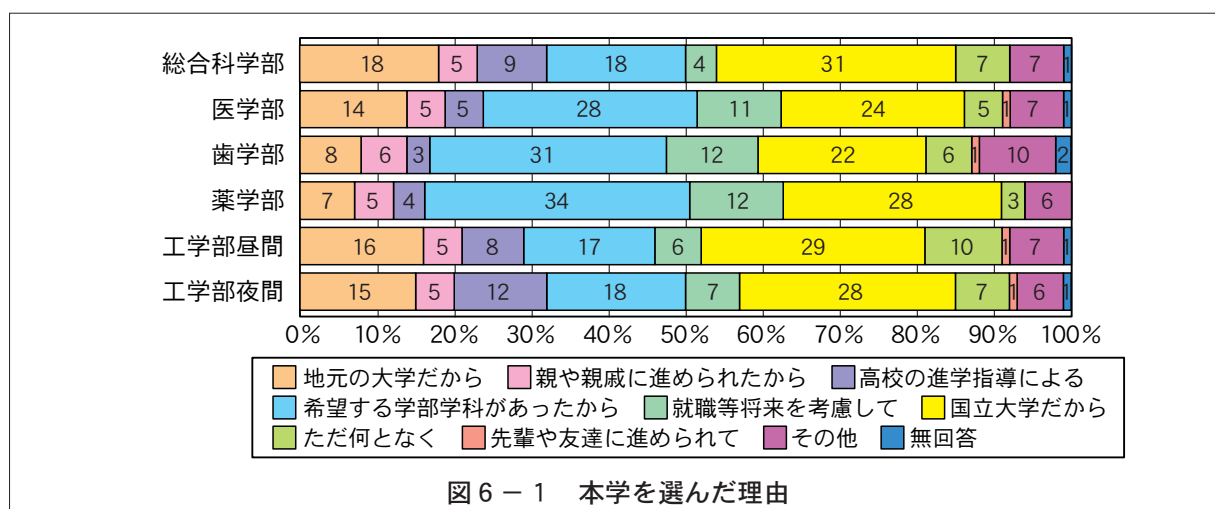


図6-1 本学を選んだ理由

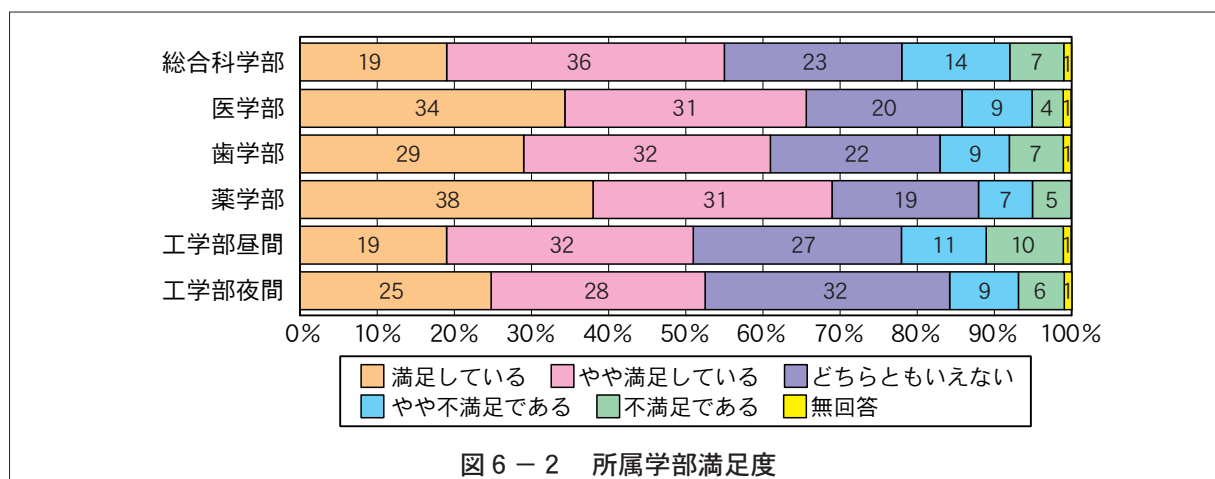


図6-2 所属学部満足度

6-2 単位取得状況と授業出席状況 (図6-3～図6-8)

単位を順調に取得している比率は図6-3の単位取得状況において、「全部取得できた」、「ほぼ取得できた」の合計と考えられるが、総合科学部から工学部夜間への順に92%、96%、95%、97%、86%、88%となっている。工学部ではやや低いが、単位が順調に取れない場合は留年、退学等につながるから、

6-1節で述べたように目的意識のある学生を獲得するよう努力すると共に、下記の図6-6, 6-8を考慮して「勉強意欲をかき立てる授業形態」、「魅力ある授業形態」などへの改善が望まれる。

図6-4は授業出席状況である。「全部出席している」、「ほとんど出席している」の合計を上記の学部順に並べると85%、83%、85%、88%、83%、89%となっており、学部間で特に大きな相違はないようである。そこで学年別の出席状況を調べたものが図6-5である。各学部で様々な分布をしているが、基礎学習期間である1～3学年について「全部出席している」、「ほとんど出席している」の合計比率を見れば、薬学部2年生の96%が最も高く、総合科学部3年生の77%が最も低くなっている。

図6-6は「出たり出なかつたりしている」、「ほとんど出席していない」、「まったく出席していない」と答えた学生の欠席理由である。主な理由は「授業が理解できない」というよりはむしろ、「勉強の意欲がわからない」、「授業に魅力がない」となっている。学年別に調べた結果は図6-8に示されているが、1～3学年では、薬学部1年と工学部夜間3年で「授業が理解できない」という比率が26～27%と高くなっている以外は、図6-6と傾向は似ている。

「授業が理解できない」と答えた学生にその後の対処法を尋ねた結果が図6-7である。これは比較的小人数の場合であるが、図から分かるように「気になるけど何もしない」、「気にしない」という対処をする学生も平均で26%程度いるので、学生へのきめの細かい教育的配慮が重要であると思われる。

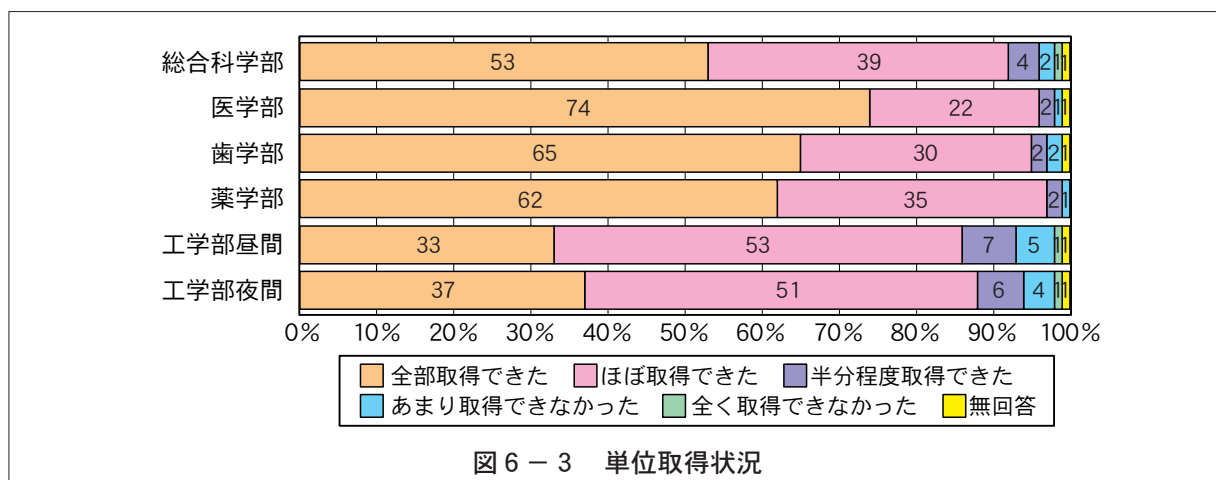


図6-3 単位取得状況

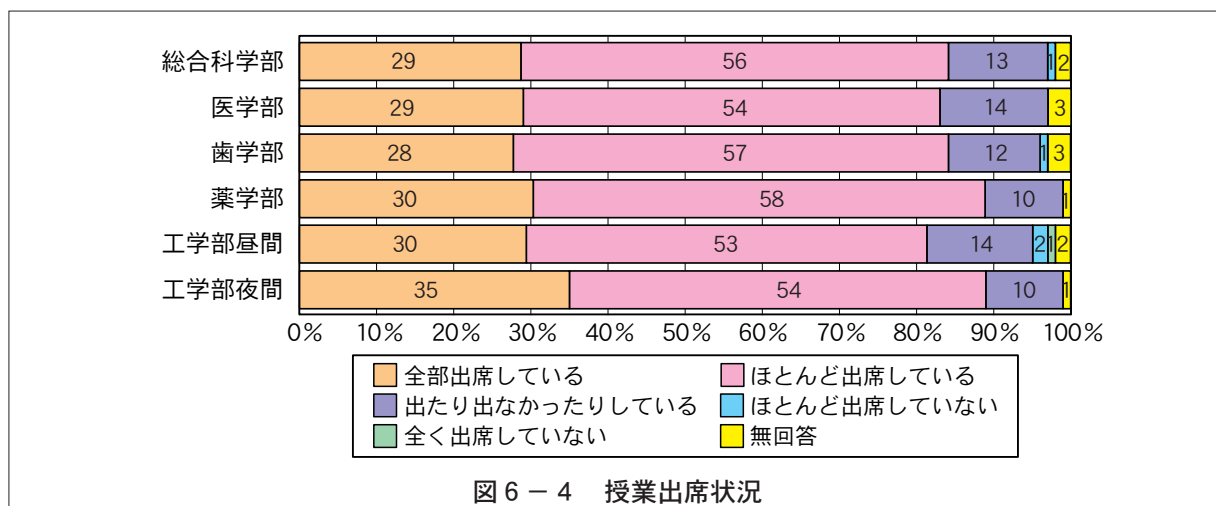


図6-4 授業出席状況

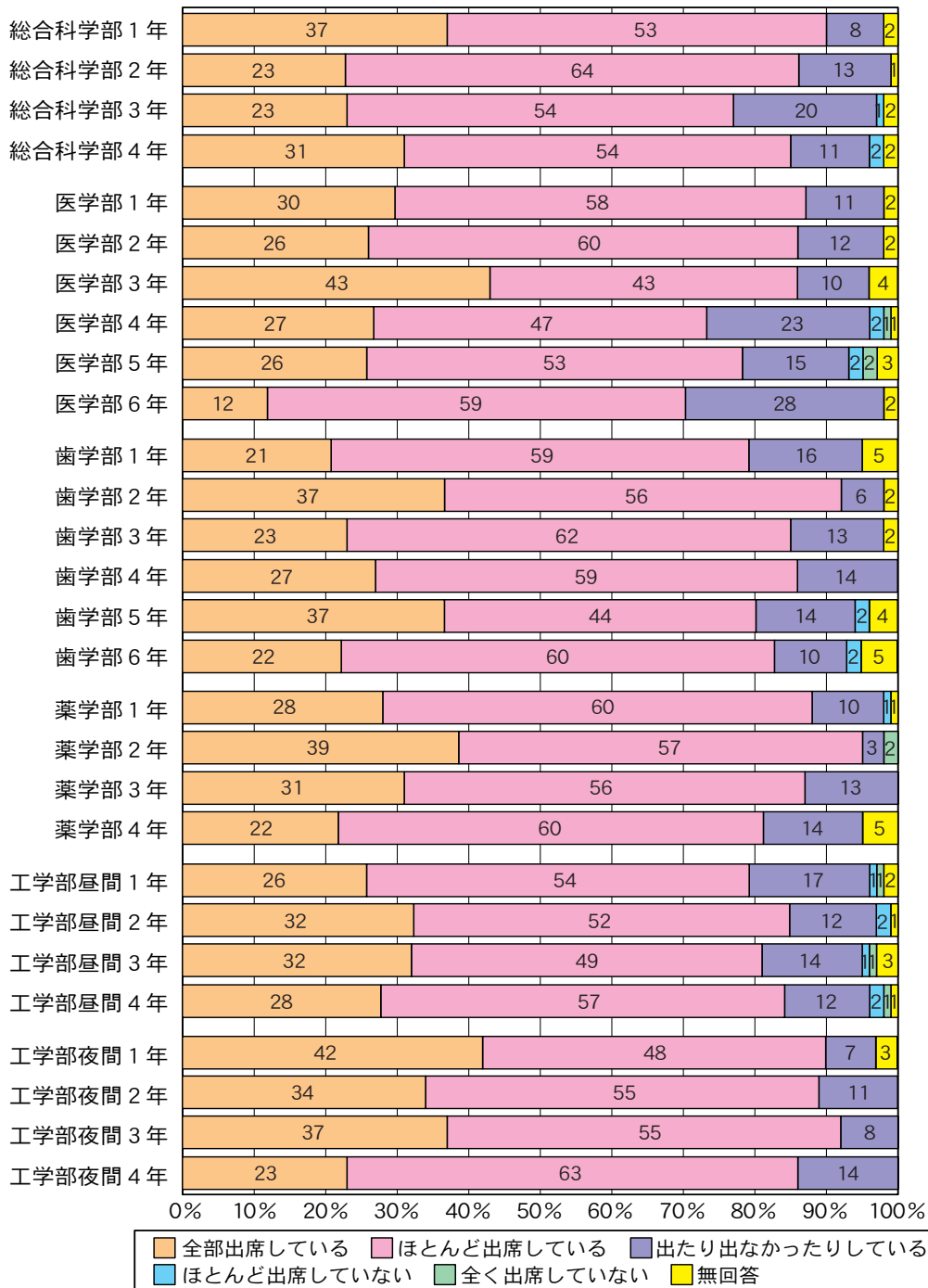


図 6 - 5 学年別授業出席状況

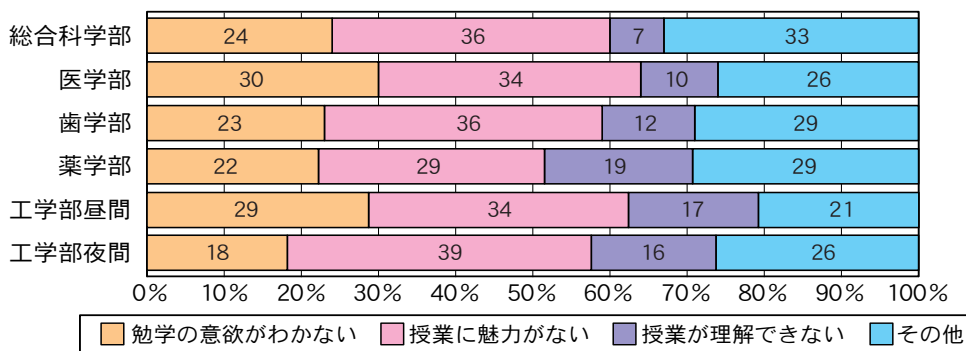


図 6 - 6 授業欠席理由

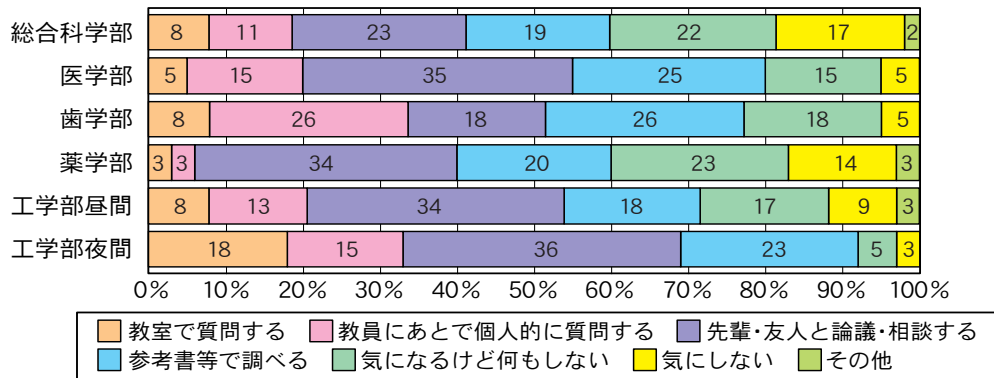


図 6 - 7 授業が理解できないで欠席する学生の対処法

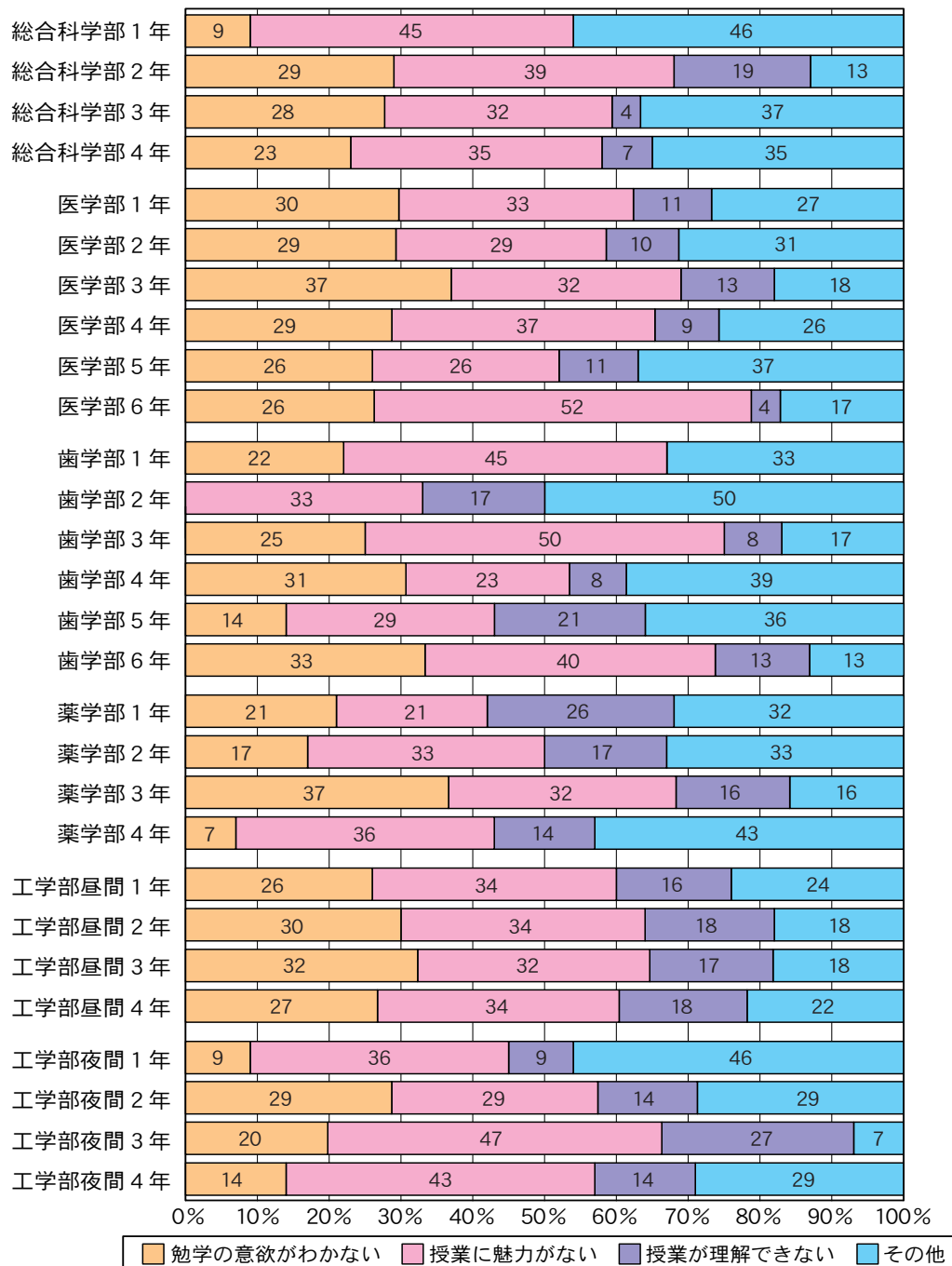


図 6 - 8 学年別授業欠席理由

6-3 授業の満足度 (図6-9, 図6-10)

図6-9で「満足している」、「やや満足している」、「どちらともいえない」を満足の範疇と考えて合計すると、総合科学部から工学部夜間への順に82%、77%、73%、74%、76%、80%となっており、平均で約77%である。前回の調査(平成13年8月)では85%、79%、79%、89%、72%、77%、平均約80%であったから、全体的に少し下がっているようにも見えるが、前回は約3分の1(工学部夜間は約2分の1)の無作為抜き取り調査、今回は全数調査であるから、正確な比較は難しい。一方、授業に不満足な学生は「やや不満足である」、「不満足である」を合計すると上記の順に、17%、21%、26%、24%、21%、19%となっており、平均で約22%、5人に1人が不満を持っている。授業毎に行われるアンケートの結果などを利用して、一人一人の学生に細かく配慮することが必要だと思われる。図6-10は、満足度の調査で「やや不満足である」、「不満足である」と答えた学生に満足できない理由を尋ねた結果である。主な理由としては「授業内容がつまらない」が約30%、「教員の教え方に工夫がたりない」が約31%であり、ほぼ同率となっている。学生は多様であるから、授業内容を高度なものにすれば理解できないものがあり、易しくすればつまらないとの批判が出る。授業時間は限られているので両方を同時に解決することは難しいが、上で述べたように一人一人の学生に細かく配慮しながら、教え方や内容を工夫する以外にないのではないだろうか。

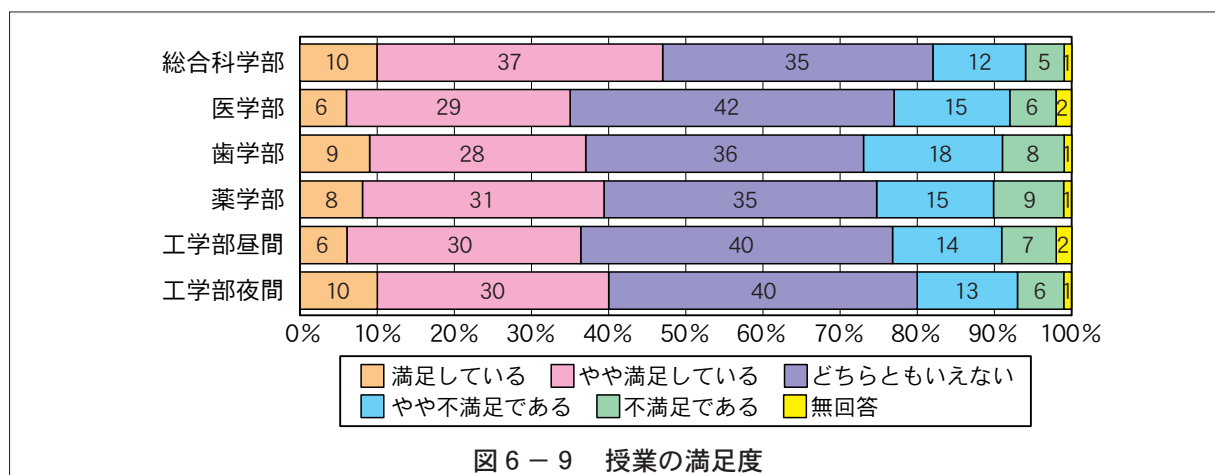


図6-9 授業の満足度

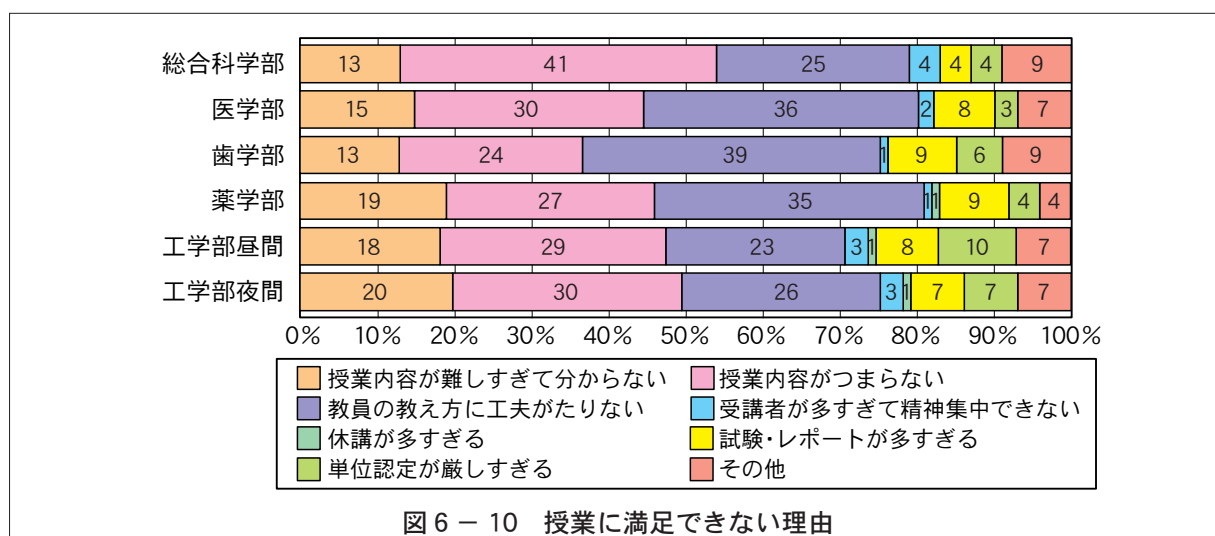


図6-10 授業に満足できない理由

6-4 授業予習復習時間とカンニング経験 (図6-11, 図6-12)

図6-11を見ると、1時間未満しか予習復習をしない学生が62%から75%、平均で69%いることが分かる。前回の調査(平成13年8月)でも平均で71%であった。一方、1時間以上の予習復習をしている学生の割合は、総合科学部から工学部夜間の順に31%、37%、37%、26%、25%、25%となっており、医学部と歯学部で高く、薬学部と工学部で低くなっている。この比率を如何にして高くするか、各学部にとって重要な課題であると思われる。

図6-12はカンニングをしたことがあるかどうかを尋ねた結果である。平均で22%の学生がカンニ

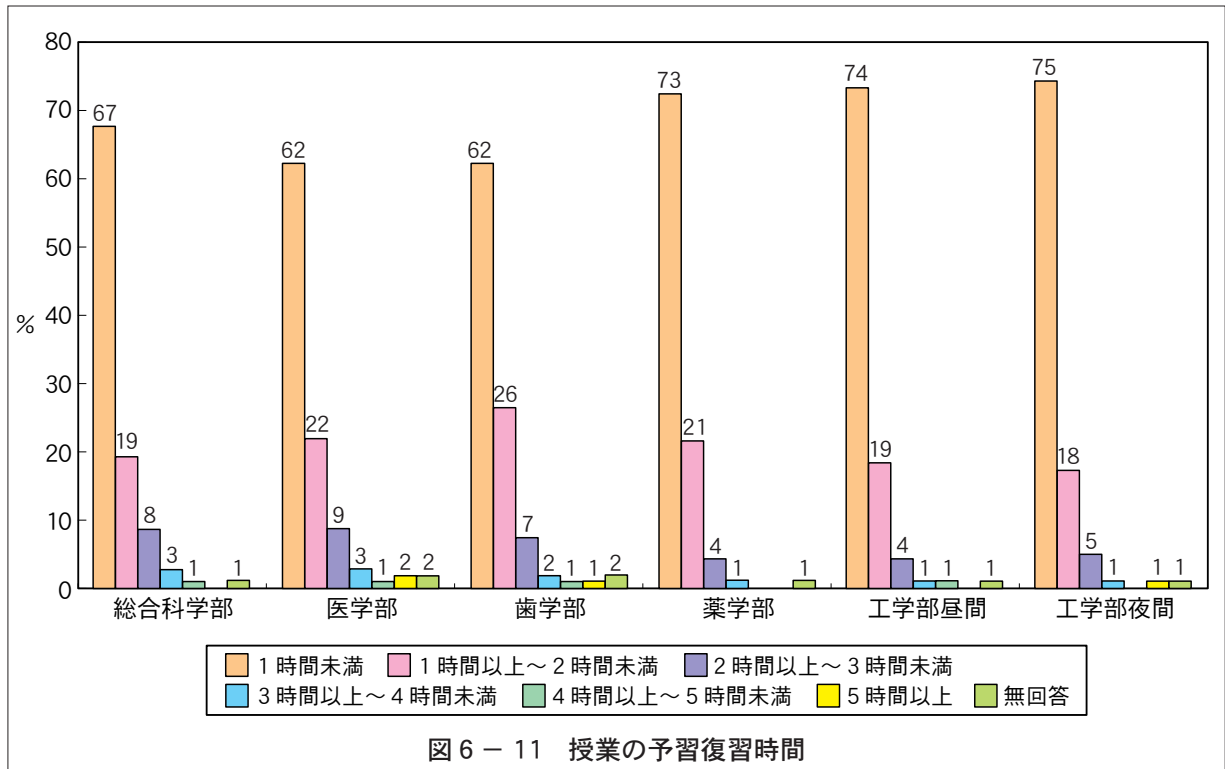


図6-11 授業の予習復習時間

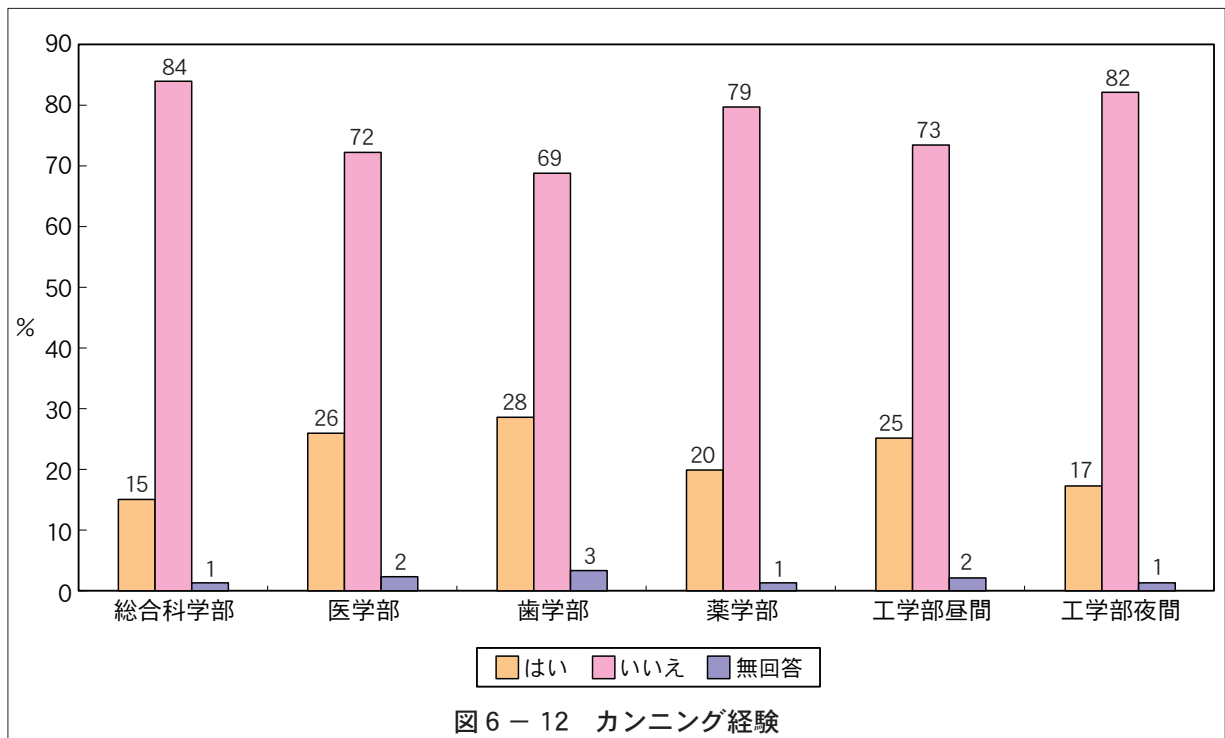


図6-12 カンニング経験

ング経験があり、これを前回の調査（15%、19%、24%、13%、23%、16%、平均18%）と比べると、全ての学部で同等か増加しており、不正行為に対する罪悪感の希薄化あるいは手軽な受験態度の拡大が読み取れる。全ての学部で厳密な試験実施法の再確認が必要であると思われる。

6-5 図書館の利用状況 (図6-13, 図6-14)

図6-13は図書館の利用回数を調べた結果である。よく利用する場合として「毎日」、「週2, 3回程度」、「週1回程度」を合計してみると、総合科学部から工学部夜間の順に31%、31%、47%、29%、28%、24%となっており、工学部夜間は時間的な制約があるので除くとしても、歯学部が特に高い率を示している。学生時代に書籍に囲まれて勉強に励むことは以後の人生を豊かにすると考えられるので、これは大変好ましいことと思われる。

図6-14は図書館について感じていることである。ここで特に「資料のコピーがとりやすい」という項目に着目してみると、総合科学部から工学部夜間の順に18%、29%、30%、29%、18%、24%となっており、蔵本地区では高く、常三島地区では低いという結果が出ている。資料のコピーは学生にとって重要なものであるから、利便性が向上するよう検討する必要があると思われる。

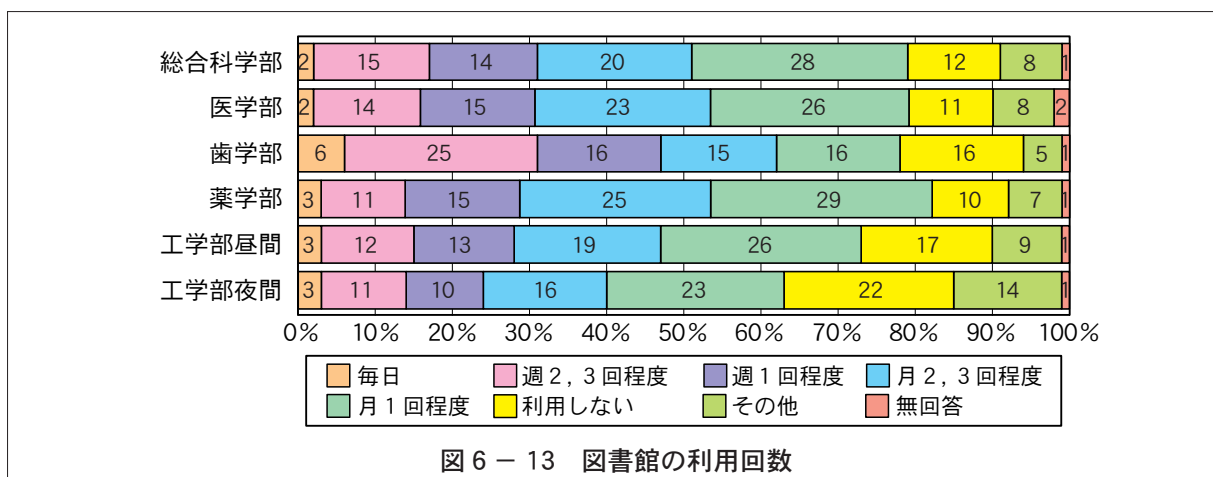


図6-13 図書館の利用回数

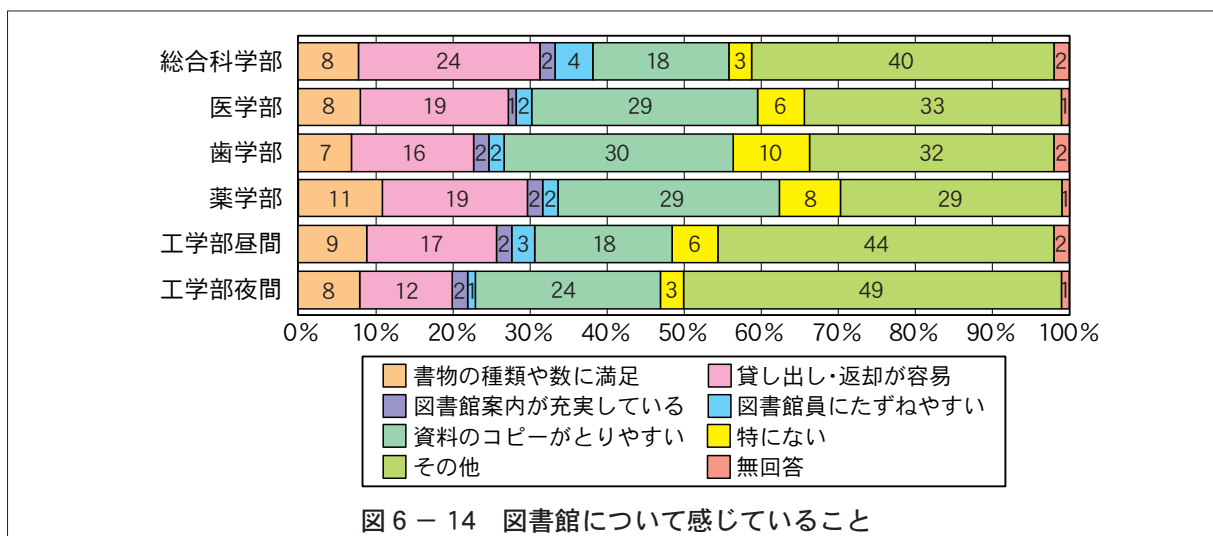


図6-14 図書館について感じていること

6-6 進路選択の方法 (図6-15, 図6-16)

図6-15は進路選択で重視するものを尋ねた結果である。どの学部でも「収入」、「就職先の将来性・

安定性」, 「能力を発揮できるところ」, 「人間関係の良いところ」が上位を占めており, 職場の安定性と同時に働き甲斐を求めていることが分かる。それぞれの平均値は18%, 21%, 18%, 17%となっており, 前回調査結果(20%, 23%, 21%, 17%)と比べても傾向は変わっていない。

図6-16は進路に関する情報の入手手段である。大きな比率となっているのは, 医学部・歯学部では「先輩・知人」, その他の学部では「就職情報誌・新聞・マスコミ」であり, 学部によって異なっている。これは高度の専門職とそうでないものの違いであり, 当然のことと思われる。「指導教員」や「就職担当教員」への依存度は比較的小さい。また, ここには項目として挙げられていないが, インターネットや就職支援室が行う企業紹介の利用者も多いと思われる。

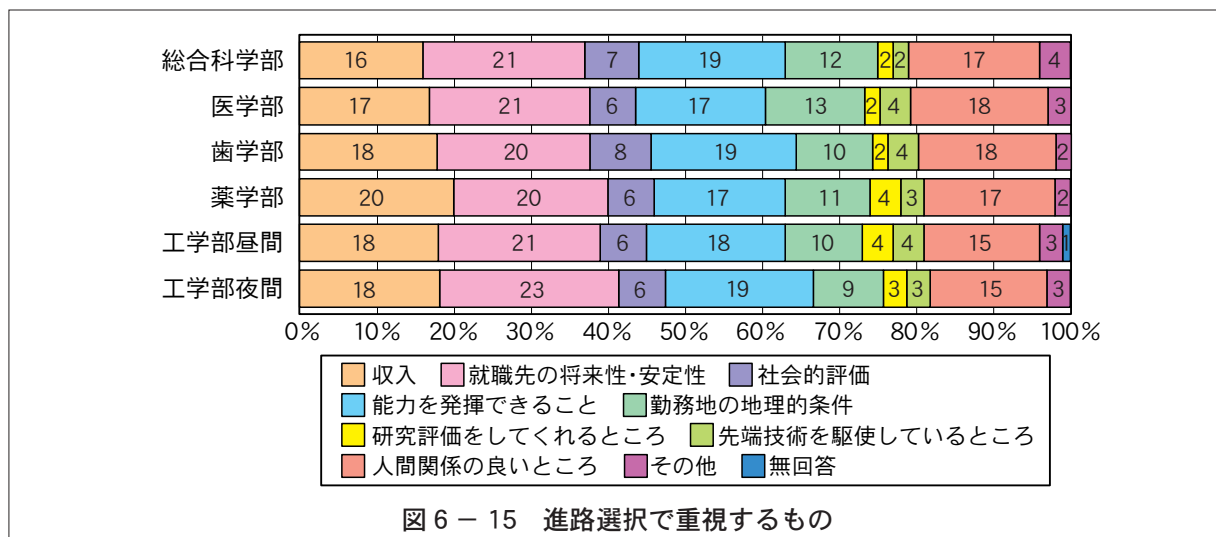


図6-15 進路選択で重視するもの

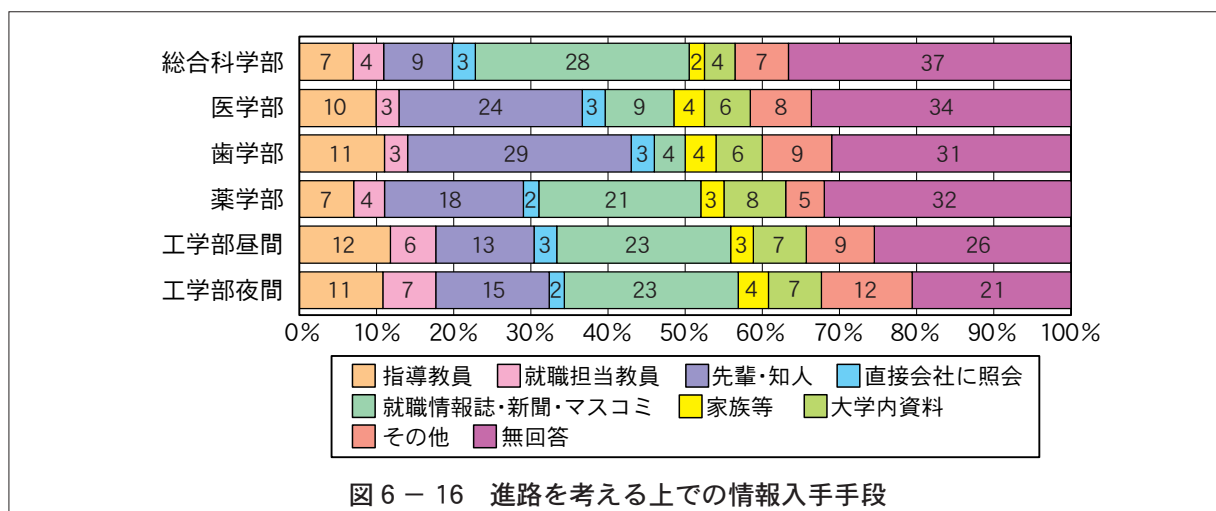


図6-16 進路を考える上での情報入手手段

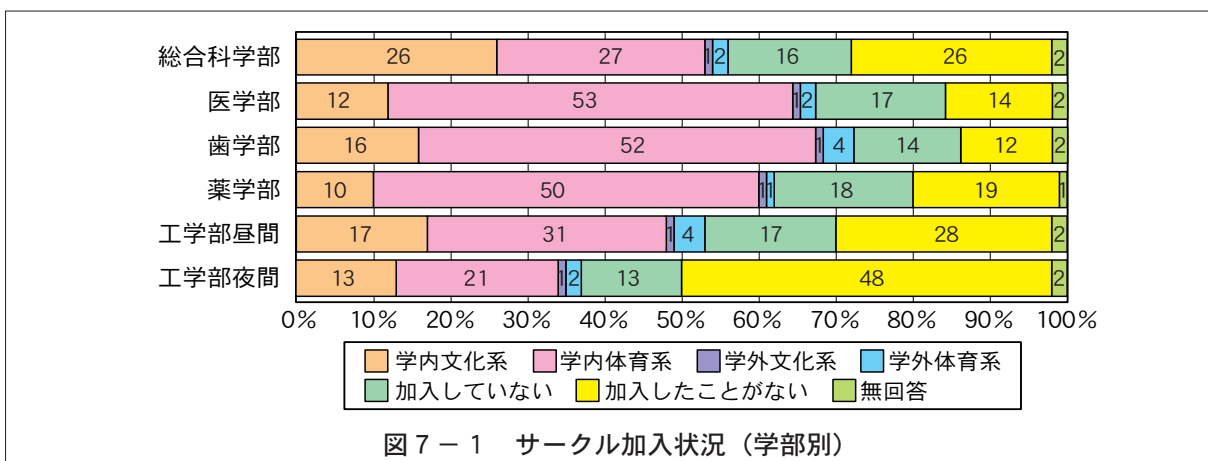
第7章 課外活動について

7-1 サークル加入状況 (図7-1~図7-3)

<加入率>

サークルへの加入率は、全体で75%を占めている。体育系サークルと文化系サークルの比較では学内及び学外で体育系40%、文化系18%であり、体育系サークルへの加入率が高い。前回調査との比較では、「学内体育系サークル」は39%で7ポイント増加し、「学内文化系サークル」では17%で1ポイント減少している。「現在加入していない」は17%、「加入したことがない」は22%を示し、加入していない学生は6ポイント減少している。また、学外のサークルへの加入率も増加傾向を示し、加入率で見ると限りではサークル活動への関心が高まる傾向を示している。

学部別のサークル加入状況(図7-1)は、医学、歯学、薬学部では60%以上の学生が学内及び学外のいずれかの体育系、文化系サークルに加入している。また、文化系サークルへの加入者が最も多いのは総合科学部(27%)であり、体育系サークルでは医学部(55%)、歯学部(56%)、薬学部(51%)の3学部で加入率が高い。加入率が低いのは工学部夜間で、体育系、文化系の両サークルへの加入率は合計で37%である。工学部夜間の加入率の低い要因は、すでに就業している学生も多く、授業形態等にも関連し、サークル活動に容易に参加できないことが推測される。なお、学部間で学生のサークルへの興味や関心は大きく異なっている。



<男女別>

男女別のサークル加入率(図7-2)は、文化系サークルへの加入が男子学生15%、女子学生22%と女性の加入率が有意に高い。学外の体育系サークルでは、男子学生の加入率3%、女子学生2%であり、学外体育系サークルへの加入は男子学生の加入が多い。また、現在サークルに加入していないのは女子学生に多いが、加入したことがないのは、男子学生に多い。

<学年別>

学年別(図7-3)では、1年生および2年生で学内の体育系、文化系サークルへの加入率が高い。学年進行に伴い加入者が減少している。このサークル加入状況からは、サークル活動を4年間継続するのが難しいことを示す。学年の進行とともに、専門性の高い学習が求められ、教室外の準備学習や復習の時間を要するためと推測される。なお、医学部医学科および歯学部の5年生、6年生で学内体育系サークルへの加入率が高くなっているが、医学科、歯学部の学生のみで学年別比較を試みた結果、学年進行

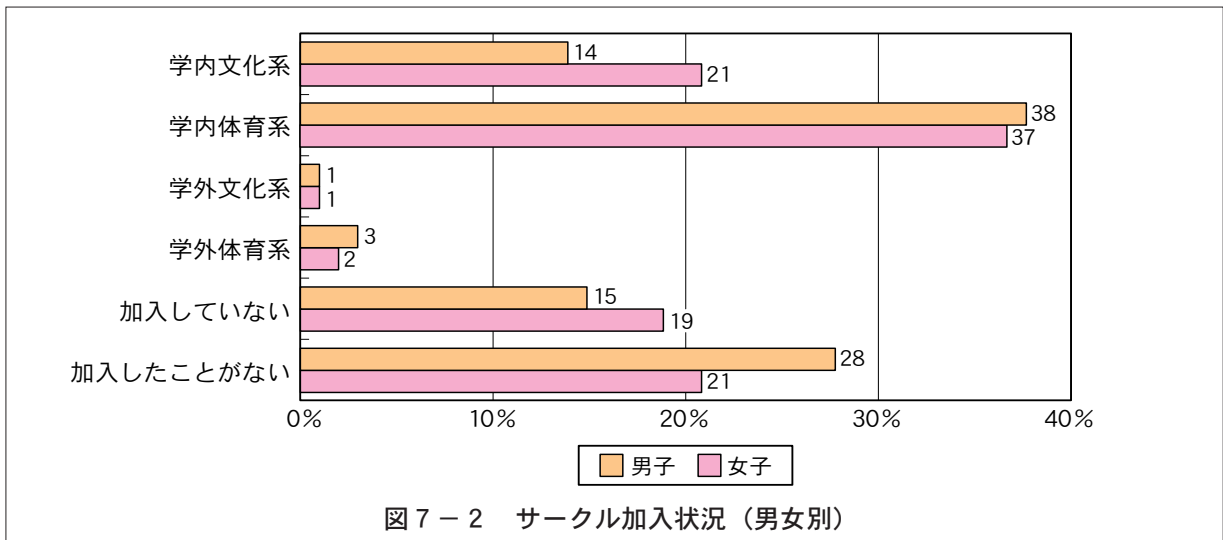


図 7-2 サークル加入状況 (男女別)

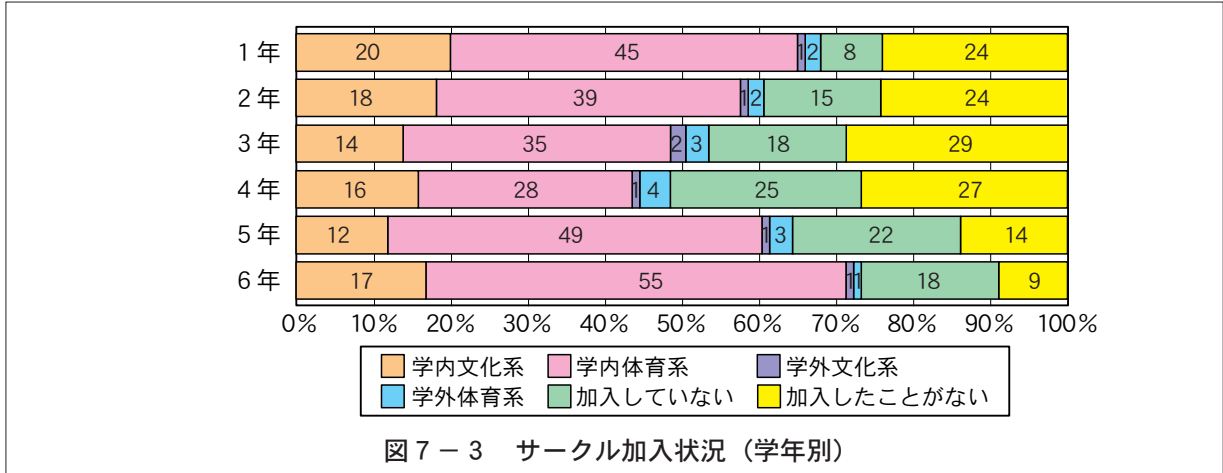


図 7-3 サークル加入状況 (学年別)

に応じて加入率が減少しており、他の学部と同様な傾向であった。

以上、学生の加入状況は前回に比較して増加の傾向がある。さらに加入率を高める方策が試みられるなら、多くの学生が文化・体育系課外活動の経験を通して、個性の熟成、社会性の発達を促される機会を得ることになる。今後の課題は、サークル情報提供システムの構築等学生自らの努力はもとより、各学部の学友会および団体連合等による更なる支援であると思われる。

7-2 活動状況 (図 7-4, 図 7-5)

サークル活動状況 (図 7-4) は、2,482 名のサークル入会者の回答を検討した。「まあまあ熱心に活動している」は 39% で、「かなり熱心に活動している」は 36% であり、75% の学生がサークル活動を積極的にすすめる、前回の 72% を 3 ポイント上回っている。「どちらとも言えない」が 12%、「あまり活動していない」が 6%、「殆ど活動していない」が 6% であるが、前回の 15% を 3 ポイント減少し、サークル活動への加入者の増加の状況と併せて、サークル活動に学生が積極的に活動する状況が伺える。なお男女別では、男子学生がやや活発に活動している傾向がある。

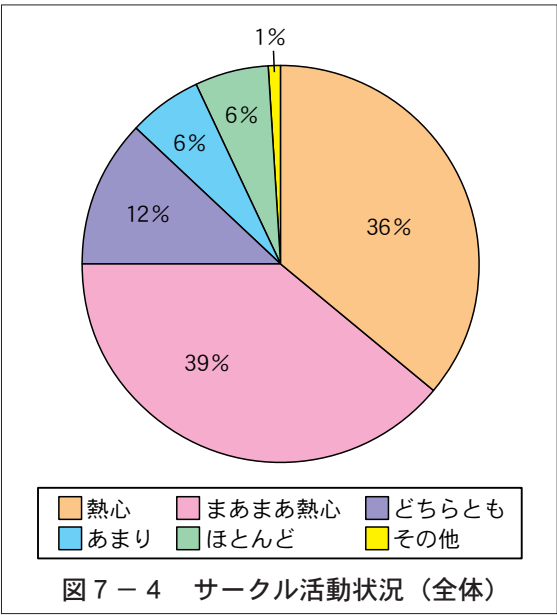
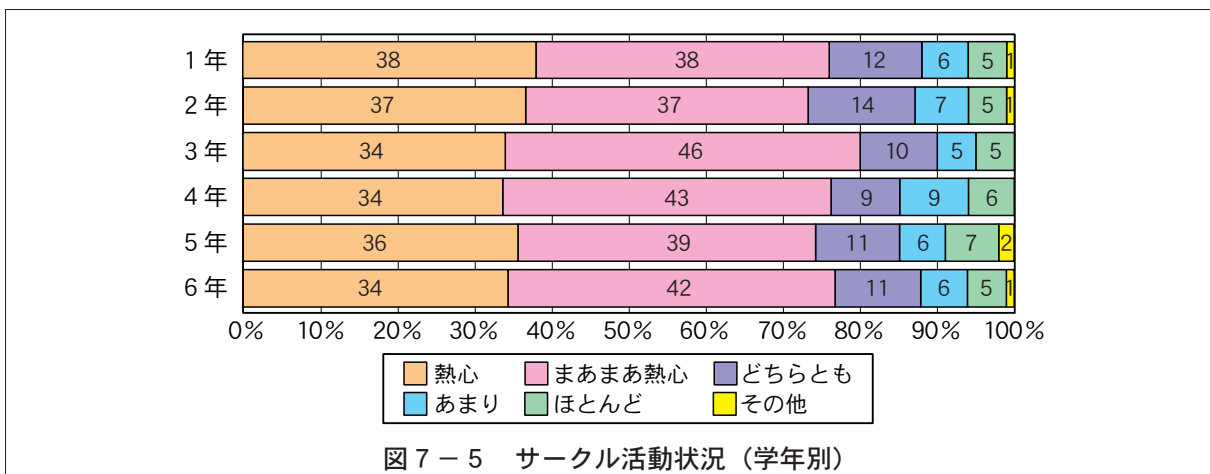


図 7-4 サークル活動状況 (全体)

<学年別>

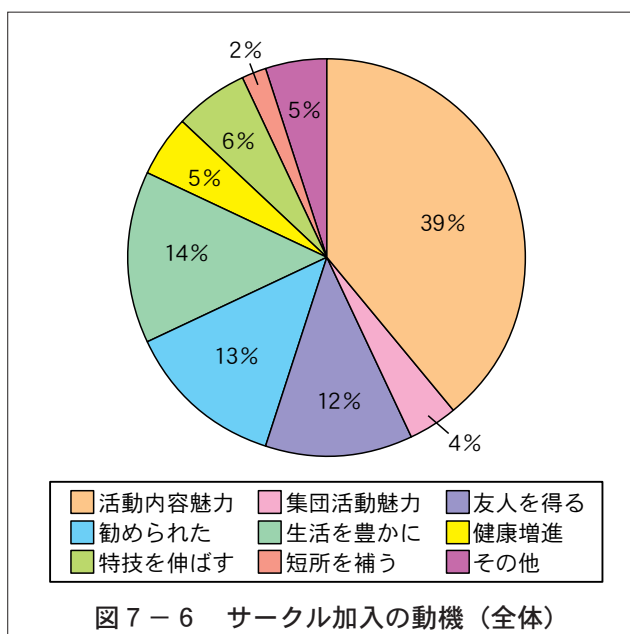
学年別（図7-5）では1年生，2年生が「かなり熱心」に活動し，学年が高くなるに従い「まあまあ熱心」に活動する学生が増加している。また，1年生，2年生では，「どちらとも言えない」学生が，3年生，4年生に比して多く，学年が進行するに伴い熱心になる傾向を示している。



以上は，学生が各自の個性と条件に適応したサークル又は団体に参加し，大学生を送っている状況である。今後とも，学生が自主的・自立的に行う文化的・体育的集団活動に積極的に参加し，4年間を通じてサークル活動を継続することで，広い知的視野を開発し，素晴らしい学生生活を送れるようにする環境づくりが，今後の課題であると思われる。

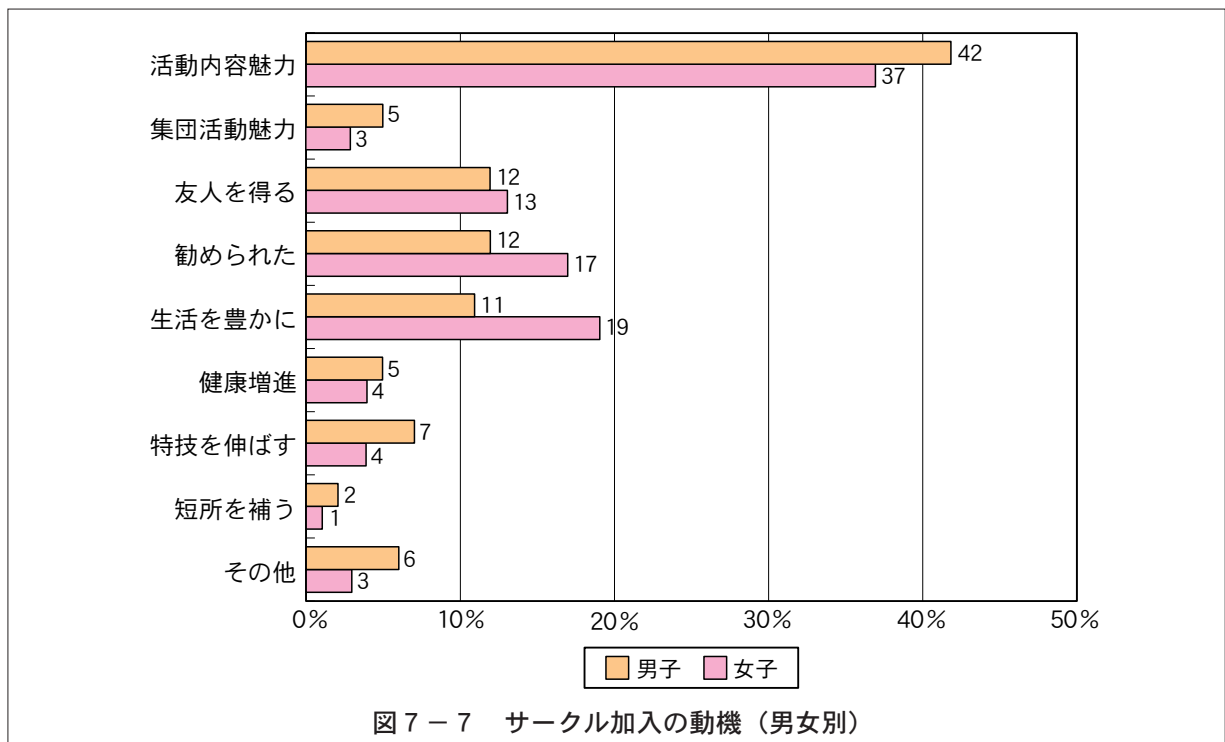
7-3 加入の動機 (図7-6, 図7-7)

サークルに参加している2,128名の加入動機（図7-6）は，「サークルの活動内容に魅力があったから」が39%で最も多く，次いで「学生生活を豊かにするため」14%，「先輩・友人に勧められたから」13%と続き，次いで「友人を得るため」12%，「自分の特技を伸ばすため」6%と続いている。「健康増進のため」は5%であり，「集団活動に魅力があったから」は4%となっている。



<男女別>

男女別（図7-7）にみたサークル加入動機は，「サークル活動内容に魅力があったから」は男女ともに最も多い動機であったが，次いで，女子学生の加入動機となっているのは「学生生活を豊かにするため」が19%，「先輩・友人に勧められたから」が17%，「友人を得るため」が13%である。男子学生では「友人を得るため」が12%，「先輩・友人に勧められたから」が12%と続いている。この3つの理由が男子学生では35%，女子学生では49%を占めているが，サークルへの加入の動機にも，男女の相違があることが分かる。

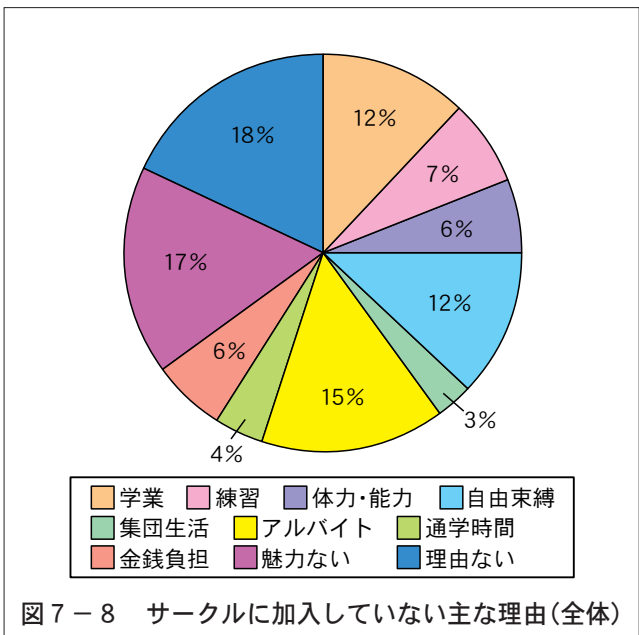


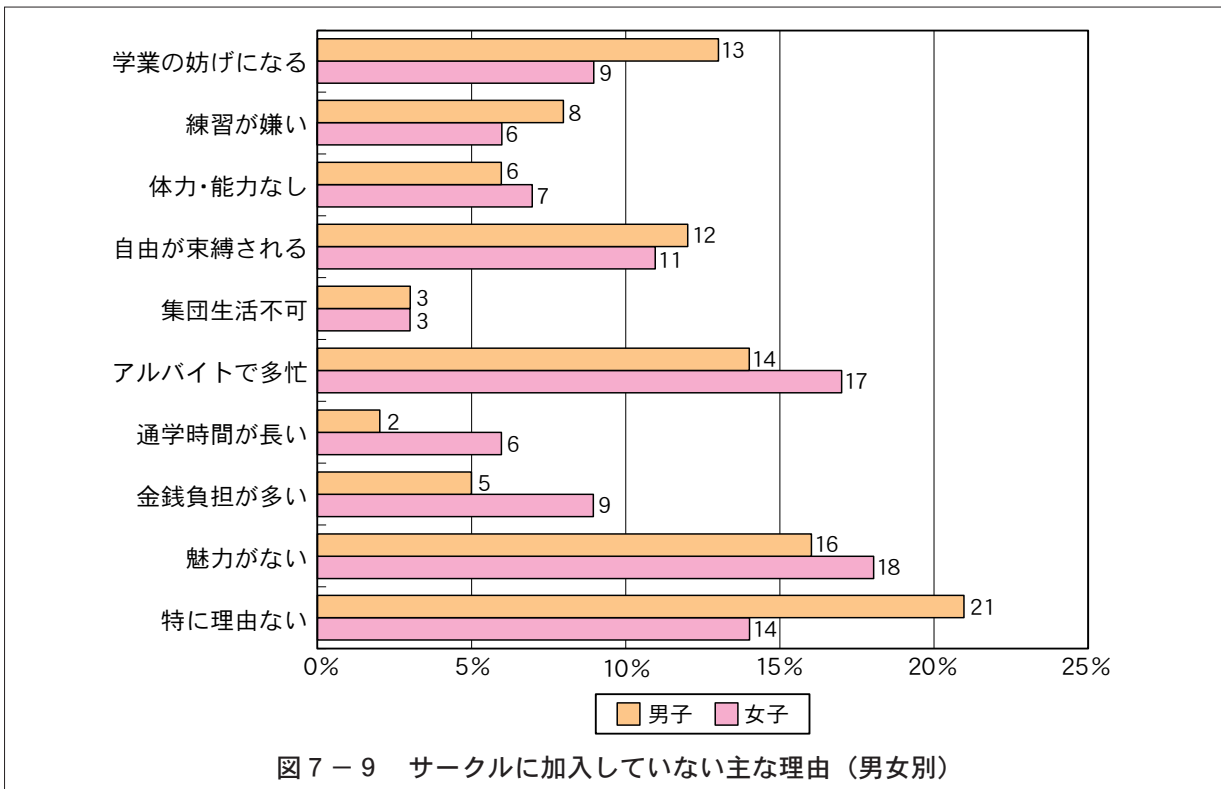
7-4 サークルに加入していない理由 (図7-8~図7-11)

サークルに加入していない1,550名の回答結果(図7-8)は、最も多いのが「特に理由がないが何となく」18%であり、「魅力的なサークルがない」17%、「アルバイトをしているので時間的余裕がない」15%、「個人の自由が束縛される恐れがある」12%、「学業の妨げになる」12%に続いている。最も少ない理由は「集団生活についていけない」3%であった。

<男女別>

加入しない理由を男女別(図7-9)で見ると、男子学生の主な理由は「特に理由はないが何となく」21%、「魅力的なサークルがない」16%、「アルバイトをしているので時間がない」14%であり、この3理由で51%を占めている。女子学生では、上位の3つの理由は同じであるが順位が異なっている。「魅力的なサークルがない」18%が最上位となり、「アルバイトをしているので時間がない」17%が続き、男子の最上位の理由である「特に理由はないが何となく」14%と続いている。男女で「サークルに加入していない理由」の順位が異なっているが、3つの加入しない理由の割合は、女子学生では49%を占めている。一方、「学業の妨げになる」は、女子学生の9%に対して、男子学生は13%を示し、男子学生が有意に高い割合を示している。





<学部間の比較>

学部別（図7-10）での理由の相違も認められた。学部毎の加入しない理由の比較では、「アルバイトをしているので時間的余裕がない」は、工学部夜間が34%で最も多く、工学部昼間では11%で最も

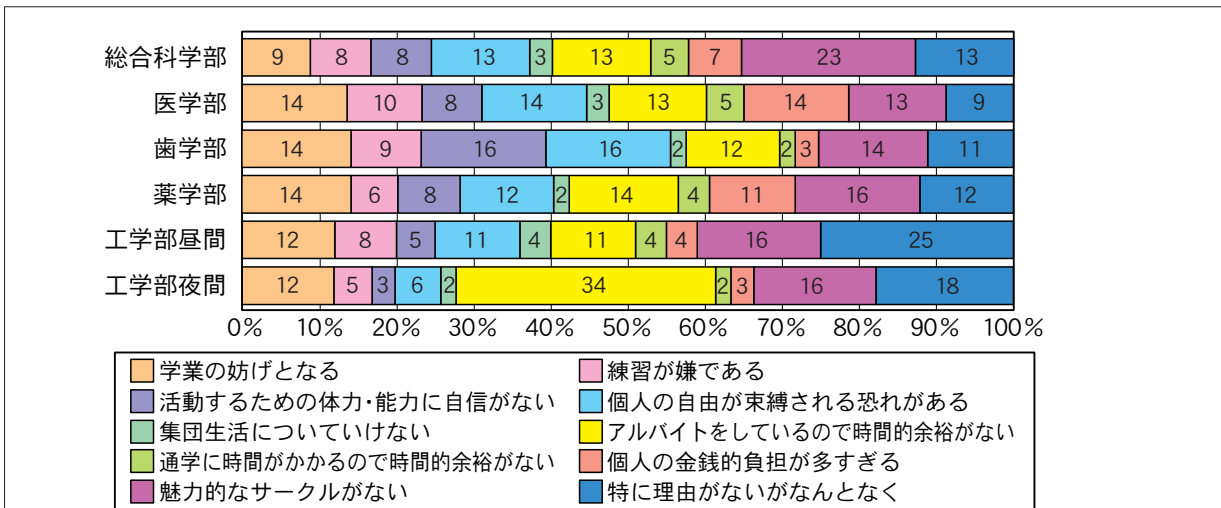


図7-10 サークルに加入していない主な理由（学部別）

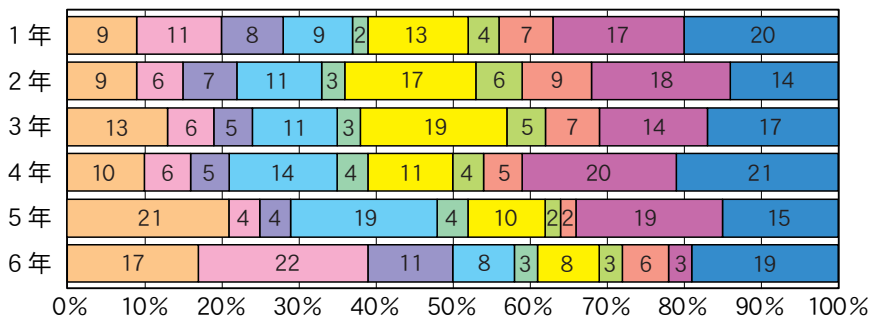


図7-11 サークルに加入していない主な理由（学年別）

少ない。「特に理由はないが何となく」は工学部昼間が25%で最も多く、医学部が9%で最も少ない。

「魅力的なサークルがない」は、総合科学部が23%と多く、医学部が13%と少ない。「活動するための体力・能力に自信がない」では、歯学部16%が多く、工学部夜間3%が最も少ない。「個人の自由が束縛される恐れがある」は歯学部が16%と最も多く、少ないのは工学部夜間の6%である。学部間でサークルに加入しない理由に相違があるが、授業形態や正課外授業の有無と併せて、課外活動への学部間での意識の差によるものと考えられる。「特に理由はないが何となく」の18%と「魅力的なサークルがない」の17%で1/3を占め、学生の関心や興味を深める工夫が今後の課題であると思われる。

<学年別>

学年別（図7-11）の理由では、「練習が嫌である」は6年生で22%，5年生で4%，3年生と4年生で6%と低くなっている。「学業の妨げとなる」は5年生で21%，1年生と2年生では9%である。

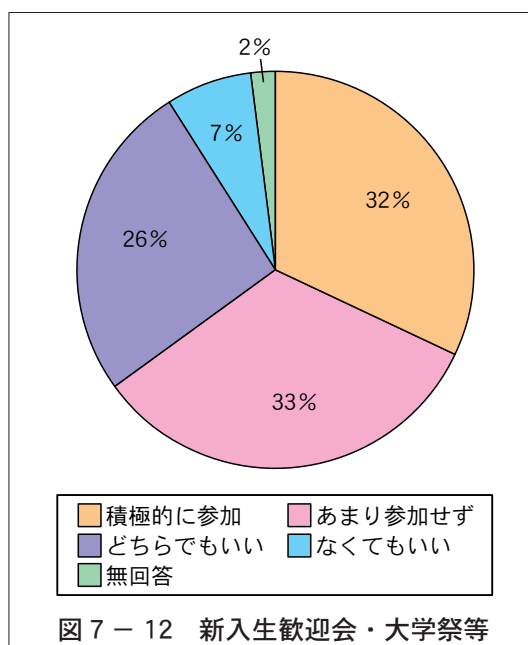
「個人の自由が束縛される」は5年生で19%，6年生で8%であり，1年生は9%である。各学年別で最も多いものは，1年生の「特に理由がないが何となく」20%，2年生の「魅力的なサークルがない」18%，3年生の「アルバイトをしているので時間的余裕がない」19%，4年生の「特に理由はないが何となく」21%，5年生の「学業の妨げとなる」21%，6年生の「練習が嫌である」22%となっている。1年生及び2年生がサークルに加入しない理由では，「特に理由がないが何となく」や「魅力的なサークルがない」が上位に挙げられている。入学時の新入生合宿研修時を利用して正課外活動で得られる豊かな大学生活づくりへの関心を高める企画を作成することや，より多くの学生が様々な活動を楽しめるように課外活動の幅を広げることなどの工夫と共に，課外活動を支える環境づくりが必要であると思われる。

7-5 学生行事（図7-12～図7-15）

新入生歓迎会や大学祭などの学生行事（図7-12）については，4,158名の学生が回答した。大学行事への参加意識は，2/3の65%に認められる。項目別に見ると，「必要だし積極的に参加している」は32%で前回の30%を2ポイント上回り，「必要だがあまり参加しない」は33%で8ポイント下回っている。「どちらでもいい」は26%で前回より2ポイント減少し，「なくてもいい」も7%で減少し，行事への参加意識は前回より高くなっていると言える。

<学部別>

学部別（図7-13）では，医学部で「必要だし積極的に参加している」が47%で最も高く，歯学部が34%と続いている。最も低いのは工学部夜間23%である。「必要だがあまり参加しない」は薬学部44%，次に総合科学部39%である。「どちらでもいい」は工学部夜間主で32%，工学部昼間29%，総合科学部25%，「なくてもいい」は，歯学部11%で学部の中で最も多く，学生行事への参加についての意識には学部間で相違があるが，60%以上は必要性を認めており，「あまり参加しない」学生をいかにして参加するように仕向けるか，そのために各学生団体に対してどのような支援ができるかを検討する必要がある。



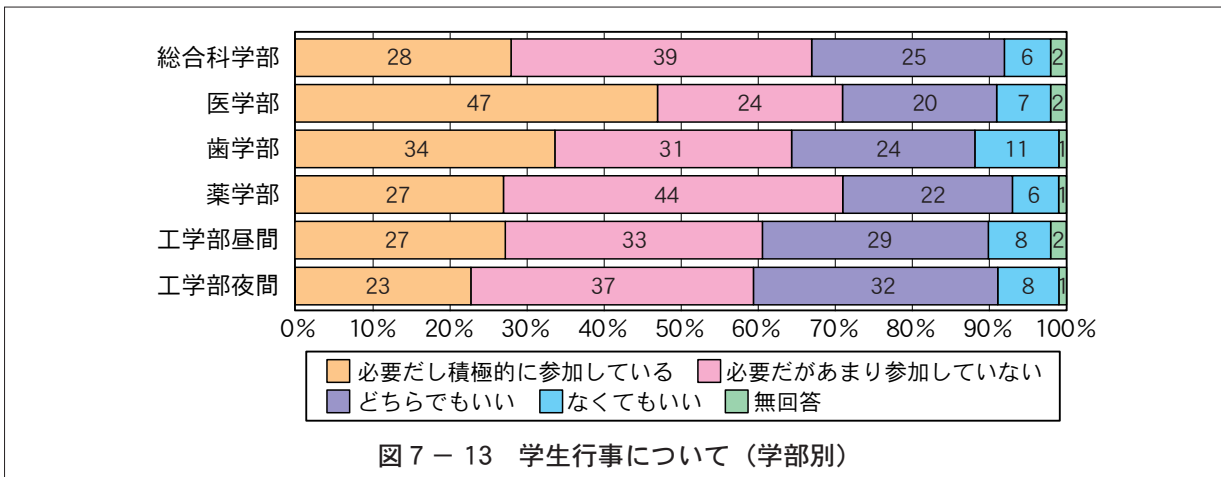


図 7-13 学生行事について (学部別)

<男女別>

男女別 (図 7-14) では、女子学生の方が行事への参加意識や参加行動が有意に高いことが認められた。

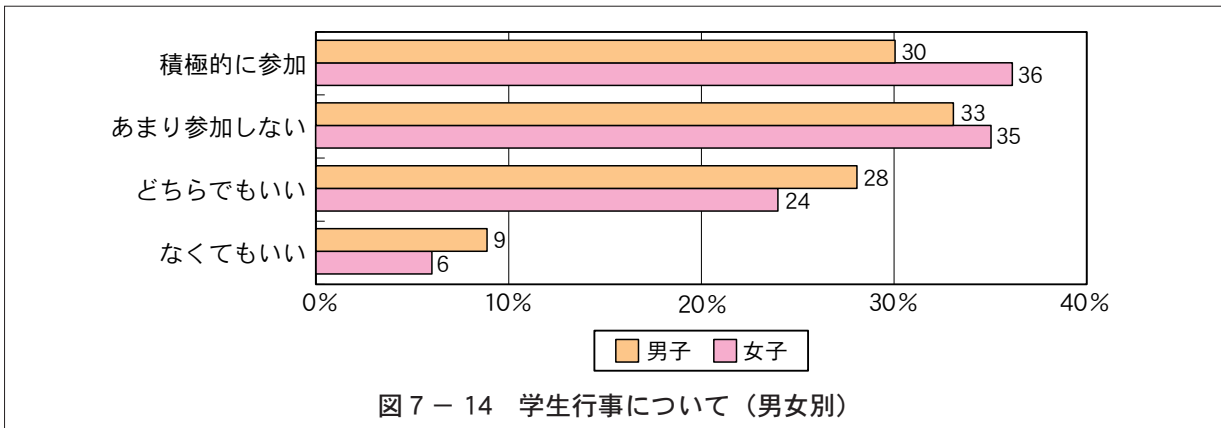


図 7-14 学生行事について (男女別)

<学年別>

学年別 (図 7-15) の参加と意識の状況は、1年生の「必要だし積極的に参加している」39%、次に

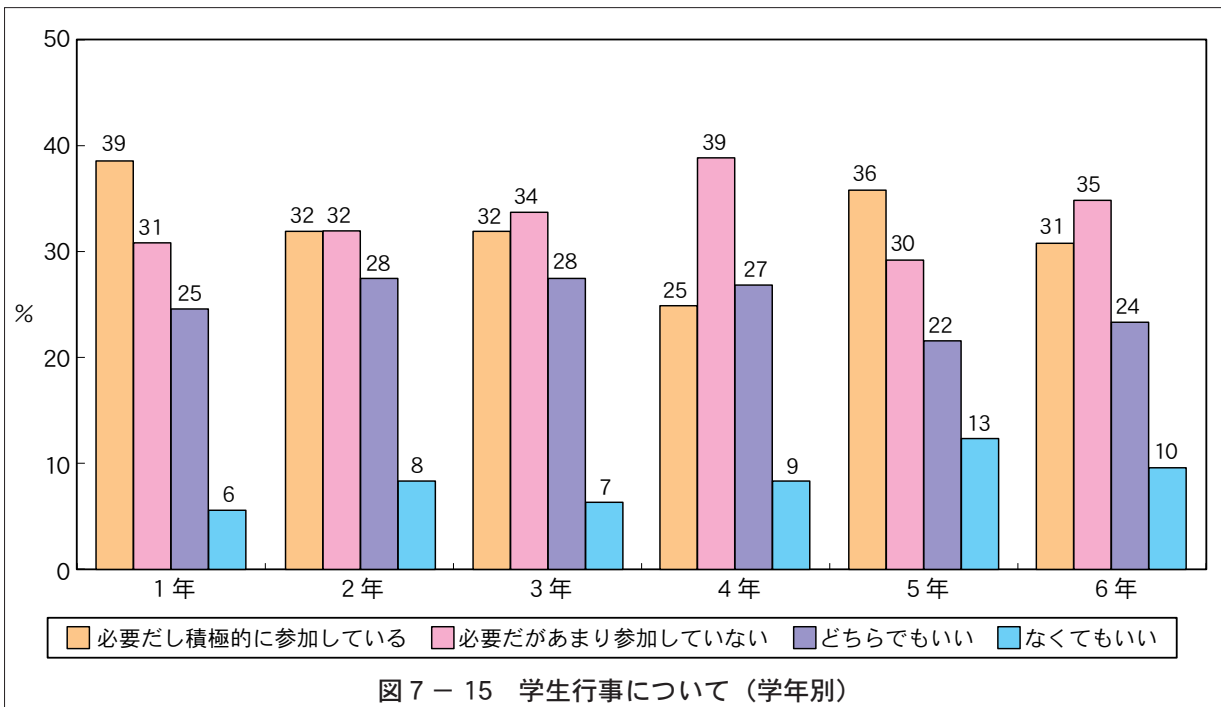


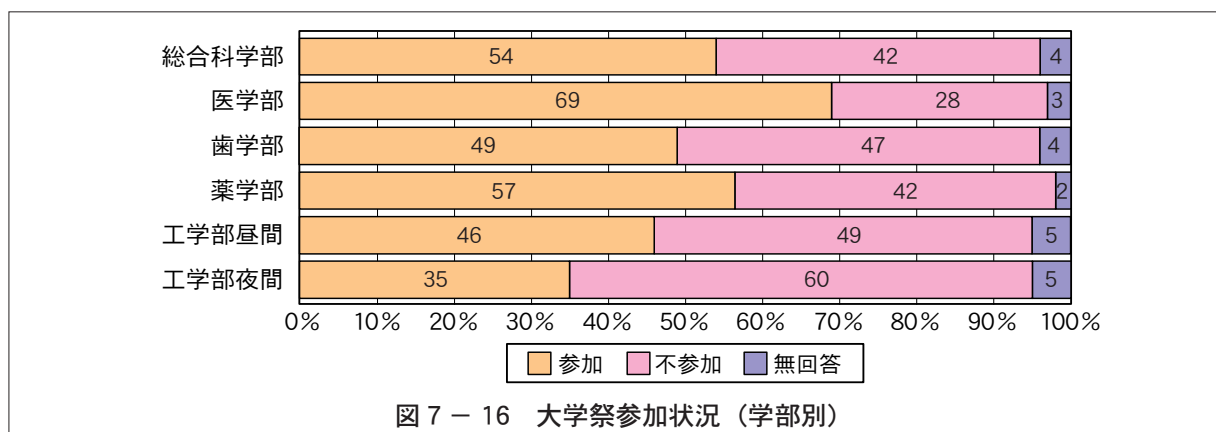
図 7-15 学生行事について (学年別)

5年生の36%と続き、4年生が最も少なく25%である。行事に積極的に参加し、意識も高い学年は、1年生と5年生である。4年生では意識が強いが行事への参加が少ない。学生行事には1/3の学生が参加し、「あまり参加していない」が調査毎に減少し、行事への参加率及び意識が高まっている傾向を示している。

新入生歓迎会や大学祭などの学生行事への参加は、学生が友人や教職員との関わりを深めることを通じて、人間形成の上で大きな役割を果たす機会になり得ると思われる。すべての学生の関心を高め、参加を促進していくために、教職員の学生行事への積極的な関わりと参入が求められていると考えられる。

7-6 大学祭への参加状況 (図7-16, 図7-17)

大学祭への参加(図7-16)は、学生の約半数の52%に達している。医学部69%、薬学部57%、総合科学部54%と過半数の学生が参加している。前回と比較し、全体では参加者は2ポイント増加し、工学部夜間も2ポイント増加した。

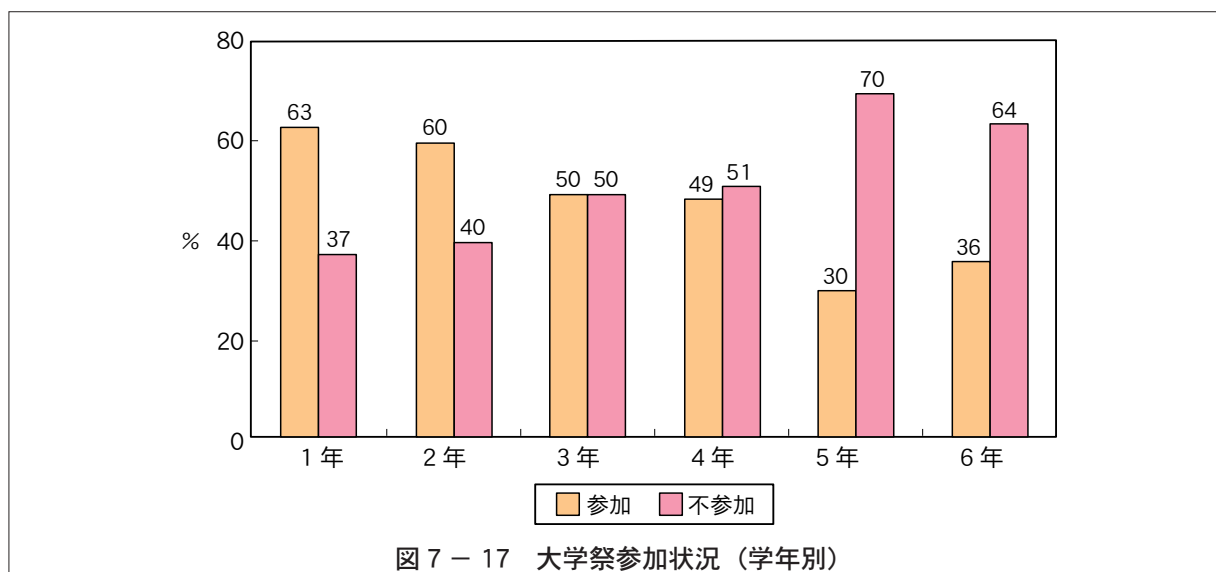


<男女別>

男女別の大学祭への参加率は、女子学生59%、男子学生51%で女子学生の参加が多い。

<学年別>

学年別(図7-17)では、1年生63%、2年生60%、3年生50%と学年進行に伴い、参加率は減少しているが、前回調査に比して、概ね積極的な参加傾向を示している。



大学祭は学生の自主的・主体的な活動であり、学生の多面的な能力を開発する機会でもあり、様々な交流の機会でもある。本年の大学祭の企画は、学生時代の楽しい思い出づくりに終始するだけでなく、その意義と役割を重視して企画されている。このような大学祭に、多くの学生の積極的な参加が実現できるように、教職員も大学祭等への意識を見直すことが求められていると言えよう。

7-7 ボランティア活動 (図7-18～図7-20)

＜大学入学後のボランティア活動＞

ボランティア活動 (図7-18) を「個人でしたことがある」学生は全体で11%、「団体(組織)に入っていたことがある」学生は11%であり、合わせて22%の学生が大学入学後にボランティア活動を行っている。

＜男女別＞

男女別 (図7-19) では男子学生の19%、女子学生の28%が活動を経験している。個人でのボランティア経験者は男子学生9%、女子学生15%であり、団体(組織)に入っている経験者は、男子学生10%、女子学生13%であり、経験者はいずれも女子学生に多い。

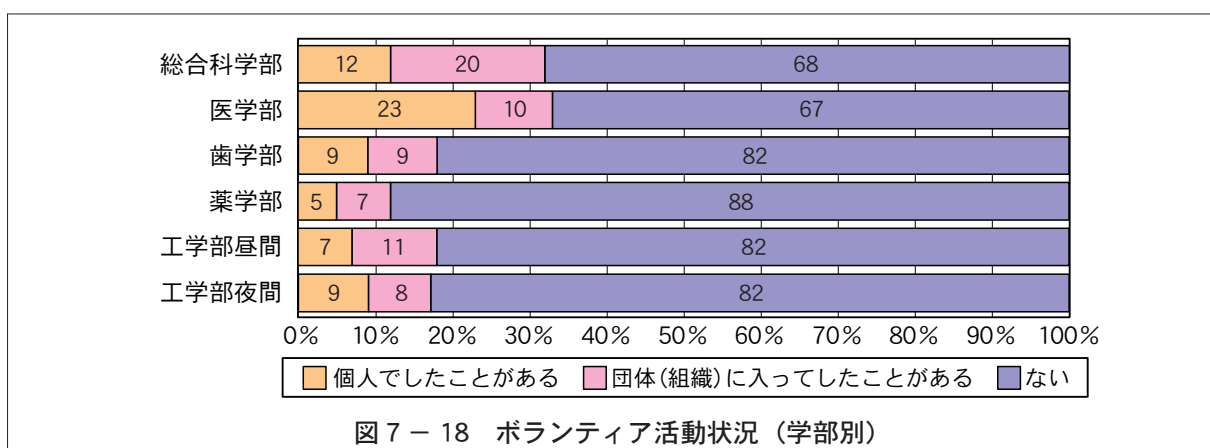


図7-18 ボランティア活動状況 (学部別)

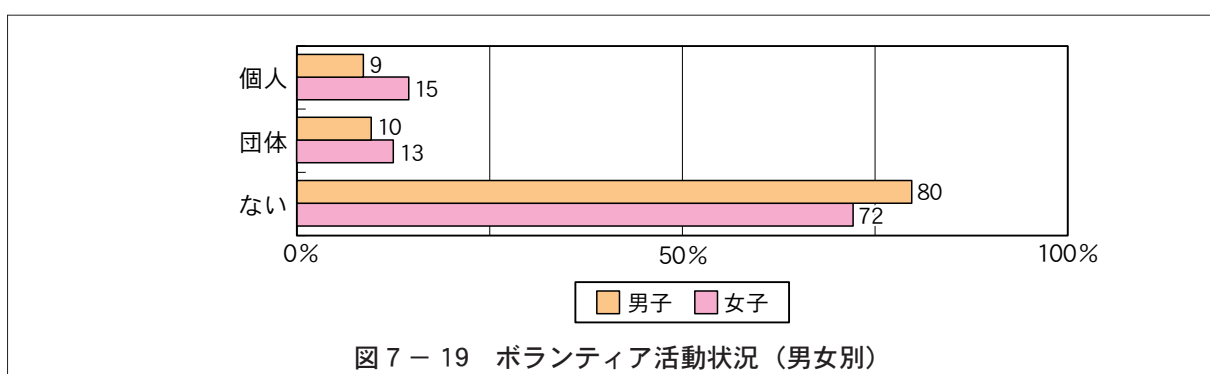


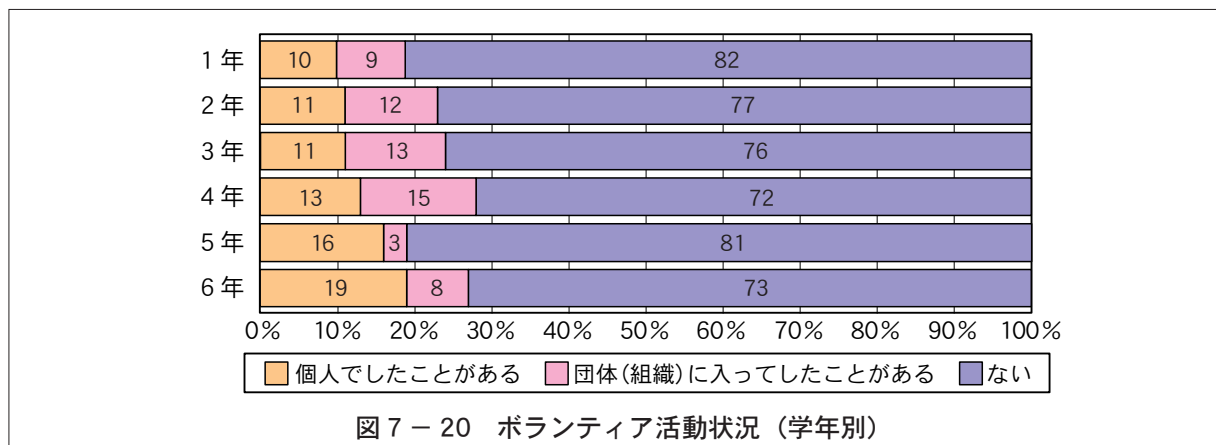
図7-19 ボランティア活動状況 (男女別)

＜学年別＞

学年別 (図7-20) のボランティア経験では、「個人でしたことがある」学生は、学年進行とともに多くなっている。また、「団体(組織)に入っていたことがある」では、1年生から4年生までは、学年進行に順じて多くなるが、5年生及び6年生では減少している。

以上から分かるように、ボランティア活動の経験者は極めて少ない。ボランティア活動は、学生の多様な体験活動として、地域社会に貢献する活動であり、今後の拡充が期待されるものである。ボランティア活動の推進を目指し、学生ボランティアセンター等を開設し、ボランティア情報やボランティア

相談等に応じることも一案であると考えられる。



7-8 学生の修学状況と課外活動

予習復習時間及び授業の出席率並びに単位の取得状況と課外活動との関係を検討した。

予習復習時間の多少は、課外活動への加入率、活動状況及び学生行事への参加率に影響していないようである。しかし、有意の差は認められなかったものの、5時間以上予習している学生の大学祭への参加率が高かった。また、単位取得状況の良い学生は、学生行事の参加率も良い傾向を示している。

一方、出席率は、学生行事等への参加に影響していない。しかし、全く出席していない学生では、「必要だがあまり参加していない」が54%で、すべて出席している学生に比して、約20ポイント高い値を示している。授業に全く出席していない学生の欠席理由が「勉強意欲がわからない」ということであったことから、これは意欲の低下が学生生活のすべてに影響していると推察できる結果である。すべての学生がもっているはずのモチベーションを活かす場の一つとして、課外活動の充実を教員が真摯に受け止め、積極的に支援することも一つの方策であると考えられる。

課外活動は、大学生生活の様々な活動のうち、学術・文化・スポーツ面における実践的な体験を、自主的、主体的に積み重ねる場の一つである。本調査では、前回に比して、課外活動への学生の参加が増し、活動内容についても概ね積極的である様子を推察することができた。本調査結果を通しての今後の課題は、本学の課外活動の目標を達成するために、すべての学生が学業とのバランスを考慮しつつ、課外活動に参加できる環境づくりを進めることであると思われる。

長い学生生活の中での課外活動の経験は、広い知的視野を開発し、豊かな人間性を培う上で必要不可欠のものである。学生が自らの能力を多いに発揮する意味からも、現在の学生後援会による学生表彰の奨励に加えて、課外活動情報システムの構築や課外活動に使用できる施設の利用の拡充及び課外活動奨励賞を設けることなどが必要である。また、サークル間の連携を深め、全学の応援団なども結成し、相互に支えあう様々な工夫を凝らし、殆どの学生がサークルに所属し、活動を楽しみつつ、学業に励むことができるような大学環境を、学生のニーズを中心に築くことが求められている。

第8章 就職について

8-1 希望する職種 (図8-1)

図8-1から、学生の希望する職種(複数回答可)は学部の特徴を反映していることが分かる。大学全体での希望職種の多い順番は、「技術職」(23%)、「専門職(医師等(以後「専門職」))」(22%)、「大学・官公庁の教育・研究職以外の公務員(以後「公務員」)」(14%)、「企業等の研究職」(11%)、「大学・官公庁の教育・研究職」(9%)、「事務職」(5%)、「教育職」(4%)、「マスコミ関係」(3%)である。

学部別の主な希望職種は、総合科学部では「公務員」(20%)、「事務職」(16%)、「教育職」(13%)、「大学・官公庁の教育・研究職」及び「技術職」(8%)であり、医学部では「専門職」(63%)、「公務員」(10%)、「大学・官公庁の教育・研究職」及び「技術職」(6%)、「企業等の研究職」(5%)となっている。歯学部では「専門職」(75%)、「大学・官公庁の教育・研究職」(6%)、「公務員」及び「技術職」(5%)である。薬学部では「専門職」(45%)、「企業等の研究職」(21%)、「大学・官公庁の教育・研究職」(13%)、「公務員」(10%)、「技術職」(7%)となっている。工学部昼間では「技術職」(39%)、「企業等の研究職」(16%)、「公務員」(14%)、「大学・官公庁の教育・研究職」(9%)、「事務職」(4%)であり、工学部夜間では「技術職」(38%)、「公務員」(15%)、「企業等の研究職」(11%)、「大学・官公庁の教育・研究職」(10%)、「教育職」(6%)となっている。

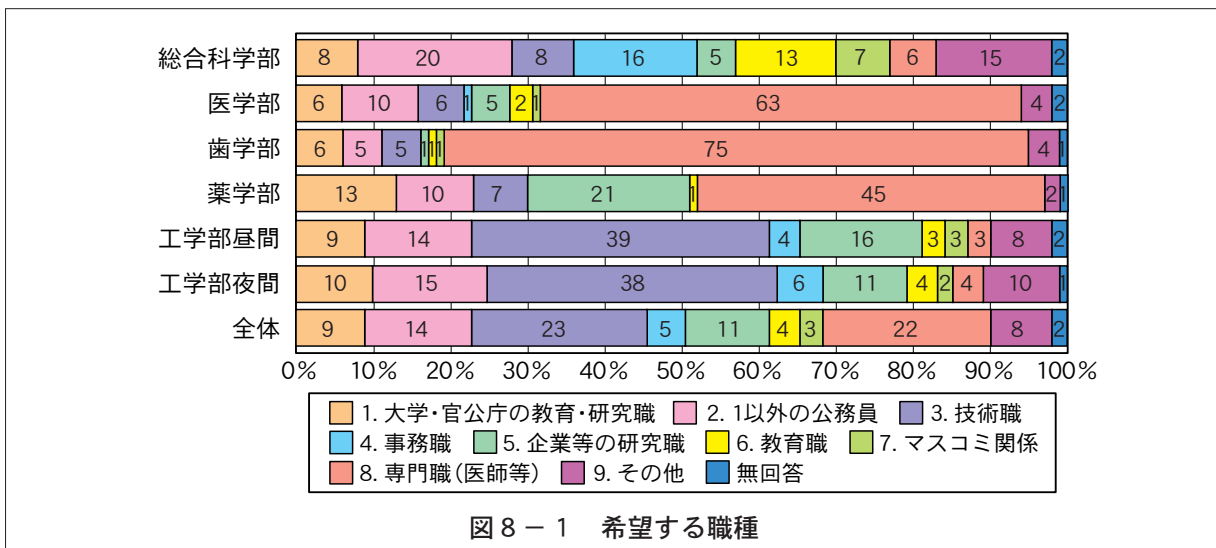
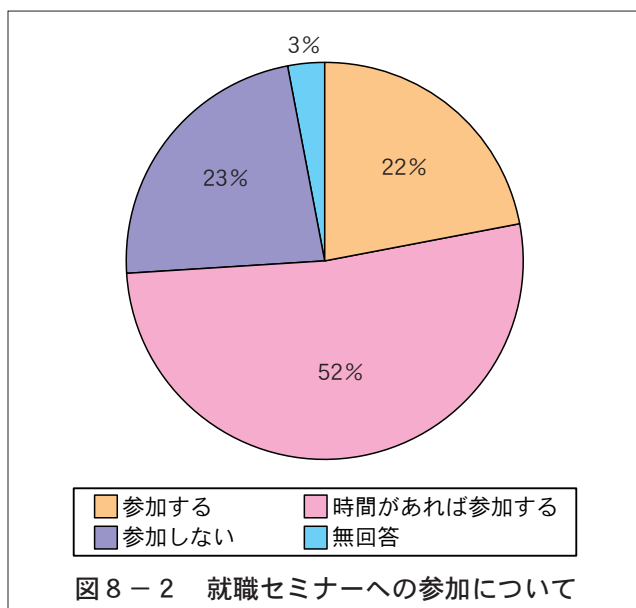


図8-1 希望する職種

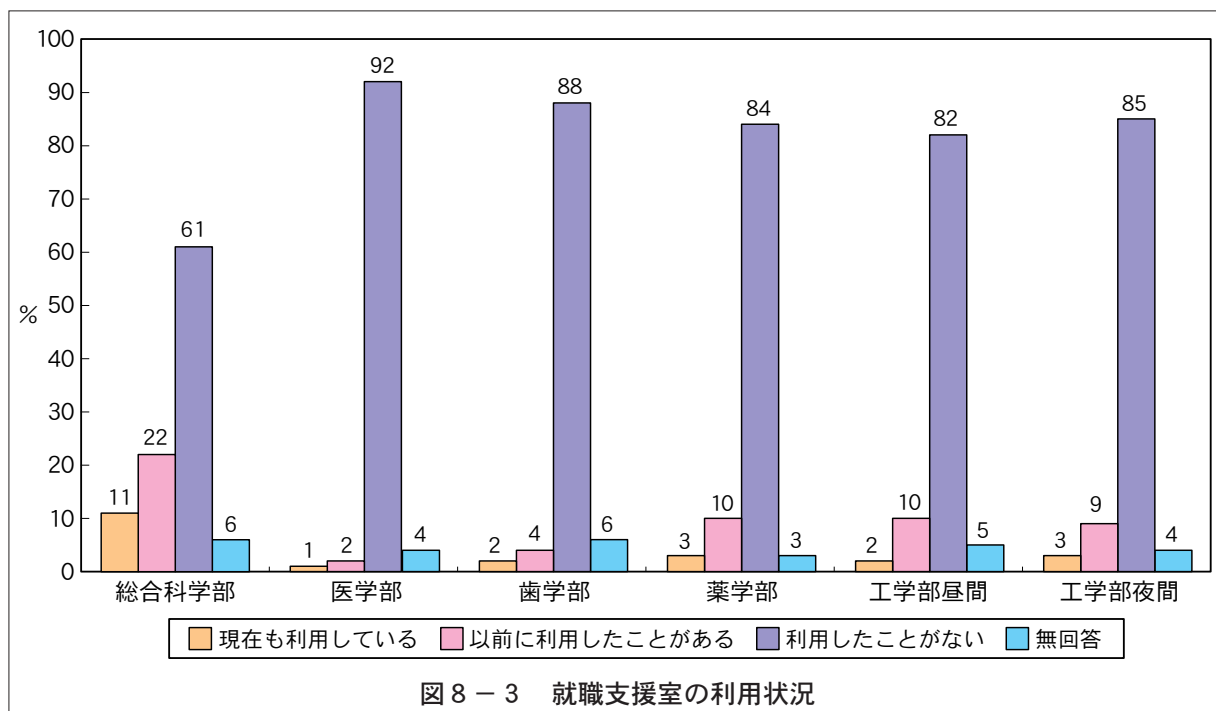
8-2 就職セミナーへの参加について (図8-2)

図8-2をみると、大学が行う就職セミナーについて、大学全体では「参加する」が22%(前回22%)、「時間があれば参加する」が52%(前回52%)、「参加しない」が23%(前回23%)である。前回と比べてほぼ同様の傾向になっている。「参加する」と「時間があれば参加する」を合わせた割合が前回同様70%を越えている。一層の周知、啓発が望まれると共に、各学科のニーズに対応したプログラムを工夫する必要がある。



8 - 3 就職支援室の利用状況 (図 8 - 3)

図 8 - 3 から就職支援室の利用状況を見ると、就職支援室を「利用したことがない」学生の割合が際立っているが、これは、各学部の全学年を対象にしているためであり、就職活動が集中的に行なわれる最終学年についてみれば、総合科学部、医学部、歯学部、薬学部、工学部昼間、工学部夜間への順に 28%、81%、74%、55%、62%、55%となっている。全学年において、就職支援室の利用が高まるような工夫や企画が必要である。「以前に利用したことがある」は、総合科学部で 22%、薬学部と工学部昼間で 10%、工学部夜間で 9%、歯学部で 4%、医学部で 2% の順である。「現在も利用している」は、総合科学部で 11%、薬学部と工学部夜間で 3%、歯学部と工学部昼間で 2%、医学部で 1% の順である。利用の割合に各学部の事情が伺える。



8-4 就職情報の入手方法 (図8-4)

図8-4は学部卒業予定の就職希望学生に対して、複数回答可として就職情報の入手方法を尋ねたものである。就職に際しての会社等の情報の入手の仕方が多岐にわたっており、また学部によって異なる傾向があることがわかる。

大学全体では、「インターネットの利用」が34%、「新聞・就職情報誌」が12%、「就職支援室の情報・就職の手引き（以後、「就職支援室）」が11%、「会社等説明会」が10%、「先輩・知人」が9%、「就職担当教員」が8%、「親・親戚」が5%、「直接会社等に照会」が4%、「ダイレクトメール」が3%の順である。

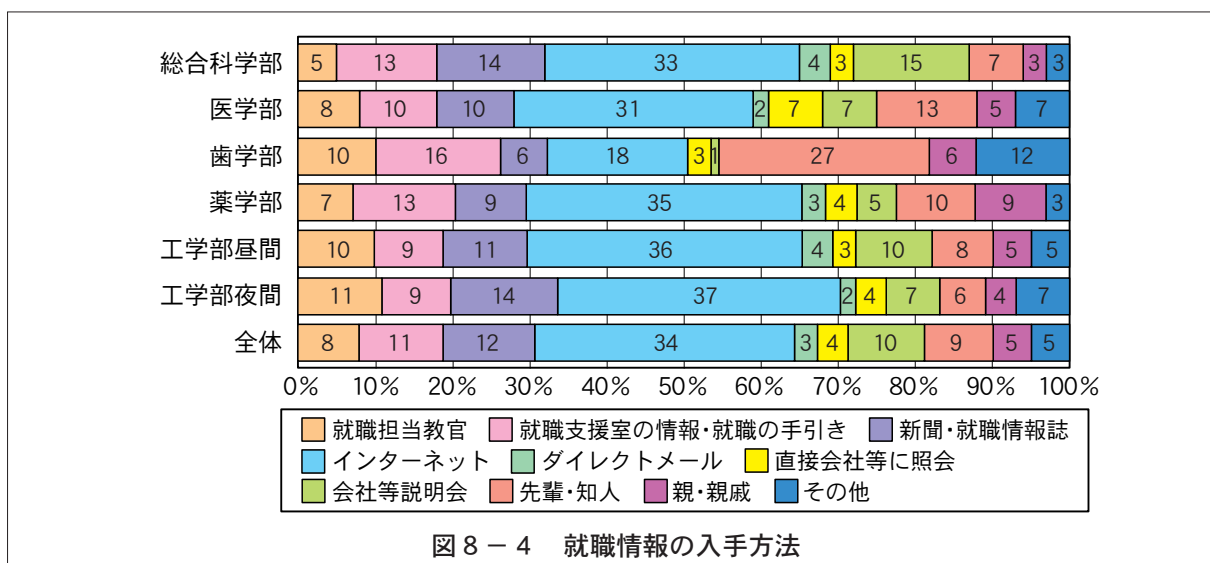


図8-4 就職情報の入手方法

学部別の就職情報入手元は、総合科学部では、「インターネット」(33%)、「会社等説明会」(15%)、「新聞・就職情報誌」(14%)、「就職支援室」(13%)、「先輩・知人」(7%)となっている。医学部では、「インターネット」(31%)、「先輩・知人」(13%)、「会社等の説明会」及び「直接会社等に照会」(7%)である。歯学部では「先輩・知人」(27%)、「インターネット」(18%)、「就職支援室」(16%)、「就職担当教員」(10%)、「新聞・就職情報誌」及び「親・親戚」(6%)、「直接会社等に照会」(3%)である。薬学部では「インターネット」(35%)、「就職支援室」(13%)、「先輩・知人」(10%)、「新聞・就職情報誌」及び「親・親戚」(9%)、「就職担当教員」(7%)、「会社等説明会」(5%)、「直接会社等に照会」(4%)となっている。工学部昼間では「インターネット」(36%)、「新聞・就職情報誌」(11%)、「就職担当教員」及び「会社等説明会」(10%)、「就職支援室」(9%)、「先輩・知人」(8%)であり、工学部夜間では「インターネット」(37%)、「新聞・就職情報誌」(14%)、「就職担当教員」(11%)、「就職支援室」(9%)、「会社等説明会」(7%)となっている。

第9章 学部の現状と課題

9-1 総合科学部

「経済状況」について、他学部と比べて自宅通学の割合（40%）が高い総合科学部の学生の家庭の年間所得は、大学全体の平均にほぼ等しい。1ヶ月の平均収入額は、5万円未満が48%と工学部と同じであり、その他の学部と比べると高い。アルバイトの従事時間数は、5時間から20時間未満を合すると61%にもなる。アルバイトにかなりの時間を充てていることがわかる。

「修学・進路状況」では、「国立大学だから」、「地元の大学だから」がそれぞれ、31%、18%で他学部より高い比率になっている。所属学部満足度では「不満足である」、「やや不満足である」を合せて21%と、他学部より高くなっている。そして授業の満足度は「満足している」と「やや満足している」を合すると47%となり、全学中最高である。また授業に満足できない理由として「授業内容がつまらない」という答えが41%ある。学生の多様性から、授業内容を易しくすればつまらなくなるという批判が出ることへの対応策が求められよう。

「学生の健康状態」としては、「気になる症状がある」が45%と全学中最高である。主な悩みや不安の理由では、他学部と比べて「就職や進路」と「生きがいや目標」に関するものが多い。これは実学的な研究や進路に直接結びつく勉強に関わらない分野が多いという学部の性格にもよると思われる。学生生活の意義では、「勉強や研究」の比率が25%と学部全体の28%に比べて低い。そして「重点もなくほどほどに」が20%と学部全体の17%に比べて高い。また「豊かな人間関係を結ぶこと」が16%と学部全体の14%に比べて高い。これも学部の性格によるのであろう。

「迷惑行為」の内容では、「いたずら電話」と「ストーカーにあった」者の合計が男子学生が46%、女子学生が63%と高い。また犯罪被害を20%弱の学生が受けており、その中で盗難がもっとも多い。予防策と対応策の周知徹底と、学生相談・指導の一層の充実が望まれる。

「教職員との交流」では、「教員との会話・質問」で、「7回以上したことがある」が45%あり、全学中最高である。これは教員と学生との関係が密であることを示しており、良い傾向であると言える。

「親しい教職員がいる」が44%あり、歯学部の45%に次いで高い。

「大学事務室の対応」への満足度では、「満足している」が6%と、栄養学科の5%とともに低いのが気になるところである。「不満足である」と「やや不満足である」を合すると46%になり、全学中最高となる。これには、対策が必要であろう。

「課外活動」に関して、学生の主体性を高める一つの方法としてサークル活動が考えられるが、サークルへの加入状況では、他学部と比べて文化系サークルへの加入者が多く、体育系サークルへの加入者が少ない。そして「加入していない」、「加入したことがない」を合すると42%である。またサークルに加入していない主な理由としては、「魅力的なサークルがない」が23%あり、他学部と比べて高い比率になっている。学生の多様性に対応したサークルの魅力度を高める工夫が質、量の両面で求められていよう。

「大学入学後のボランティア活動」について「個人でしたことがある」、「団体・組織に入っていたことがある」を合せて32%で医学部33%と共に高い。これは総合科学部でアドプト吉野川の取り組みをしていることも影響していると思われるが、「したことがない」学生が未だ68%いることから、学部として一層の取り組みを進めることが求められよう。また、学生行事では、「必要だがあまり参加していない」が39%と薬学部の44%に次いで高く、必要性を感じてはいるが、積極的に参加していないことがわかる。大学祭への参加状況では、「不参加」が42%で、1、2年生の不参加が相対的に高い。一層魅力的な大学

祭になるように、教員と連携したプログラム等の工夫をすることも必要であろう。

「就職」に関しては、他学部と比べて特定の職種に偏らず、多様な職種を希望しているのが特徴である。これは学部の性格と関連していると思われる。その中で比較的多いのが、教育・研究職以外の公務員の20%、事務職の16%及び教育職の13%である。ニーズに対応した教育指導の充実が求められよう。就職支援室の利用状況に関しては、「現在も利用している」と「以前にも利用している」を合わせると33%となり、全学中で最も高い。しかし「利用したことがない」が61%であるものの、就職活動が集中的に行なわれる最終学年についてみると28%である。これは他学部と比べて低い比率ではあるが、学生相談室とともに一層の利・活用がなされるよう啓発・指導することが望まれる。

9-2 医学部

医学部には医学科、栄養学科、保健学科の3つの学科があり、それぞれにやや性格が異なるので、これも含めて解析してみる。

「経済的な状況」について、全体として見た時の医学部の学生は、比較的家庭が裕福（年収1,000万以上が23%）で、その月額収入、支出とも全学の平均に比べてやや多い傾向がある。その一方で、年収500万円未満の学生が全体で23%あり、医学科でも17%あることを見過ごしてはならない。このことは、学生が感じる経済状態において「大変苦しい」が医学科9%、栄養学科8%、保健学科11%などや、授業料免除状況調べにおける申請者の比率7.4%に現れている。

アルバイトをしている学生の割合は医学科55%、栄養学科68%、保健学科64%と学科間で差があるが、その目的が「生活費や学費のため」は3学科ともほぼ20%である。アルバイトの従事日数では、1週間に4日から5日の学生が医学科10%、栄養学科25%、保健学科18%、1週間当たりの従事時間数でも、20時間以上の学生が、医学科2%、栄養学科12%、保健学科7%となっている。アルバイトが学業に影響していないか、気掛りである。

「健康状態」では、精神状態が「充実している」のは医学科36%、栄養学科32%、保健学科28%。一方、「常に気になる症状がある」という回答が約7%あり、これには学科間でほとんど差がない。問題になるのは「やる気が出ない」で約16%もあり、学科間にも学年間にもあまり差がない。

「学生生活」については、3学科とも、大学生活の意義を、「勉学や研究」、「豊かな人間関係を結ぶこと」、「サークル活動」などにおいており比較的健全である。所属学科への満足度は「満足 まあまあ満足」が、医学科80%、栄養学科58%、保健学科51%。逆に「やや不満足 不満足」は医学科6%、栄養学科18%、保健学科20%である。しかし、全学科とも授業への出席率は「全部 ほとんど出席」が80%以上あり、単位の取得状況も「全部 ほとんど取得」が約95%と良好である。

気掛りな点をあげるとすれば、試験におけるカンニング経験者の割合で、医学部学生の26%は、歯学部の28%、工学部昼間の25%と並んで高い数字である。これを学科別に見ると、医学科と保健学科で28%と高く、栄養学科では15%で低い。男女別では、医学科男子32%、同女子22%、栄養学科男子14%、同女子15%、保健学科男子40%、同女子22%で、概して男子で高い。学生への指導を強化すると同時に、試験に際しての監督態勢の見直しが必要である。

「課外活動」では、サークル活動に熱心で、特に学内の体育会系のサークルに多数の学生が加入している（医学科60%、栄養学科48%、保健学科47%）。逆に、サークルに加入したことがないのは医学科で10%と低く、保健学科の19%が高い（栄養学科13%）。

大学祭へは約70%（医学科69%、栄養学科72%、保健学科67%）の学生が参加しており、これは全学平均の52%に比して際立って高い。また、新入生歓迎会などの学生行事への参加も多いし、関心も高い。ボランティア活動の経験（33%）も総合科学部（32%）と並んで多い。医学部の学生は決してがり

勉ではないことがうかがえる。

「勉学」および「課外活動」を通しての課題をあげるとすれば、勉学への意欲が出ない、サークルへも、大学の行事にも参加しないでいる学生への対応であろう。一人ひとり事情が異なると考えられ、きめ細かい調査と指導が求められよう。

学生が受けた迷惑行為については第5章で詳しく解析されているのでここでは省略する。盗難や迷惑電話、ストーカーなどについては対処方法をよく指導しておく必要があるだろう。セクハラ、アカハラについては、医学部で特に多いわけではないが、皆無というわけでもない。学生が相談しやすい環境整備をさらに進めるだけでなく、教員に対する継続的な注意喚起が求められるだろう。

「就職」では、希望職種が学科間でかなり異なる。医学科では専門職が82%と圧倒的で、教育・研究職は3%に過ぎない。栄養学科では専門職が34%で、大学・官公庁・企業などの研究職が33%と続く。保健学科では専門職が63%、ついで公務員が13%である。全体的に大学が行う就職セミナーへの参加に消極的であるのは就職に対する不安があまりないからであろう。

以上を要するに、医学部の学生は全体として健康的な学生生活を送っており、医学部に固有の大きな課題はないと言える。

9-3 歯学部

歯学部は1学部1学科の小さな学部で、1学年1クラス、1クラス55名（内5名は3年次編入）、6学年の学生定員は320名である。しかし、附属病院を抱える関係もあって、教員数は140名と多く、1学生あたりの教員数は全学部中でも高い。また、殆どの講義・実習が必修であり、卒業後の職業選択も歯科医師とほぼ限られており、教員も大半が歯科医師である。その意味では、学生の教育・指導はやり易く、連絡も行き届き、必然的に教員と学生間の交流の濃度も濃くなる。学生生活実態調査での回答率の高さは、まさにこのことを反映している。しかし反面、この濃度の濃さが学生に縛りをかけることになり、様々な弊害を生んでいることも否めない。今後、この濃度の濃さを維持しつつ、その弊害をいかに取り除くかが歯学部の課題である。

歯学部生のイメージとして以下のことが、今回の実態調査から浮かび上がってくる。

「経済状況」では、比較的裕福な家庭の子女が多くて、マンションに住む比率が高く、学生の1ヵ月の平均収入、支出ともに高い。アルバイトへの従事日数や時間、アルバイト収入などは少ない。

「健康状態」では、生活的に恵まれており、将来の目標も明確であることから、健康的に気になる症状は少なく、勉学についての悩みも少ない。精神的にも充実している学生が、他学部と比べて一段と多く、しかも、それが初年次から維持されている。しかし、反面、家庭の年間所得が500万円未満の学生が18%いて、同じくらいの学生が経済的に悩んでいる。それ以外の様々な悩みを抱えている学生も少なからずいて、しかも、誰にも相談していない学生が多いことから、学生相談室の利用を含め、対応策が必要であろう。

「食事」については、朝食を食べない学生の多さは、健康面を考えると由々しい問題である。食育教育の実施に全学的に取り組む必要がある。しかし、それだけで問題は解決しない。学内の食環境を整える必要がある。自由記入欄に多くの声があるが、蔵本食堂の利用率を高めることが必須の課題である。食堂を利用しないで弁当を購入する学生が多いが、歯学部では講義室での食事が禁止されている。弁当を食べる場所を提供することも必要である。

「迷惑行為」について、クーリング・オフ制度を知っている学生が他学部と比べて少なく、悪徳商法の被害を受ける比率も高い。悪徳商法対策とクーリング・オフ制度の周知徹底が求められている。また、「教職員との会話・質問が多い学生」や「親しい教職員のいる学生」の比率が高いが、「セクハラ・アカ

ハラの被害を受けた学生が多い」のも歯学部の特徴である。このことは前回の調査でも指摘されていた。セクハラ・アカハラ被害と「教職員との会話・質問の多さ」や「親しい教職員の存在」との間には相関関係があり、「学生と教職員との垣根の低さ」の悪い面が出ている。また、技術修得という実学中心で、教員 学生が1対1で関わる人が多いという、歯学部特有の実習形態も関係する。歯学部では、卒業時アンケート調査の実施と結果への対応を、前回の学生生活実態調査以降行ってきたが、今後は、教職員への啓発を積極的に実施するとともに、相談体制を充実させる必要がある。

「勉学」については、1学年1クラスで学生数も少ないことから、指導しやすいように思われるが、授業への出席率は他学部学生とさほど変わらない。学年別で見ても、全ての学年で「出たり出なかつたりする」学生が10%前後いる。これらの学生は「殆どまたは全く出席しない」学生に移行する可能性をもつ。教職員間での連絡体制を整え、このような学生を早期発見する必要がある。また、出席しない理由として「授業に魅力がない」を挙げる学生が多い。授業に満足できない理由として、「教員の教え方に工夫が足りない」を挙げる学生が多い。教え方を工夫し、魅力ある講義ができるよう、FDの実施が必要である。カンニング経験をもつ学生は他学部比べてやや多い。卒業時アンケート調査で、学生のカンニング経験について、もっと詳細に調査をしてきた。これによると、全学共通教育でのカンニングが多い。カンニング防止には、広い試験室と、最低2名の監督員が必要である。学部ではこのような体制を取っており、カンニング防止に効果をあげている。全学共通教育での防止体制の確立が望まれる。

「課外活動」については、「サークルに加入している」または「加入経験をもつ」と答えた学生が多く86%を占める。特に体育会系への加入率が高い。歯科医師として、患者とのコミュニケーション能力は不可欠である。歯学部では、新入生合宿研修も含め、入学直後のあらゆる機会を捉え、「コミュニケーション能力を学ぶ場」としてサークルへの加入を促してきた。その成果の現れと考える。また、歯学部では、就職情報を先輩・知人から得る場合が多く、その面からもサークル加入の意義は大きい。ただ、大学祭やボランティア活動への参加は少ない。大学祭やボランティア活動も学生の社会性を高める上で有効である。今後、これらも含めた、課外活動への参加を促す努力を続ける必要がある。

9-4 薬学部

「本学を選んだ主な動機」として希望する学部学科があったからと答えた学生の割合が他学部比べて高く、薬学部では目的意識を持って入学した学生が比較的多いことになる。好ましい結果でありこのような状況を反映して、「学部・学科に満足している」学生の割合も高い(69%)。

「経済状況」については、薬学部では地元出身者が少なく、自宅通学者の割合が14%と他学部(全体では29%)に比べて低いことが影響している。すなわち、生活費が高額になる自宅外通学者が多いことを反映して奨学金の受給率(40%)が他学部(全体では33%)に比べて高くなっている。ところが、アルバイトに従事する時間はむしろ短く、その収入額も他学部学生に比べて低い。カリキュラムとの関係でアルバイトができる時間・日数に制限があるのであろう。一ヶ月の平均収入や支出が7万円未満である学生が約半数(50%)おり、経済状態がやや苦しい、大変苦しいと答えた学生は36%にもなる。授業料の値上げが最近決定されており、経済的に苦しい学生が増えることになるであろう。

「入学後の悩み」について、半数を超える学生(55%)が「勉学」に悩んでおり、24%の学生が授業に不満足であると答えている。「教員の教え方に工夫が足りない」(35%)、「授業内容がつまらない」(27%)、「授業内容が難しすぎて理解できない」(19%)がその主な理由となっている。試験においてカンニングをしたことのある学生の割合が前回調査(13%)と比べると、大幅に増加しており(20%)危惧される。カンニングをさせないよう、より厳正に試験監督を実施する必要がある。「自分は正当に成績評価を受けたが、カンニングをして高い評価を受けた学生がおり納得できない」との学生の意見も

ある。

「迷惑行為」については、大学全体での平均値よりは低いが、「大学内でセクハラを受けた」、「大学内でアカハラを受けた」と答えた学生が各々2名いる。何れも女子学生であり、これを無くす努力が教員には求められる。

「食事」について、常三島地区では昼食に多くの学生が大学食堂を利用しているが、薬学部では蔵本会館食堂を利用する学生よりもむしろ弁当を購入して食べる学生の割合のほうが多くなっている。学生生活実態調査の結果からメニューを増やしたり、食堂の席数を増やすなどの改善策が蔵本会館食堂に求められる。

「就職」について、将来は病院や薬局などにおける薬剤師としての専門職を希望する学生（45%）と、企業の研究職（21%）、大学・官公庁の教育・研究職（13%）、技術職（7%）等の研究関連職種を希望する学生とに大別され、両者はほぼ同数である。ただ約40%の学生が「就職や進路」について悩みや不安を抱いており、就職支援室との連携を保ちながら、よりきめの細かい就職指導や進路指導を行う必要がある。

9-5 工学部

今回の調査報告を基にして、工学部の現状と問題点をまとめてみる。

「工学部を選んだ理由」を図6-1から比率の大きい順に3項目選ぶと、「国立大学だから」、「希望する学部学科があったから」、「地元の大学だから」となっており、合計が60%強となることから、これらが工学部に入学する学生の平均的な姿を示していると思われる。経済的理由がやや強く出ているが、第6章に書かれているように目的意識の有無を示すものとして「希望する学部学科があったから」と「就職等将来を考慮して」を調べると、昼間コースで23%、夜間主コースで25%であり、医学、歯学、薬学の各学部と比べてかなり低くなっている。これは多数の一般的学生が入学することを考えればやむを得ないことではあるが、所属学部満足度（図6-2）や単位取得状況（図6-3）が上記3学部よりやや低いことと強い相関があると考えられるから、現在行っている高校生に対する学科紹介活動を更に強化するなど、目的意識を持った学生の入学を増やすための改善が必要であると考えられる。

「入学後の主な悩みや不安」としては図3-2から、「勉学（47%、52%）」、「就職や進路（39%、44%）」、「経済状態（27%、36%）」が上位を占めている。[括弧内は回答比率（昼間コース、夜間主コース）である。]

「勉学」に関しては、授業出席状況（図6-4）は他学部と変わらず（83%、89%）、殆ど出席しているが、単位取得状況（図6-3）に関しては「半分程度取得できた」、「あまり取得できなかった」、「まったく取得できなかった」の合計が（13%、11%）であり、他学部よりやや高くなっている。また、「全部取得できた」の比率は大幅に低い。授業の満足度（図6-9）については（21%、19%）が「やや不満足」、「不満足」と答えており、これらの不満足な学生の30%程度が「授業内容がつまらない」、25%程度が「教員の教え方に工夫が足りない」と答えている。授業方法改善の目安になるのではないだろうか。

「就職や進路」については図8-1から、公務員希望が25%程度、企業の技術職や研究職希望が50%以上となっている。また、進路を考える上での情報入手手段としては図6-16から、23%が就職情報誌等、18%が指導教員あるいは就職担当教員、約14%が先輩・知人となっている。就職や進路に関する学生の心配は当然のことであるが、工学部では各学科に就職担当教員が指名されているから、特に問題はないと考えられる。

「経済状態」に関しては、家庭の年間所得は図1-1から、500万円未満が（29%、49%）、500～

750万円未満が(31%, 25%), 750～1000万円未満が(21%, 16%)等となっており、昼間コースと夜間主コースの両方とも前回調査より低所得側へシフトしている。学生本人の経済状況は図2-3から、「やや苦しい」と「大変苦しい」の合計が(39%, 43%)となっており、前回調査と比べて昼間コースでは8%増加、夜間主コースでは8%減少している。アルバイト従事日数は図2-5から、昼間コースでは週3日が最も多く、夜間主コースでは週5日が最も多い。平均時間は、図2-6で時間区分の右端を代表値として用い、25時間以上の場合には30時間を代表値として計算すると、昼間コースでは週15時間、夜間主コースでは週20時間となる。この時間数は前回調査に比べて昼間コースでは1時間増加、夜間主コースでは1時間減少し、上記の経済状況と同じ傾向を示すと共に、両コース学生のアルバイト時間が接近しつつあることを示している。これらのアルバイト時間はかなり長いので、授業への影響がどうなっているか検討する必要があると思われる。

「昼食の利用場所」については図4-5で、昼間コースでは「第1食堂」が41%、「第2食堂」が9%、「弁当を購入」が12%等となっている。昼食時の混雑緩和のためにも第2食堂の利用率が向上する方策を大学として考える必要があるだろう。

「サークルへの加入状況」は図7-1から、何らかのサークルに入っている学生が(53%, 37%)であり、前回調査より加入者数が増加している。

「迷惑行為」については第5章に記載されているように、昼夜間共に男子で約30%、女子で約40%が何らかの迷惑行為を受けている。このうち「大学内でセクハラ被害を受けたことがある」人数は男子で(10人, 2人)、女子で(5人, 1人)であり、「大学内でアカハラ被害を受けたことがある」人数は男子で(27人, 6人)である。女子のアカハラ被害はない。工学部としてはこのような被害をなくすための改善策を検討する必要があると思われる。

第10章 総括と提言

調査結果を全学的視野で総括し、学生生活の支援の立場から、徳島大学の構成員である学生と教職員の全員への提言としてまとめてみたい。

徳島大学の学生の家庭の年間所得が工学部夜間の学生で500万円未満が約半数49%で、全学平均29%を大きく上回っている。前回4年前の調査結果に比して、工学部夜間で9.2%、全学で5%増加している。これはバブル期以降の不況の改善が進んでいないことを反映していると見ることができる。また、収入・支出で「大変苦しい経済状況」と回答した者が工学部夜間の学生で16%(21%)、全学的には11%(9.5%)である。[()内は前回調査結果] この数値は現在の授業料免除、すなわち全額免除と半額免除の合計5.8%に比べ、約2倍である。経済状況が大変苦しい学生への生活支援には授業料免除枠の変更を含めて、改善が必要であり、生活支援室の重要な課題である。

学生の毎日の生活の状況を知る上で重要な「不安や悩み」についての調査項目では、顕著な結果として、現在の精神状態の項目で歯学部学生の「充実している」と回答している者が、他学部 비해10%以上も多いことが注目される。全学的に見て、前回の調査結果と同様に、学部に対する満足感とも比較的相关することから、専門的職業のためという目標のはっきりした勉学には学生自身が充実感を得ていることが伺える。この点に、徳島大学の基本構想にも謳ってある「学生の多様な個性を尊重して、人間性に富む人格形成を促す教育を行い、優れた専門能力と、自立して未来社会の諸問題に立ち向かう進取の気風を身に付けた人材の育成に努める。」という機関目標へつながる手がかりが存在している。学生の充実感を一層高め、進取の気風を身に付けていくために(1)教育内容の点検と改善、充実、(2)勉学環境の一層の充実、が必要であるといえる。学生生活支援室では教務委員会や施設部とも協議していきたい。

一方、悩みの相談の相手としては、友人、家族が多いものの、全体的にはほぼ2-3割程度の者が誰とも相談しないことも見逃せない。学生との接点の多い「教員」や「学生相談室」の活動の余地が十分存在することが伺える。さらに、「相談できないでいる学生」をいかに見だし、悩みの解決に至る方法を提供することや相談できる場所の周知徹底をはかることが重要と言える。教員側としては、普段の授業の中で、各教員が単に勉強を教えるだけでなく、出席率の悪い学生を中心に、学生への目配り、気配りも必要であることを示している。これに関連して「保健管理センター」についても、場所を知らない学生が蔵本キャンパスの学生に多いことが目立っている。教員、学生相談室、保健管理センターの役割や設置の趣旨に照らし、今後大学運営の上で改善につなげることが必要だといえる。

健康な学生生活を送るための「食事」の面では、工学部第2食堂と蔵本会館食堂の利用率がきわめて悪いことが判明した。メニューの栄養学的内容、味付けや価格といった点のみならず、大学内のアメニティーの一つとしての環境という立場からも再検討され、改善される必要がある。法人化後には、徳島大学病院にコーヒーのチェーン店が開店したことなど、大学側に運営の自由度が増してきている。大学としては、単に食事の提供だけにとどまらず、生協のように食事メニューごとのカロリー表示や栄養のバランスの意味も提示しつつ、食事本来の意義を伝えることが重要である。また、食事をする場所も夏暑く、衛生上も食堂としての環境が良いとは言えない。大学内の食堂としての環境を整えることや食事を楽しむという意味でのアメニティーの改善が図られることが肝要といえる。

さらに、蔵本キャンパスでは、頻繁に改修工事が行なわれていることから、常三島のようなベンチやテントでできた学生の憩いや交流の場の整備や講義棟近くの駐輪場といった整備が遅れている。これらの点については大学本部、施設マネジメント部、各学部等の協力を得ながら、協議し、実施されるように求めていくことが生活支援室としての課題でもある。

「大学生活での迷惑行為」では、世相を反映し、犯罪と関連することがらも見受けられる。セクハラ・

アカハラ等についての意識を高めるとともに、積極的にこれらの迷惑行為の発生予防に努める必要があるといえる。このために、学生相談室とも連携をとり、セクハラ・アカハラ防止のための啓蒙活動の機会を設けることや相談場所の周知徹底を大学入門講座等で案内するなどの方策が今後一層必要である。

学生にとって大学との日常的な接点である「大学事務室の対応」では、約3割の学生が何らかの不満を示している。時代の変化に応じて、変化した価値観、すなわち「事務職員も学生に対するサービス部門である」ということを周知徹底するために、Staff Development (SD)¹⁾を実施することが教員に対するFaculty Development (FD)²⁾を推進すると同様に必要である。一方、事務室へ相談に行く学生側の態度に問題がないとも言えないことから、この点でも大学入門講座や普段の授業を通じて、サービスを受ける際の学生への指導も必要といえる。

「修学・進路」の項では、目立つ結果として「カンニング」の問題がある。カンニングなどの不正行為については前回の調査で全学平均18%に比べて、今回は22%と増加している。歯学部、医学部で高い傾向がある。不正行為に対する倫理観・罪悪感の欠如は教育機関としては見逃せないところである。大学としていかにモラルハザードに対応していくのか問われている。このためには、教員は常日頃から、カンニングが悪いことであると言っていく必要がある。教務委員会の協力も得て、全学的なキャンペーンを行なって、カンニングというモラルハザードに対応していくことを考えていきたい。また、カンニング防止のための環境面での整備や講義室の整備を行ないながら、着席方法や試験監督の方法を改善するために全学共通センターや教務委員会と協力しながら改善をはかっていきたい。

就職における情報収集の方法は、学部間で異なっている。職種毎の事情を踏まえて進路指導に生かす事が必要である。医師や歯科医師の卒後研修の必修化も進学率に大きく影響を与えることが指摘されており、見逃せない制度変化の一つである。就職活動を支援するためには、就職に関する情報提供を積極的に実施し、また、東京や大阪に設置した徳島大学のサテライトを学生が利用し、就職活動に活用することもできるような方策を考案することも必要であろう。

学生は入学した時点から卒業するまで、つまり入口から出口まで徳島大学の主要な構成員である。今回の調査結果を踏まえ、学生が望んでいること、必要なこと、支援されるべきことが「経済支援、充実感、悩み相談、アメニティー、トラブル回避、SD、倫理観、就職支援」といったキーワードで整理される。今回の調査結果は徳島大学の基本構想を展開していく上で非常に参考になるものである。学生生活支援室としては今回の調査結果を通して得られた学生の動向を踏まえ、学生相談室や就職支援室と協力して、積極的に学生支援活動を行なっていきたいと考えている。このためにも徳島大学の構成員の方々に、ひろくご意見やご提案を受け賜りたいところである。

注)

- 1) Staff Development (SD) とは、事務職員の意識を高め、教育機関の一員としての能力を一層開発することにより、教育支援の向上をはかること。
- 2) Faculty Development (FD) とは、個々の教員の教育に関する意識を高め、教育能力を一層開発することにより、教育機関の教育水準を向上させること。

あ と が き

今回の徳島大学学生生活実態調査では、全学部学生 5,904 名を対象にし、4,218 名 (71.4%) の回答を得た。前回の調査は平成 12 年 12 月に実施されているので、この間 4 年が経過している。今回の調査の特色は、生活実態の調査を徹底するために抽出調査ではなく、全学部学生に調査対象を広げたことと、その後の調査・分析を効率化するためにマークシート方式で対応したことである。調査から報告までの期間が短かったことで多大な負担が委員各位にあったことは否めないが、新学期に入学してくる学生諸君を含めて、なるべく早く得られた結果を全学にフィードバックしたいという基本方針を貫いた。

本調査を実施するにあたって、まず常三島キャンパスの小西委員と蔵本キャンパスの落合委員にワーキングメンバーとなって頂き、調査項目の選定を行なった。ついで、運営会議で確認の上、調査を実施した。昨年末、調査表回収後直ちに調査資料を各学部委員に配布し、データ整理と分析を進め、1 月初めから学生生活支援室会議とワーキングメンバー会議を経て、3 月に報告書をまとめるに至った。この間、入試、成績評価、卒論指導、学位審査といった、教員にとっては 1 年の中でも特別に多忙な時期であったため、各学部委員全員の並々ならぬ御協力を頂いたことは疑いもなく、この場をおかりし、深く感謝と御礼を申し上げたい。また、御協力を頂いた学部学生諸君と本作業のはじめから最後まで支援して頂いた学生課の諸氏にも心から感謝申し上げたい。

学生生活支援室としては、本調査結果を徳島大学の構成員全員に知って頂き、平成 17 年度新学期早々から御活用頂くことで、大学の教育や運営に反映されていくことを期待している。

平成 17 年 3 月

学生生活支援室長

野 間 隆 文

Campus Life

キャンパスライフ

第22回学生生活実態調査報告書

平成17年3月

徳島大学